トヨタ財団
1992(平成4)年度年次報告

目次

目次 …… 2
凡例 …… 3
理事・監事 …… 4
評議員 …… 5
助成財団とその仕事　飯島宗一 …… 6
市民活動の社会的確立を目指して　渡辺　元 …… 8
「隣人をよく知ろう」プログラム・新展開の５年間　牧田東一 ……12
Ⅰ．研究助成
Ⅰ-0.研究助成の概要 ……18
Ⅰ-1.第Ⅰ種研究（個人奨励研究） ……21
Ⅰ-2.第Ⅱ種研究（試行・準備研究） ……29
Ⅰ-3.第Ⅲ種研究（総合研究） ……35
Ⅱ．市民研究コンクール
Ⅱ-0.市民研究コンクールの概要 ……40
Ⅱ-1.第５回研究コンクールフォローアップ助成 ……41
Ⅱ-2.第６回市民研究コンクール本研究助成対象 ……42
Ⅲ．市民活動助成
Ⅲ-0.市民活動助成の概要 ……46
Ⅲ-1.市民活動助成（第１期） ……48
Ⅲ-2.市民活動助成（第２期） ……49
Ⅳ．国際助成
Ⅳ-0.国際助成の概要 ……56
Ⅳ-1.国際助成対象 ……57
Ⅳ-2.国際助成 マレーシア東南アジア研究奨励助成 ……77
Ⅴ．インドネシア若手研究助成
Ⅴ-0.インドネシア若手研究助成の概要 ……80
Ⅴ-1.インドネシア若手研究助成対象 ……81

VI.「隣人をよく知ろう」プログラム
VI-0.プログラムの概要 ……88
VI-1.日本向け・翻訳出版促進助成 ……89
VI-2.アジア相互間・翻訳出版促進助成 ……94
VI-3.東南アジア諸語辞書編纂出版助成 ……99
VII. その他の助成
VII-0.その他の助成の概要 ……102
VII-1.計画助成 ……103
VII-2.成果発表助成 ……108
VIII. 会計報告・事業日誌
VIII-0.事業実績の概要 ……112
VIII-1.1992（平成4）年度会計報告 ……114
VIII-2.1992（平成4）年度事業日誌 ……117

凡例

1．財団法人トヨタ財団は，1974（昭和49）年10月15日，トヨタ自動車工業株式会社及びトヨタ自動車販売株式会社(両社は1982年7月1日合併し，トヨタ自動車株式会社となりました）の出捐に基づき，総理府より設立許可を受けた民間助成財団です。

2．当財団では，1975年度以来毎年度，和文・英文の年次報告書を作成し，広く関係者にお配りしております。

3．この年次報告書は，1993年6月29日の第67回理事会において承認されました「平成4年度事業報告書」に基づき，当財団の1992（平成4）年度（1992年4月1日～1993年3月31日）の事業内容をとりまとめたものです。

4．本報告書中の助成対象一覧は，いずれも助成決定時のものであり，決定以後の変更は割愛しました。ただしこれまでの助成対象について助成金額の変更があったものについては，会計報告欄にそれを記載しました。

5．本報告書中の助成概要は，いずれも助成決定時における計画の概要であり，助成による研究等の成果ではありません。これらの概要は，助成対象者からの提出書類に基づき，財団事務局にて作成したものであり，文責は当財団にあります。

6．当財団では，和・英文の年次報告のほか，年4回「トヨタ財団レポート」を発行しており，これらは希望者に無料でお配りしておりますので，御希望の方は官製ハガキで当財団事務局あて，お申しこみください。

理事・監事

1993(平成5)年3月31日現在(五十音順・敬称略)

会長	豊田英二	トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長
理事長	飯島宗一	愛知芸術文化センター総長 名古屋大学・広島大学名誉教授
常務理事	山口日出夫	
理事	天城 勲	文部省顧問
	石井米雄	上智大学教授，京都大学名誉教授
	大島正光	財団法人 医療情報システム開発センター理事長
	加藤一郎	成城学園学園長，弁護士，東京大学名誉教授
	加藤誠之	トヨタ自動車株式会社顧問
	神尾秀雄	千代田火災海上保険株式会社取締役会長
	草場敏郎	日本銀行政策委員会委員
	冨永誠美	社団法人 日本交通科学協議会会長
	松本 清	日本フライングサービス株式会社取締役会長
監事	伊藤 哲	公認会計士
	菊池 稔	東京海上火災保険株式会社相談役

評議員

1993(平成5)年3月31日現在(五十音順・敬称略)

飯島宗一	財団法人 トヨタ財団理事長，名古屋大学・広島大学名誉教授
岡本道雄	京都大学名誉教授
加藤誠之	トヨタ自動車株式会社顧問，財団法人 トヨタ財団理事
楠 兼敬	トヨタ自動車株式会社相談役
小林清志	豊田工業大学学長
小山五郎	株式会社 さくら銀行相談役・名誉会長
佐伯喜一	財団法人 世界平和研究所常任顧問
杉浦敏介	株式会社 日本長期信用銀行相談役
辻 源太郎	トヨタ自動車株式会社相談役
豊田英二	トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長，財団法人 トヨタ財団会長
豊田章一郎	トヨタ自動車株式会社取締役会長
永井道雄	財団法人 国際文化会館理事長
縫田曄子	ジャーナリスト
沼田 真	千葉大学名誉教授
林 健太郎	東京大学名誉教授
林 雄二郎	東京情報大学学長
平尾 收	東京大学名誉教授
本明 寛	早稲田大学名誉教授，女子美術大学理事長
森 秀太郎	財団法人 トヨタ財団前副理事長
盛田昭夫	ソニー株式会社取締役会長
渡辺 武	財団法人 損害保険事業総合研究所会長

助成財団とその仕事

トヨタ財団　理事長
飯島宗一

トヨタ財団は近く設立20周年を迎える。この間，財団はさまざまな経験を重ね，設立の初心に従って仕事を展開し，精一杯その任務を果たしてきたといえるだろう。それはあながち私ども関係者の自己満足ではなく，国の内外から客観的な，かつ好意的ないくつかの評価も賜っているのである。財団がそのような成果を収め得て，今日に至っているのには，いろいろの要因が挙げられるが，助成事業そのものに専念し，それをいわば専門の業とする職員およびプログラム・オフィサーを財団組織として擁していることを第1に指摘すべきであると思われる。それに加えて，彼らの業務を助け，指導し，分野に応じて補ってくださっている各プロジェクトごとの選考委員の力に負うところがきわめて大きい。それらの人々のお名前は諸般の配慮から公表していないが，財団設立以来から数えれば非常な多数に上る。毎回熱心に選考のことにあたってくださり，その知性と見識の余慶を財団は享受してきたのである。

これらの事柄は，パブリックな助成財団としては実は当たり前のことだが，基金の規模やまた適切な人材を容易には得がたいこともあって，わが国の場合必ずしも常に実現し得るとは限らない。トヨタ財団の場合，完璧といわないまでも当初から体制として確立し得たことは幸いであったといわなければならない。もともと，プログラム・オフィサーのような職種はかつての日本では正統的には成立し得なかったプロフェッションで，いまでも十分に安定し得たものとはみなしがたい。しかし最近では公共施設の学芸員，アート・マネージャー，試験研究機関などのアドミニストレーター等の専門性，処遇，養成，重要性などが次第に認識されつつあり，それらを志す意欲的青年も少なくない。助成財団も配慮すべき点の1つであろう。

このような助成財団としての基本的骨組みがしっかりしていても，理事会・評議員会を中心に，助成財団として独自の運営が可能であるような条件で管理が行われなければ，助成財団の本来の使命は発揮できない。トヨタ財団は，その基金の出資者がトヨタ自動車株式会社であるという点では一種の企業財団だが，会社は「財団発足にあたり，出捐企業としては財団の自主性を尊重すると決めています。それは企業の枠を越え，社会のニーズに生き生きと反応し，のびのびとした財団活動が必要であると考えたからです」と豊田英二会長が述べているとおり，実態においては独立財団に近い運営が終始可能であった。それに応じたトヨタ財団理事会の良識も評価に価するものである。会社関係者のなかから，しばしば「財団はいったい何をやっているのか，地味すぎて目に見えない。会社の役に立っているんだろうか」という声もあったようである。しかし，企業フィランソロピーのあり方があらためて問われているいま，豊田英二会長の示された会社のスタンスは，企業フィランソロピーの正道ではあるまいか。アメリカの企業財団のあり方にあきたらぬアメリカの識者が，日本の小さなトヨタ財団に惚れ込んでいてくださるのはおそらくそのためである。

以上，私は財団理事長としては少々自分の財団をほめすぎたようである。しかし，述べたいことの本旨は，このように助成財団としての条件を最低限満たしていると自認してもよいと思われるわがトヨタ財団にあっても，実は課題が山積みしているということである。なかでも最も大きな問題は，財団をめぐる諸状況が激しく流動しているという点にある。広くはいわゆる冷戦の終結を端緒に国際情勢は変転を遂げ，政治・経済・思想・文化等各方面の行方は定まらない。途上国，第三世界といわれる国々もそれぞれに変貌が著しい。そのなかにあって日本の立場，役割，運命も容易ならざるものがあるのは現実である。また国内について見ても，学術研究，市民生活，市民活動，国際協力の各分野に新しい課題を生じている。それらへの適切な対応の過程での助成財団の活動も厳しく見直されなくてはならぬであろう。しかも時勢に応じつつ助成活動の期する不易の根幹に根ざした，財団の理想が絶えず鍛えられなくてはならない。小財団といえども，その運営の責任は重いことを思わざるを得ないのである。

市民活動の社会的確立を目指して

トヨタ財団　国内助成部門　プログラム・オフィサー
渡辺　元

●市民活動の意義と重要性

ここ数年来の世界の動向には目まぐるしいものがある。そして，こうした社会環境の激変に伴い，既存の価値や制度もまた，世界的な規模で揺らぎ始めている。このことは，国家という枠組みをも含んだ社会システム全体のあり様への問いかけでもあり，新しい民主化へ向けての動き（リデモクラタイゼーション）ともとらえることができよう。同時に，日本においては，とりわけ意識と生活様態の面で，個人のあり方が大きく問われ出しているものと思われる。多様化し，流動化の激しい国際環境に連動して発生する膨大な問題や課題に対しては，政府・行政や企業など，既成の社会的主体のみから一元的に対処していくことは次第に限界に達しつつある。

にもかかわらず，物質的豊かさの達成を最優先課題に，経済成長至上主義の下，何事においても集団主義的管理・統括によって効率化を追及してきた日本では，依然として行政や企業に“人・もの・金・情報・権限”などの資源と力が偏在したままとなっている。本来の人間性に立脚した形で，個人と社会のあり様を模索していくうえでも，今後は，それらの資源や力を的確に分散していく社会システムの検討が望まれる。

その意味でも，行政や企業とは異なる論理に基づく民間非営利活動の充実と発展が強く期待されるわけであり，なかでも，「草の根」の視点に基づく市民による実践活動の重要性は，今後ますます大きなものとなっていくだろう。実際，さまざまな社会的背景を伴った市民による自発的な社会活動（以下，市民活動と記す）が，近年，各地で活発に展開されている。

絶滅の危機にある生物の保護や自然環境の保全を目的とした活動，安全な食べ物を追求し既存の「農」のあり様を見直そうとする活動，障害者や痴呆老人のための支援活動，管理で抑圧されない自由な学びの場を創出しようとする試み，差別や偏見にさらされている人々の人権擁護を目指した活動，途上国の飢餓や貧困を救おうとする活動等々，この種の活動に関連する記事や報道は，以前と比較して飛躍的に紹介されるようになってきた。

いまでは多くの人々にその存在が知られるようになり，最近では，助成財団のみならず，行政や企業による支援やかかわりなども増してきたこうした活動も，その基盤は総体としていまだきわめて脆弱であり，一方，それらを支える思想や制度も未発達のままである。こうした状況が，市民活動全般の成長と広がりにとっての大きな「障壁」となっているものと考える。

●「市民活動助成」のこれまでの経緯

トヨタ財団では，従来より，研究助成としては学者・研究者といった「専門家」以外の人々による研究プロジェクトへの助成も行うとともに，1979年度からは“身近な環境をみつめよう”をテーマに，地域に密着した市民参加型の研究活動をコンクール方式にて支援してきた。こうした実績と体験に基づき，1984年度からは，独創的で先駆的な活動を展開している多くの市民団体をバック・アップすることを目的とした助成プログラムを開始することとなり，これまで以下のような経緯をたどってきた。

［1984～85年度］

助成開始当初にあたるこの期間は，その実施を「研究助成・特定課題」として，研究助成の枠組みのなかで試行的に行った。助成内容としては，さまざまな活動の体験を共有することを目的に，「活動記録の作成」を対象と

し，公募は年1回，助成総額は2,000万円であった。

［1986～87年度］

1986年度からは，「記録の作成」に対する助成に加え，これまでの助成で作成された「記録の出版」に対する助成も行うことになった。この段階で，「活動記録助成」として，研究助成の枠から独立して実施することとし，助成総額も2,500万円に増額した。

［1988～89年度］

1988年度からは，活動記録の作成や出版に対する助成を継続しながらも，それら以外の案件にも助成の道を開く試みとして，これを「活動交流促進プロジェクト」として非公募・計画型にて実施することとなった。ここでは，活動の交流をいっそう促進し，結果として，市民活動全体の向上に役立つ種々のプロジェクトを助成の対象とすることを目的とした。そして，これに伴い，プログラム名称も「市民活動助成」と改めた。

［1990年度～現在］

1990年度からは，先の「活動交流促進プロジェクト」への助成経験に基づき，市民活動全体の活性化と質的向上の契機とすることを助成の趣旨に，該当するプロジェクトをすべて公募にて実施することとなった。

対象とする内容としては，①これまでの活動に関する「記録」の作成，②すでに作成された「記録」等の出版，③複数の活動団体相互の連携による集会の開催・運営，および成果のとりまとめ，④多くの活動団体を対象とした情報紙・誌の編集・発行，⑤一定の分野・地域における活動拠点，および，これに準ずる団体の基盤整備，⑥他の分野の活動を一定期間にわたって体験するための人的交流，⑦市民活動全体の支援を目指した調査や研究，などである。そして，この時点で，公募をこれまでの年1回から2回(第1期：春，第2期：秋)へと増やし，助成総額も3,500万円とした。

●本年度の助成について

1992年度の市民活動助成については，第1期に125件，第2期に85件の申請があり，それぞれの選考委員会での審査を経て，後掲のとおり，第1期：10件（合計1,770万円），第2期：9件(合計1,730万円)が助成の対象となった。

今回の申請全体に関する特徴として，まず挙げられることは，申請件数がこれまでに比べ，飛躍的に増加したことである。これについては，本助成の存在が時間の経過とともに広く浸透してきたこと，活動団体の量的増加と質的な多様化，この種の分野における他のセクターのかかわり（たとえば，行政の基金による支援や社会貢献活動としての企業の取組みなど）による影響などが考えられる。なお，これらの申請を地域別にみると，東京・神奈川を主とする関東地域および大阪を中心とする関西地域といった，言わば大都市圏に拠点をおく団体からの申請が圧倒的に多く，それ以外の地域からの申請は，これまで同様，少数であった。

テーマの面では，地域・街づくり，環境保護・保全，障害者の自立，東南アジアを主とする開発途上国の問題等にかかわるもの，および，市民社会の基盤づくりに役立とうとするものなど，近年の社会変化に敏感に反応し，“草の根”の視点で自立的に活動していこうとする意欲を伴ったものが増えている。このことからも，昨今の市民活動が，ポリシーを有したネットワーク形成型の活動に成長しつつあること，また，これに伴い，その経済的基盤や組織のあり方を，いまだ模索の段階とはいえ，自覚的に求める徴候がみえるようになったことが指摘できよう。ただし，一方では，大都市圏以外の地域からの申請は平均して依然と少なく，市民社会としての地域社会の熟成いまだしの感も否めない。

しかし，助成の対象となったプロジェクトは，いずれも力量または可能性を感じさせるものであり，従来の助成制度に乗りにくかった都市圏以外の地域の活動，および，比較的活動歴は浅くとも将来性を強く感じさせる活動が顕著である。また，それらの多くはしっかりとした事務局を備え，なんらかの点で国際的なかかわりを有しながら，しかも地域に根ざした形で展開されており，活動の広がりと深さを感じさせる興味深いものである。それぞれの今後の成果の波及をおおいに期待したいと思う。

なかでも，継続助成となった「日本湿地ネットワーク(JAWAN)」による『日本に残されている貴重な湿地の保護・保全の運動』，および，「日本国際ボランティアセンタ

ー（JVC）山形」による『山形県全域に激増している外国人花嫁への日本語教育・医療ケア，そして日本人家族へのアプローチ』の２件のプロジェクトについては特に注目したい。これらはいずれも，「環境」や「国際化」といった，ある意味で現在の時流に即したテーマであるということだけでなく，その背景には，行政システムをも含む，日本社会の抱える奥の深い問題を内抱しているからである。

前者は，鳥類に限らず，人間をも含めたあらゆる生物にとって重要な生態系の１つとしての「湿地」を保護し，保全していくための活動である。これはまさに，「ラムサール条約」（正式には「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」）に沿った活動であるが，問題は，この条約に加盟しているわが国で，なぜこのような活動をしなければならないか，ということである。工業化や宅地化の進行が著しい日本では，「開発」という名の下，至る所で山は削られ，川は直線化・暗渠化され，海は埋め立てられており，当然のことながら，湿地や干潟もその波にさらされている。そして，こうした行為の裏側には，さまざまな業者や行政の思惑が複雑に入り組んでいることも事実として指摘されて久しい。こうした状況下，湿地はもとより，生態系にかなった環境の保護・保全はきわめて困難なことであり，国政レベルの対応のみでは限界および問題があろう。

ここに，JAWANの活動とそのプロジェクトの意義を見出すことができる。そして，前年度の成果を踏まえて企てられる今回の「国際湿地シンポジウム 1993・釧路」は，湿地の「持続的な賢明な利用方法」について，先住民の自然観・生活態度と相乗化することで，別途政府間レベルで開催される「ラムサール会議」に適切かつ効果的な影響を与えようとする試みである。市民による政策的な提言活動の一例として，その成果を期待したい。

後者は，現在各地で抱える「外国人花嫁と周囲の戸惑い」の問題に，市民の英知を結集して，できることから果敢に取り組んでいこうとするプロジェクトである。昨今の農村地域では，農業の不振，急激な過疎化，農家の「嫁不足」などを背景に，地域ぐるみでの花嫁探しが各地でみられる。しかし，“花嫁”というキレイなことばとは裏腹に，その実態には多くの深刻な問題が伴っていることはあまり知られていない。言語や食べ物や生活習慣をはじめとする，違い過ぎる「文化の壁」に阻まれ，孤独にさいなまれながら悩み，苦しんでいる女性は多いが，これを直視し，打開の道を見出そうとする動きはまだ少ない。後継者の確保を前提に，「嫁不足」への直接的な対応を重視するあまり，彼女らの人権に対する配慮を欠いた状況にはおおいに問題があるが，一方で，こうした状況の背後にある日本の農業政策や地域政策のあり様もまた，問われよう。

JVC山形では，前年度の助成によって立ち上がった４つの「日本語学校」や「外国人医療情報センター」，および，各国の「理解講座」の運営を本年度も引き続き行うとともに，今回は特に，日本語教師や医療通訳者の養成といったソフト面の充実を図ろうとしている。さらに，“花嫁”の母国にあたる国々において，日本の実状に関する真の情報を提供することを目的としたシンポジウムも計画している。「国際化」がしきりに叫ばれる昨今の日本だが，国際化とは，異質の価値観や考えを受容できて初めて可能となるものだろう。しかし，制度や意識の面で，これに対応できる状況にあるとは，まだまだとても言い難い。今回のような試みが，こうした状況を少しでも変えていく手がかりになることを願ってやまない。

さて，こうした「市民活動助成」の実施・運営を通した体験からも，最近の市民活動の多様化と質的な変化・向上を実感することができる。と同時に，今後の社会における大きな意義と可能性をも感じる。単なる「奉仕活動」や感情的な「反対運動」，あるいは利己的な「要求運動」に終わることなく，小さくとも適切な社会的影響力を伴う活動を進めていくためにも，活動の自立と展開方法に関するより本格的な検討が，今後，真剣に行われる必要があろう。

●必要な，活動の「自立」

ところで，このような活動に関する先駆的な事例の豊富な欧米では，そうした活動を認知し，支援していくための制度や機関が存在する。そのような制度を活用して創り出されるのが，たとえば，NPO（Non-Profit Organi-

zation)と呼ばれる民間非営利の法人組織（注1）である。これらは，政府や行政の活動を補完する場合もあるが，むしろ，それらでは対処しきれない社会の「隙間」を埋める，ある種公共的な役割を担う存在として重要視されている。

1992年10月31日～11月8日にかけ，“ネットワーキングを形に！～個人と社会の新しいあり方を考える～”と題した第2回日本ネットワーカーズ・フォーラム（注2)が，「日本ネットワーカーズ会議」の主催により，アメリカのNPO関係者等も交え，川崎・大阪・名古屋で順次開催された。

ここでは，市民活動における「ネットワーキング」を，社会的にインパクトあるものとしていくための方策について，1)日本におけるNPO創出の可能性，2)市民活動のためのマネジメント，3)市民活動と企業等とのパートナーシップのあり方，などを主な柱に，今後の新たな社会システムの展望が議論されるとともに，それぞれの立場を越えた個人のあり方についても，グローバルな視点からの問い直しがなされた。そして，今後の日本における市民によるこの種公益的な活動の役割がもつ重要性を高めていくことが確認され，そのための視点と行動として次の点が提起された。すなわち，①市民活動を社会的に確立していく際の視点として，ボランタリズムと民間の立場を重視すべきこと，②現在の市民活動団体そのものの活動および組織の強化と自立を推進すること，③企業の社会貢献活動の見識ある拡充と定着，④市民活動と企業・行政とのパートナーシップのあり方に関する検討，⑤市民活動を支援するための機能と組織および制度の検討，⑥市民活動間の協働のためのネットワークの必要性，などである。

このときのアメリカ側参加者による報告からも，欧米におけるその種の活動が「自立した組織に拠る成熟した活動」であることがあらためて印象づけられた。マネジメントの確立や財源確保の面はいうに及ばず，関係者1人ひとりにみられる高い社会的意識，さらには，これらを踏まえての積極的な社会的提案・提言活動など，足腰のしっかりとした活動を行うために必要な事柄やノウ・ハウが，システムとして組織と活動のなかに組み込まれている。このことは，彼らNPO関係者が，社会のなかでの自らの位置づけと役割を常に意識していることを示すものであり，他方，その存在や意義に対する一般市民をも含めた社会全体としての共通した「認識」が底流にあるからだと考える。すなわち，「個」の確立を第一義的に考え，それゆえ，自分のことはできるだけ自分で決め，行動することを旨とする「市民」と，そのような人々で構成される「市民社会」の確立を見出すことができる。

(注1)アメリカの場合，NPOの定義は州によって若干異なるが，一般的には，法人化および州税控除の特典が州政府より認可され，さらに，日本の国税局に相当する内国歳入庁（IRS）より，内国歳入令「501(C)(3)」に準拠する慈善団体としての登録がなされ，連邦税の控除が認可された非営利の法人組織を指す。アメリカでは現在，このような組織がおよそ150万団体程度あるという。

(注2)このフォーラムの準備と開催にあたっては，第1回に引き続き，当財団から助成（計画助成）が行われた。
なお，第1回のフォーラムは，“ネットワーキングが開く新しい社会”をテーマに，1989年11月，東京と大阪にて開催された。そこでは，市民活動の新しいコンセプトとしてネットワーキングの重要性が認識されるとともに，これを新しい社会システムの構築に向けて深化させていくこと，などが提起された。

●おわりに

最後に，こうした市民活動を，社会的にインパクトのある，より高次な公益活動（市民公益活動）へ導き，その社会的位置づけを確立し，多様性ある社会の創出を図っていくためにも，活動基盤の強化，活動体自身による調査・研究機能の向上，ネットワーキングの推進，支援の制度や機関の追究，思想的背景としてのフィランソロピーの普及，などに関する論議が，社会全体として多角的な観点から活発に行われる必要があろう。

市民活動に対する支援を他に先駆けて実施してきた当財団としても，以上の点を考慮に入れながら，今後は，市民自身の創造性の開拓とそれに基づく主体的な活動の発展にさらに貢献していくことを目指し，より先駆的で柔軟な助成活動を心がけていきたいと考えている。

「隣人をよく知ろう」プログラム・新展開の5年間
——1988年から1992年まで——

トヨタ財団　国際助成部門　プログラム・オフィサー
牧田東一

●はじめに

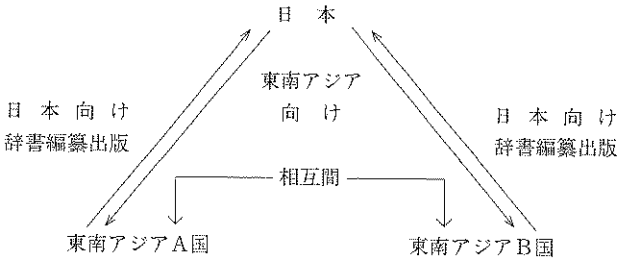
「隣人をよく知ろう」プログラムは1978年度に開始され，1992年度で15年目を迎えた。プログラム開始以来11～15年目までの5年間（1988～1992年まで）は，プログラムが対象とする地域，しくみなどの面で大きく変化していった時期である。このプログラムは複合的なプログラムのため，短期間に一気に変えることはできず，プログラムの評価，新展開の企画・調査，既存のプログラム構成の整理など一連の改革に5年を要したのである。この報告では，この5年間のプログラムの展開について通時的に追いながら，プログラム・スタッフがどう考えてプログラムの変更を行ってきたのかを報告したい。最初に特に大きな変更となった日本向けプログラムについてより多くの紙面を割いて説明し，最後に東南アジア向け・同相互間プログラムについて触れたい。

●プログラムのしくみ

プログラム改変について述べる前に，読者の便宜のため「隣人をよく知ろう」プログラムのしくみの概略を示しておこう（詳細は，年報の該当箇所を参照していただきたい）。1978年に，日本向けプログラムだけでスタートしたプログラムは，順次，東南アジア諸語辞書編纂出版助成，東南アジア向け，東南アジア相互間というサブ・プログラムを増やしていき，最終的に1983年からは4つのサブ・プログラムからなる助成プログラムとなった。全体は，模式図のような構成となっている。

●何が問題だったか

「隣人をよく知ろう」プログラム（日本向け）はある意味では，日本および東南アジアの国々の有識者にたいへん高く評価されてきた。それにもかかわらず，11年目以降さまざまな面でしくみを変更しなければならなかった。問題は何だったのか。



助成プログラム構成

実は，それ以前から次のようないくつかの問題がスタッフの間では議論されていた。

①助成金を受けて日本語に翻訳・出版された東南アジアの文学などの翻訳書の売れ行きが芳しくない。通常，1,000～2,000部程度の初版を5～10年かけて売る。この状況に大きな変化はみられなかった。いずれ，ベスト・セラーが出れば読者の認識が変わって売れるようになる，といった楽観論も10年たつとさすがに通用しなくなった。翻訳出版されても，多くの人に読まれないならばなんの意味があるのかといった疑問がスタッフの胸をよぎったことも事実である。映像メディアなどと比べて，本というメディアが時代に合わないのではないかといった議論もなされた。

②翻訳点数が増えるにつれ，誤訳や不適当な訳が目立つといった批判がなされるようになってきた。訳をチェックするシステムもあったのだが，どうも万全には機能しなかった。

③何をもってプログラムの終了を図ることができるのかがはっきりしなかった。永遠に続けるのか。いつかは終了するのか。終了するならばどのような状況でなのか。別のことばでいえば,「隣人をよく知ろう」プログラムのなかにはプログラム終了のしくみが組み込まれていなかった。

以上を大局的にいえば，とにかく翻訳を出すことに意義があった初期の段階から，それだけでは済まない次の段階へと進んできていたのである。

●日本向けプログラムの評価活動

「隣人をよく知ろう」プログラムを今後どうするのかを考えるために，上に述べた疑問に解答を得ようと以下のような評価活動を行った。

1986年　翻訳の問題点に関する調査・専門家会議
1987年　翻訳の質についての専門家委託調査
1989年　出版社，翻訳者へのアンケート調査
1990年　専門家による評価会議

これらの評価の内容についてここで詳しく述べる余裕はない。また，いずれの調査も唯一の正しい解答を導き出してくれた訳でもない。むしろ，さまざまに異なった多くの意見が出された。専門家の方々のいろいろなご意見に啓発されて，財団のプログラム・スタッフがある意味では主観的な以下の結論を導き出したといったほうがよい。

●問題点についてのプログラム・スタッフの考え

（1）本が売れないことについて

財団の助成する事業にしろ研究にしろ，ほとんどすべては助成がなければ実現しないものである。抽象的にいうと市場のメカニズムではこぼれてしまうが，社会的に重要な事柄を実現することによって，市場メカニズムを補完するのが財団の存在意義だといってもよいと考える。日本と東南アジアの人々の付き合いは，ますます緊密に頻繁になってきている。その意味で，日本の人々が東南アジアの文化や歴史や考え方を知るための手段を多く用意することの必要性は深まりこそすれ，減ってきていることはないだろう。それならば，「隣人をよく知ろう」プログラムを続けていく意義もあるに違いないと考えた。売れるか売れないかはたいへんに重要であるし，そのために財団もできること（コストとの関連も無視してはならない）はすべきだが，それを第一義にしてはならない。

（2）翻訳の質について

翻訳の質をめぐる批判については，相当な時間を費やして調査を行った。翻訳の質というのは，実に込み入った問題である。まちがいのない翻訳というものは実際上あり得ないと同時に，優れた翻訳とそうでない翻訳の区別も歴然としてある。誤訳があるかないかで翻訳の質を判断しがちだが，話はそれほど単純ではない。われわれが得た結論は，いまの状況で考えられる最良の翻訳者が，時間と精力を惜しまず惚れ込んで翻訳した作品は名訳というべきである，ということである。それ以上を望むのは，ないものねだりというものである。したがって，こうした組み合わせをどうみつけていくかがわれわれの課題であろうと考えた。

●プログラムの新展開についてはどう考えたか

こうしてプログラムの評価を行う一方，同時にプログラムの将来の展開についての調査・検討を行った。そこでは，

①プログラム開始時点では優れた本のストックがあったが，ある程度の冊数を翻訳してくるとそのストックの翻訳が終わり，翻訳すべき本の数が当初よりは減ってくる，
②国別，あるいは本のジャンル別にみたときに偏りが生じてきており，なんらかの方法で全体のバランスをとる必要がある，
③従来から，東南アジア以外のアジアやアフリカの文学書などの翻訳・出版への助成を行ってほしいという要請があった，

などの具体的かつ現実的な問題点を考慮して，プログラム展開を企画した。

翻訳助成であるため，自らプログラムの継続には限界がある。優れた本をだいたい紹介し終われば，プログラムを終了せざるを得ない。東南アジアについては，特にインドネシア，タイ，ビルマが数多く翻訳されたため，

この3国は当面休むことにした。一方で，マレーシア，シンガポール，フィリピン，ベトナムなどはまだあまり翻訳件数が多くないため継続し，国別のバランスをとることを企画した。

こうして，部分的休止を決めると同時に，それによって生ずる予算上の余裕を使って，新たな地域の開拓という長年の課題に取り組むことにした。「隣人をよく知ろう」というのはあくまでもニックネームであり，もちろん東南アジアが唯一の隣人であると考えているわけではない。グローバル化のこの時代には，地球上のすべての人々が隣人であることはいうまでもない。東南アジアに絞ってきたのは，あくまでも財団の資金と人材の限界を考慮したうえでの，暫定的あるいは戦略的な事業方針である。ようやく東南アジアの外に出られる日が来たというのが実感であった。

●南アジアへの展開と東南アジアでの調整的継続

1990年度3月の理事会で，東南アジア地域についてはこれまでの偏りを均す方向で点数を少なくして継続し，新たな地域として南アジア（バングラデシュ，インド，パキスタン：従来から，ネパールとスリランカは例外的に東南アジアの枠内で扱ってきた）を含めることを決定した。南アジアを選択するにあたっては，当然ながら中国，韓国，台湾などの東アジア地域との比較検討が行われたが，1つはすでにネパールとスリランカに例外的にかかわってきていたという経緯，また中国，韓国などは商業ベースで翻訳・出版活動が行われており，助成をしなければならないという積極的必要性がやや低いことなどから，南アジア地域が選択された。東アジア地域は，将来の可能性としては引き続き検討していく。

このための準備としてすでに，1989～1990年にかけて10名の南アジア研究者からなる専門家の会議（1990年度から正式に「隣人をよく知ろう」プログラム南アジア委員会：委員長，辛島昇東京大学教授）で，潜在的な翻訳者に対して翻訳したい本のヒアリングを広範に行い，最終的に1991～1995年度までの5年間に翻訳する50冊（後に追加され最終的に55冊になる予定）を，本とそれにふさわしい翻訳者のカップルで選定した。年次報告書では，1991年度から早く出版される予定の本から順に助成対象として発表してきているが，実際は，5年間分（南アジアと東南アジア合わせて全部で81冊）の本の翻訳がそれぞれ進められているのである。

5年間の事業内容を事前に一括して決めたのは，出版社のサイドでシリーズ企画としやすいようにとの配慮と，一定の全体冊数のなかで初めから国ごとジャンルごとのバランスをとっていこうという考え方による。副次的に，委員会のほうでは最大5年間の翻訳準備期間を与えられることによって，いますぐは無理でも5年後までには準備できるというようなやや挑戦的な本の選択も可能になった。また，5年間の計画を持ち込んだのは，上述したプログラムの終了や大きな変更のきっかけをどうつかむかといったことが意識されていることはいうまでもない。

一方，縮小的継続となった東南アジアに関しては，これまでに翻訳されてきた本の実績を踏まえて，この国ではこういった分野の本がまだないから，その分野から重点的に選ぶといった分野別のバランスをとるための意図的な本の選択を行った。ここで特筆すべきは，従来対象としていなかったカンボジアとラオスの本を数冊ずつではあるが，対象に含めたことである。いずれの国についても，そもそも現地で出版された本が少ないこともあって，現地の人の手になる本はほとんど日本に翻訳・紹介されていない。

●プログラムの評価を生かした制度の見直し

南アジア地域への新たな展開，また東南アジア地域での縮小的継続にあたっては，プログラム評価から得られた示唆を以下のように積極的に取り入れた。

①従来，本の選択にあたっては東南アジア諸国に有識者からなる委員会を設け，そこで日本人に読んでほしい本を推薦してもらうという東南アジアの側の意見を尊重する方式をとってきたが，上に述べたように，新たに始める南アジアおよび東南アジアの継続分では，翻訳者，出版社など日本側の意見に，より重点をおくことに方針転換した。それは，日本の読者や文化状況をより知っているという意味で日本のマーケットに合った本を選ぶことができるだろうと

いう考えによる。つまり，より多くの人に読んでもらえるような本の選択という配慮をしたつもりである。また，本と翻訳者の最上の組み合わせということも本と翻訳者の選択の重要な要素とし，それによって翻訳の質の確保を意図した。

②販売力のある大手出版社の参加を促し，シリーズ企画で受けてもらうよう配慮した。シリーズ企画のほうが，図書館などの機関購読者に受け入れられやすく，また広報宣伝も行いやすい。また，従来出版社に薄かった助成金の配分をやや増やし，出版社サイドのリスクを低減することを図った。この結果，例えば平凡社の東洋文庫で相当数の作品が取り上げられるなど，従来よりは大手・中堅の出版社の参加が実現した。

以上のように，日本向けプログラムのこの5年間には，1978年のプログラム開始のときから最大のプログラム展開としくみの見直しを行った。その骨子は，①地域を拡大・変更したこと，②より読者あるいはマーケット重視に転換したこと，③5か年計画というやや中期の計画性をプログラムに導入したことの3点である。

●東南アジア向けプログラムと東南アジア相互間プログラム

日本向けプログラムで南アジアを新たに対象に含めたことによって，1990年度からそれまでの「東南アジア向け」プログラムは「東南・南アジア向け」にというように名称変更を行った。名称が煩雑であること，また助成対象であるアジアの出版社の側からすると日本の本であるか他のアジアの本であるかの区別は本質的な問題ではないなどの理由から，最終的に1992年度からアジア相互間（東南アジアと南アジアの現地の出版社が，日本やその他のアジアの国の本を翻訳する場合に助成を行う）という1つのプログラムに統合した。ただし，ここでいうアジアは日本，東南アジア，南アジアの国々だけを指し，その他のアジアの国は当面，含まない。

以上は，プログラムの整理というべきものだが，より本質的なプログラムの変更として，それまでは1か国に1組織を限定してそこが一括運営する形で助成を行っていたが(これを便宜上プロジェクト方式と呼ぶ)，1990年度からは，原則的に複数の出版社が1冊ごとに申請する方式(個別方式)に変更した。1つの国で複数の出版社や財団，翻訳希望者などから助成の打診がかなり出てくるようになったことと，カウンターパートに選んだ組織の個性によって翻訳できる本の種類に限界が生じるためである。今後は個別方式を原則とするものの，場合によってプロジェクト方式も活用していく方針である。

アジア相互間（日本の本を対象とする場合）は，日本向けのプログラムと相互補完的に文化交流の双方向をなすものではあるが，相互間プログラムの下で行われる個々の翻訳出版プロジェクトが開発途上にあるアジア諸国で行われるため，出版分野への資金援助という性格も合わせ持つ。翻訳を通した相互理解促進ということを離れて，出版の技術や出版物の流通の問題，国語の問題，識字や教育の問題とも密接に関係してくるのである。アジア相互間プログラムは，途上国における図書開発や読書促進というより大きなテーマにつながっており，アジア相互間プログラムの今後の方向性はこうした分野への発展であろうと考えている。

Ⅰ．研究助成

Ⅰ-0. 研究助成の概要

研究助成は，本年度も4月1日から5月31日にかけて一般公募した。基本テーマは従来どおりの「新しい人間社会の探求」であり，重点課題も前回（1991年度）と同じく「高度技術社会への対応」と「多文化社会への対応」を引き継いでいる。研究種別も同様に第Ⅰ種研究（個人奨励研究），第Ⅱ種研究（試行・準備研究），第Ⅲ種研究（総合研究）の3種で，その内容は表Ⅰ-1のとおりである。なお，表中の「選考の重点」の項目にある選考基準①～⑤は，それぞれ次の内容を示す。

①発想の独創性

②社会に対する先見性

③研究実施の適時性

④民間助成の必要性

⑤計画の実現性

なお，この研究助成プログラムは日本の研究者を主な対象としたものとはなっているが，申請書が日本語で書かれており，研究内容がなんらかの点で日本と関係していれば，申請者の国籍，居住地および所属を問わず受け付けることとしている。

本年度の応募数は表Ⅰ-2に示すとおり681件で，前年度の762件より約80件減少した。

選考は研究助成選考委員会（委員長：飯島宗一，ほか8名）において7月から8月にかけて行った。ただし第Ⅰ種研究については，飯島委員長と6名の専門委員による専門委員会において7月に選考を行った。選考の結果，合計56件，1億9,940万円分の申請が助成対象候補として選出され，9月開催の第65回理事会で承認されて助成対象に決定した。選考の経過や結果については，「トヨタ財団レポート」No.62に選考委員長が執筆しているとおりである。また，その内訳は表Ⅰ-2に記載のとおりである。

表Ⅰ-1　研究種別と助成の概要

研究種別	第Ⅰ種研究（個人奨励研究）	第Ⅱ種研究（試行・準備研究）	第Ⅲ種研究（総合研究）
研究の性格	若手研究者による萌芽的な個人研究 （個人研究に限る）	学際的・国際的・職際的な研究グループによる試行・準備研究 （共同研究に限る）	第Ⅱ種研究からの展開による総合研究 （共同研究に限る）
1件当たり助成額	概ね 50～200 万円／件	概ね 100～400 万円／件	概ね 200～2,000 万円／件
助成予定総額	約 4,500 万円 （約 25～30 件）	約 5,500 万円 （約 15～20 件）	約 1 億円 （約 10～15 件）
助成期間	1992 年 11 月 1 日より 1 年間	1992 年 11 月 1 日より 1 年間	1992 年 11 月 1 日より 1 年間または 2 年間
選考の重点	選考基準①③項を特に重視	選考基準①②④項を特に重視	選考基準①～⑤のすべての項目を総合して

表Ⅰ-2　研究助成の申請・助成結果集計　（金額は万円単位）

			全体		第Ⅰ種研究		第Ⅱ種研究		第Ⅲ種研究	
		年度	申請	助成	申請	助成	申請	助成	申請	助成
申請・助成件数		**1992**	**681**	**56**	**327**	**27**	**309**	**19**	**45**	**10**
		1991	762	59	388	27	326	20	48	12
申請・助成金額		**1992**	**220,628**	**19,940**	**57,287**	**4,410**	**109,486**	**6,800**	**53,855**	**8,730**
		1991	237,212	20,120	69,060	4,500	113,294	6,510	54,858	9,110
1件当たり平均申請・助成金額		**1992**	**324**	**356**	**175**	**163**	**354**	**358**	**1,197**	**873**
		1991	311	341	178	167	348	326	1,143	759
海外および外国人からの申請*	F/F	**1992**	**34**	**6**	**13**	**4**	**16**	**2**	**5**	**0**
		1991	39	5	11	1	24	4	4	0
	F/J	**1992**	**41**	**7**	**34**	**7**	**7**	**0**	**0**	**0**
		1991	57	4	49	4	7	0	1	0
	J/F	**1992**	**47**	**5**	**39**	**4**	**5**	**0**	**3**	**1**
		1991	51	9	44	8	5	1	2	0
	計	**1992**	**122**	**18**	**86**	**15**	**28**	**2**	**8**	**1**
		1991	147	18	104	13	36	5	7	0
代表者平均年齢		**1992**	**41.6**	**44.8**	**33.2**	**33.7**	**48.6**	**55.2**	**53.8**	**55.1**
		1991	40.8	42.9	33.1	34.5	48.2	48.2	52.5	52.9

＊ F/F は海外在住の外国人，F/J は日本在住の外国人，J/F は海外在住の日本人を示す。

本年度の助成結果の特徴を述べると，次のようになる。

①助成金額は助成予定額をわずかに下回ったが，1件当たりの平均助成額はほぼ横這いであった。申請数は昨年度より減少（80件）した。採択率は8％台であった。

②重点課題については，どの種別についても「多文化社会への対応」に関するものが多く，「高度技術社会への対応」に関するものは少ない。また，学問分野では自然科学系が少なく，人文・社会科学が大半を占める。これら2つの傾向は昨年度と同様である。

③第Ⅰ種研究では，研究者の多彩さが1つの特徴となっている。外国人による研究が12件(カナダ2，中国3，韓国3，朝鮮1，コロンビア1，ブラジル1，フィンランド1)と前年度の5件より多くなっている。海外在住の日本人研究者による研究は前年度より減り，4件となっている。また，採択27件中7件は女性による研究である。第Ⅰ種は若手研究者の奨励という性格から，継続で採択されるというケースはまれであるが，今回も，前年度より以前に助成を受けた3件が採択された。

④第Ⅱ種研究では，採択19件中14件が国際共同研究である。研究題目としては，旧ソ連との共同研究や現地の研究体制の支援を意図したもの(5件）が目立っている。国際共同研究のうち，研究代表者が外国籍のものは2件であった。

⑤第Ⅲ種研究でも，採択10件中8件は国際共同研究であった。第Ⅲ種研究では，第Ⅱ種研究からの展開による総合研究が重視されるが，今回採択となったもののうち9件が前年度もしくはそれ以前からの継続案件であった。また，各研究のスケールの大きさから10件中9件が助成期間は2年となっている。

本年度の研究助成プログラム関連の研究報告会は，以下の1件であった。

第32回研究報告会「『適地技術』と『開発協力』――多様なありかたを考える――」

(1993年3月13日(土)，於：東京神田・お茶の水スクエア)

Ⅰ－1．第Ⅰ種研究（個人奨励研究）

助成対象一覧

助成番号下の（継2）は継続2回目を示す。無記入は新規。
助成番号下の（　）は研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。

	助成番号	研究題目 代表研究者　　所属	助成金額 （円）
1	92-Ⅰ-015	伐採をめぐるブラジル西アマゾン地域の熱帯林消失に関する実態動向調査――地元NGOとの協力，連携による調査研究―― 原後 雄太　ブラジルロンドニア州“NGOフォーラム”ボランティア研究員　34歳	2,000,000
2	92-Ⅰ-029 （継2） （中国）	経済発展による地域社会の変容過程に関する日本と中国の比較実証研究――農村地域を中心として―― 章　政　東京農業大学大学院農業経済学科　院生　31歳	1,800,000
3	92-Ⅰ-030	中国の経済発展と人口流動現象の発生，拡大に関する実証的研究――人口流動と社会経済の変容を中心に―― 大島 一二　東京農業大学農学部　講師　33歳	1,500,000
4	92-Ⅰ-031 （朝鮮）	国家管理，イデオロギー，そしてマイノリティーの相互関係――朝鮮総聯系在日朝鮮人の社会人類学的研究―― 梁　順　ケンブリッジ大学社会人類学部大学院　院生　32歳	1,300,000
5	92-Ⅰ-053	20世紀アジアにおけるアジア映画交流史の研究――東南アジアを中心として―― 松岡 環　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　渉外主任　43歳	2,000,000
6	92-Ⅰ-088	生殖医療技術と文化・社会の相関関係――不妊治療技術と胎児診断技術を通してみる日本人の生命観・家族観・自然観―― 柘植 あづみ　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科　院生　32歳	1,700,000
7	92-Ⅰ-105 （コロンビア）	コロンビアの稲作農民における労働の近代化による健康影響 ――日本との対比に基づいて―― カロリーナ ヴィスル　東京大学大学院医学系研究科　院生　30歳	1,900,000
8	92-Ⅰ-108 （韓国）	アジア地域における日本企業と現地従業員との労使紛争及び紛争解決上の問題点 李　鋌　東京大学大学院法学政治学研究科　院生　34歳	1,500,000
9	92-Ⅰ-129	カースト「族譜」文献に基づくインド社会像の再構築――所蔵調査と事例研究―― 藤井 毅　東京外国語大学外国語学部　専任講師　37歳	1,600,000
10	92-Ⅰ-145 （フィンランド）	江戸時代の日本刀剣の研究――鐔，小道具について―― アイヤ ミュールライネン　京都大学美術史学　研修員　30歳	1,500,000

	助成番号	研究題目 代表研究者　　所属	助成金額 （円）
11	92-Ⅰ-146 （韓国）	韓国における未公開・未確認謡本の調査研究 ――能楽の変遷に関する研究の一環として―― 徐 禎完　法政大学文学部　客員研究員　31歳	1,200,000
12	92-Ⅰ-154	マダガスカルにおける伝統的自然観と環境保護思想の変容に関する研究――「欧米主導」の自然保護から「当事者国主導」への試み―― 斉藤 千映美　東京大学大学院理学部人類学教室　院生　27歳	1,200,000
13	92-Ⅰ-165	日本の看板文化の特質を探る――幕末・明治期における看板の洋風意匠受容過程を中心とした基礎的研究―― 立部 紀夫　神奈川県立神奈川工業高等学校　教諭　41歳	1,600,000
14	92-Ⅰ-183	中世宗教美術資料を通して信仰者の文化サロン的結衆の形成とその背景を明らかにする研究 青木 淳　国立総合研究大学院大学文化科学研究科　院生　27歳	1,700,000
15	92-Ⅰ-194 （カナダ）	北東アジア地域（日本海および黄海沿岸の諸国）における援助・貿易・投資の政治経済学的分析 謝 大維　シカゴ大学政治学部大学院　院生　35歳	2,000,000
16	92-Ⅰ-202 （カナダ）	創られた日本人イメージ――欧米におけるステロタイプ日本人像形成の過程，普及・定着化に関する比較文化研究―― ホックリー アレン　トロント大学大学院東洋学科　院生　38歳	1,600,000
17	92-Ⅰ-232	日本における入院医療の患者による評価に関する研究――医療の質の評価指標の標準化および指標補正法の開発―― 今中 雄一　東京大学大学院医学系研究科・ミシガン大学大学院　院生　31歳	1,800,000
18	92-Ⅰ-242 （中国）	音楽，神，そして人間と自然 ――中国と日本を中心とする東アジアの祭祀儀礼音楽研究―― 朱 家駿　大阪大学大学院文学研究科　院生　37歳	1,500,000
19	92-Ⅰ-258 （中国）	異なる社会制度における国民国家の先住民族政策の比較研究――インディアン，アイヌ，ウイグルの伝統文化と先住民政策の衝突を中心として―― トフティ テュニヤズ　立教大学文学部　客員研究員　32歳	2,000,000
20	92-Ⅰ-275	熱帯雨林地域の経済と環境の変容――東カリマンタン・マハカム河中流域でのフィールドワークを基に地域の視点から―― 佐々木 英之　ムラワルマン大学熱帯降雨林研究所　客員研究員　34歳	1,600,000
21	92-Ⅰ-277	フランス都市におけるアフリカ系移民の宗教行動に関する文化人類学的研究――日系新宗教運動への参加にみるエスニシティの持続と変化を中心として―― 樫尾 直樹　早稲田大学人間科学部　助手　29歳	1,600,000
22	92-Ⅰ-280 （継 2）	日本の桶・樽文化の特性に関する研究 ――中国大陸・朝鮮半島の桶・樽文化の比較を通して―― 石村 真一　郡山女子大学附属高等学校　教諭　43歳	1,200,000

	助成番号	研究題目 代表研究者　　所属	助成金額 (円)
23	92-Ⅰ-284	ベトナム北部における村落の文化人類学的研究——公田制と戦争と社会主義をキーワードとして—— 高岡 弘幸　ハノイ総合大学ベトナム研究協力センター　研修員　31歳	1,300,000
24	92-Ⅰ-304	DNA分析の法的統制 ——プライバシー保護の観点からのEC，ドイツ，日本の法政策の比較—— 藤原 静雄　国学院大学法学部　助教授　37歳	1,300,000
25	92-Ⅰ-306 (日本/ブラジル)	アジアにおける西洋人の建築活動とその変遷に関する基礎的研究——ポルトガル，スペインにおけるアジア建築活動に関する文献総覧作成を中心に—— 西山 宗雄 マルセーロ　東京大学大学院工学系　院生　27歳	1,900,000
26	92-Ⅰ-316 (韓国)	日・韓関係の報道から見たコミュニケーション・ギャップの研究——1965年日韓国交正常化以後の言論報道を中心として—— 李　錬　延世大学校文科大学　講師　40歳	1,800,000
27	92-I-322 (継2)	ケニアの自然保護区の外側に生息し，家畜と共存する大型肉食獣ヒョウの生態及びその家畜に対する被害を軽減する方法の研究 水谷 文美　ケンブリッジ大学生理学部大学院　院生　34歳	2,000,000
		小　　計（第Ⅰ種研究）　　**27**　件	**44,100,000**

研究概要（第Ⅰ種研究）

1．伐採をめぐるブラジル西アマゾン地域の熱帯林消失に関する実態動向調査　（原後 雄太）

ブラジル西アマゾン地域では入植，牧場開発などに加えて商業伐採が急速に熱帯林破壊の原因として登場している。伐採の多くは先住民居住地域や生物圏保護地域内などで違法に行われ，環境・社会上の問題を引き起こしながら北アメリカ，ヨーロッパなどに輸出されている。

当研究は今後「太平洋への出口」を求める道路建設によって，日本との貿易関係の強まることが予想される西アマゾン地域に焦点を絞り，地域の商業伐採の現状を把握するとともに，これから拡充・貢献すべき日本の開発援助や民間投資のあり方を具体的に探るものとする。

2．経済発展による地域社会の変容過程に関する日本と中国の比較実証研究——農村地域を中心として　（章　政）

近年，地域社会に発生している「経済発展」と「社会進歩」の不整合，「過疎問題」プラス「農業問題」が併せて進行することにより，地域経済機能の低下，地域社会基盤の弱体化などの問題が深刻になりつつある。一方，現在，中国農村の一部地区において，経済発展に伴いそれと類似する問題も発生している。

当研究は，健康，調和，文化的な地域社会環境の創造を目指して，経済発展による地域社会，経済，自然などの諸側面における，よりバランスのとれた地域経済の発展の道を探ることをねらいとしている。

3．中国の経済発展と人口流動現象の発生，拡大に関する実証的研究　（大島 一二）

近年中国においては，主に都市と農村の格差に基づいて，広範な農民が都市に就職機会を求めて流入するという「盲流現象」（無政府的な人口流動）が活発化している。この現象は中国社会に，都市における人口爆発，都市環境の悪化，農村の荒廃などの多くの問題を発生させる可能性を強く有しているといえる。

当研究はこうした盲流現象を分析の中心におき，農村におけるプッシュ要因の解明，さらにこの現象が都市などの人口流入地域にどのような影響を与えつつあるのか，などを実証的に明らかにしようとするものである。

4．国家管理，イデオロギー，そしてマイノリティーの相互関係——朝鮮総聯系在日朝鮮人の社会人類学的研究　（梁　順）

日本には約70万の朝鮮・韓国人を名乗る人々が存在するが，彼ら在日朝鮮・韓国人に関する専門的・学問的な研究はいまだ存在しないといえる。

当研究は，在日朝鮮人の学術的研究として，朝鮮総聯系朝鮮人と日本国家の関係を考察し，国家管理体制の内部におけるマイノリティーとしての総聯の，社会的・イデオロギー的再生産装置とその過程を考える。「在日」問題につきまといがちな日本国家に対する倫理批判のパラダイムを超えて，総聯を社会人類学的研究の対象としてとらえることが主眼である。

5．20世紀アジアにおけるアジア映画交流史の研究——東南アジアを中心として　（松岡 環）

アジアにおいて劇映画が製作され始めたのは1910年代であるが，以後アジアの国々では映画が大衆娯楽の王者として人々に親しまれてきた。なかでもインド映画と香港を中心とする中国語圏の映画は，東南アジア各国において広く享受され，映画と映画人の交流を通して各国の大衆文化形成に大きな影響を与え続けてきた。

当研究は，映画を媒介とした，アジア各国間の今世紀における大衆文化交流の動態を解明し，それを移民に代表される人口移動や，国民国家形成の歴史と重ね合わせて考察するものである。

6．生殖医療技術と文化・社会の相関関係　（柘植 あづみ）

体外受精や胎児診断などの新しい生殖医療技術の発達は，ヒトの生命への人為的な介入を可能にした。

当研究は，①生殖技術が文化・社会に対してどのような影響を及ぼしているのか，②文化・社会のどのような要因が生殖技術の発達または抑制に作用しているのか，について分析することを目的とし，日本においてこれらの技術の開発・応用を担っている産婦人科医とそれを受ける「患者」への聞取り調査を行う。両者の意見や意識だけでなく，家族観や生命観などの価値観やそれが形成された要因をも探る。

7．コロンビアの稲作農民における労働の近代化による健康影響——日本との対比に基づいて　（カロリーナ ヴィスル）

このプロジェクトの主たる研究対象である，コロンビアの稲作地域 Espinal/Guamo 地域では，近年農業の集約化が著しく，化学肥料・殺虫剤などの大量使用により環境の急激な変化がもたらされている。特に殺虫剤の空中散布は，住民はもちろん，土地，水源，植物，動物，大気に悪影響を与えてきた。

当研究は，農業の近代化による健康影響について，日本の長い経験をレビューし，途上国における農薬の使用を含む労働の近代化がもたらす健康問題とその原因を明らかにし，解決の方策をみつけることを目的とする。

8．アジア地域における日本企業と現地従業員との労使紛争及び紛争解決上の問題点　（李　鋌）

今日，日本企業の活発な海外進出に伴ってさまざまな国際紛争が起こっている。その１つが日本企業と現地従業員との労使紛争である。紛争の主な原因は労使間の異なる文化や制度および見解のギャップから生じるもので，特にアジア地域において紛争が多い。しかし，紛争を解決する制度的システムがいまだないため解決ができず，両国間の友好関係の破壊や経済的損失を招いている。

当研究は，以上のような紛争をいかに円満に解決するかについて，従来の国際私法的立場とは異なり，紛争を調整できる調整機関を中心に解決策を探っていく。

9．カースト「族譜」文献に基づくインド社会像の再構築——所蔵調査と事例研究　（藤井 毅）

近年のインド社会研究は，サンスクリット古典籍に伝拠する文献学的研究と，フィールドワークに基づく社会学・文化人類学研究の両極へと分化してしまい，その成果の交流は困難なものとなっている。

当研究は，インド社会の構成単位とされたカーストを取り上げ，特にその族譜文献を分析することにより，両研究方法の有機的な結合を試みる。文献所蔵調査を行うとともに，代表的なカースト集団については事例研究を行い，植民地支配下におけるインド社会の再編過程を解明し，インド社会像の再構築を図るものである。

10．江戸時代の日本刀剣の研究——鐔，小道具について　（アイヤ ミュールライネン）

日本刀は極限ともいえる機能美，鐔や小道具などの装飾にみる芸術性など，文化史上の所産として世界的にも高く評価されるべきものであろう。研究者はフィンランドの大学で江戸時代の刀装具装飾の様式の研究により修士号を得たが，さらに日本に長期滞在し，刀剣の製作過程や数多くの作品を実見することでいっそう研究を深めようというものである。

当研究では，刀剣装具装飾の分類，美学および図像学等からのアプローチにより，刀剣の歴史および江戸時代の後藤家の伝統に焦点を絞った系図研究を行う。

11．韓国における未公開・未確認謡本の調査研究——能楽の変遷に関する研究の一環として　（徐 禎完）

世阿弥時代から始まり式楽としての地位を確立した江戸期までの能楽の変遷を明らかにすることは，日本文化の発展史を把握するうえで非常に重要であるにもかかわらず，現在確認されている資料だけでは上述した 600 年という時間を埋めるには十分ではない。

当研究は，こうした現状に鑑み，韓国における未公開・未確認謡本の調査発掘および系統分類の実施を行うことにより，能楽関係の資料を補う。具体的には，ソウル大学に存在する学界に未紹介の揃えの能の謡本を対象とし，その系統を究明することにある。

12．マダガスカルにおける伝統的自然観と環境保護思想の変容に関する研究　（斉藤 千映美）

近年，国際組織や環境保護先進国である欧米諸国の NGO が，豊富な自然の残された第三国で積極的な生態系保護活動を展開している。活動の主な目的の１つは，いまだ貧しい南の人々の心に西洋的自然保護理念をはぐくみ，自立した保護活動を定着させていくことである。

当研究の目的は，マダガスカル島で自然保護活動にかかわる欧米人と現地マダガスカル人の自然に対する感覚，保護活動の現状と問題点を調べ，その根底にある先進国の人々と現地住民の自然観の違いと両者が目指す共通の方向を探るものである。

13. 日本の看板文化の特質を探る——幕末・明治期における看板の洋風意匠受容過程を中心とした基礎的研究　（立部 紀夫）

看板は商店街とか町並みの景観を構成する重要な要素であり，その役割は建物自体より大きい場合もある。

当研究は，現代社会の看板文化に直結すると思われる幕末・明治期を中心とした看板の意匠的考察を試みるものである。とりわけ，幕末の開国を契機として，それまでのわが国における伝統的看板意匠のなかに，洋風意匠がどのようにして取り入れられ，浸透し，発達をみたのかという点に焦点をあてて，その受容過程を解明することが主眼となっている。当研究を行うことにより，日本の看板文化の特質を探ることが可能であると考える。

14. 中世宗教美術資料を通して信仰者の文化サロン的結衆の形成とその背景を明らかにする研究（青木 淳）

中世の芸能民や職工人に関する研究の多くは，「被差別的」視点からの研究が多く，文化史的側面，あるいは社会思想史的見地からの研究は少ない。しかし社会的階層の差別を越えた人々の交渉の場が少なくなかったことが判明してきている。

当研究は，特に1201年仏師快慶によって造立された東大寺僧形八幡神像の像内銘を中心資料として，そこに結衆した皇族・貴族・僧侶・仏師・絵仏師・芸能民などを含むさまざまな階層，職業の人々について新たな視点から重層化した中世的世界を構造的に分析する。

15. 北東アジア地域（日本海および黄海沿岸の諸国）における援助・貿易・投資の政治経済学的分析（謝 大維）

貿易ブロックの形成へ向かいつつある今日の世界において，北東アジア地域は潜在的な経済発展の可能性をもつ地域の１つである。

当研究は，この地域における貿易と人間・技術・資本の交換に関する諸国家および諸産業における戦略に焦点をあてる。その際，世界経済において成長を求めて競争する国民国家における「競争優位」という新しい分析枠組みに依拠し，政府文書，歴史資料，産業開発の諸計画，貿易の傾向等の分析を行うことにより，適応的な戦略と先制的な戦略の双方の分析を行うものである。

16. 創られた日本人イメージ——欧米におけるステロタイプ日本人像形成の過程，普及・定着化に関する比較文化研究（ホックリー アレン）

欧米におけるサムライ，ゲイシャ，エキゾシズム日本という日本のステロイメージの普及には，19世紀の２人の写真家，ビィアトーとスティルフリットによる日本の写真集が大きな影響を与えている。

当研究は，彼らの写真集を基に，日本人が欧米においてステロタイプ的に理解されていることの根源を明らかにするとともに，その日本人テスロタイプイメージ形成の過程を，作り手，担い手，受け手のすべての側面から検証しようとするものである。

17. 日本における入院医療の患者による評価に関する研究——医療の質の評価指標の標準化および指標補正法の開発（今中 雄一）

医療において患者の満足は，健康水準の改善とともに究極の目標であることが従来より指摘されてきた。患者による医療評価を科学的に医療者にフィードバックさせることは，現代医学では皮肉にも見逃されてきたが，患者の主導力の重要性の高まる近年の医療環境に新たな道を開くと期待される。

当研究は，患者による入院医療の評価の，妥当性・信頼性高い指標を開発することを目的とする。患者体験の詳細な情報収集を基に質問票調査を進め，あわせて患者の性質や価値観による指標への影響の補正法を検討する。

18. 音楽，神，そして人間と自然——中国と日本を中心とする東アジアの祭祀儀礼音楽研究　（朱 家駿）

音楽，宗教と信仰とは，諸文化事象のなかで最も普遍的，本質的部分であると同時に，両者は不思議なほどに密接に関連している。両者はともに人間の感情的，象徴的行動と現象であるゆえ，その象徴性と意味の解釈，理解は特に重要でありながら困難である。

当研究は，中国と日本を中心とする東アジアの祭祀儀礼音楽の事例を文化解釈学的な立場から取り上げ，それを東アジアの文化と自然のコンテクストにおいて考察し，音楽と人間の音楽行動の本質，そして音楽と信仰，および人間と自然との関わり方を究明する。

19. 異なる社会制度における国民国家の先住民族政策の比較研究　（トフティ テュニヤズ）

異文化間の摩擦，民族紛争の多発する今日の国際社会において，「民族文化共存のためにはどんな方法があり得るのか？」は重要，かつ解答至難のテーマである。

当研究は，アメリカにおけるアメリカインディアン，日本におけるアイヌ，中国におけるウイグル族に対する民族政策をケーススタディとして，異なった社会制度，歴史的背景においてとられた民族政策と，それが先住(少数）民族文化に与えた結果を総合的に比較研究することによって，民族文化共存の方法論へ，新たな知見を提示することを目的とする。

20. 熱帯雨林地域の経済と環境の変容　（佐々木 英之）

熱帯林破壊の現象は，一般の人々に理解されやすい，いくつかの理論であっさりと説明されてきた。それらの理論は，現実の現象が起こるコンテクストに必ずしも対応した説明ではない，という決定的な欠点をもつ。

当研究は，インドネシア東カリマンタンのマハカム河中流域での村落定着調査を通して，政府の介入，貨幣経済の浸透，資本主義的生産形態の登場が，どのように地域住民の文化，経済，森林利用形態を変容させてきたかを実証的に追跡し，その地域の経済と環境の変容構造の特質をマクロに理解することを目的とする。

21. フランス都市におけるアフリカ系移民の宗教行動に関する文化人類学的研究　（樫尾 直樹）

世界的移民都市パリでは，近年，新宗教の運動が活発化している。新宗教教団にはアメリカ系，日系，フランス系などがあるが，その中心的な担い手集団の１つはアフリカ系移民である。彼らはなかでも日系教団に比較的多数入信している。

当研究は，そうしたフランスの宗教状況の新しい展開を探るために，彼らの日系教団への入信は民族的アイデンティティ維持という役割を果たす，という仮説を立て，現地でのアンケート調査，対面調査および参与観察によってそれを検証することを目的とする。

22. 日本の桶･樽文化の特性に関する研究――中国大陸･朝鮮半島の桶・樽文化の比較を通して（石村 真一）

日本に限らず，木材を使用した桶・樽文化は近年世界的に極端に減少する傾向にある。その主な要因は生産技術自体の問題ではなく，桶・樽に適した良材の価格が高騰したことにあるという結論を得た。

当研究は 1991 年度に続く助成で，日本の調査結果を基にして，まず東アジアの中国，朝鮮半島の桶・樽文化との比較を試みる。そして比較研究より得られたデータを通して，日本も含めた先進社会における木製容器復活の可能性について検討を加えることを目的とする。

23. ベトナム北部における村落の文化人類学的研究――公田制と戦争と社会主義をキーワードとして　（高岡 弘幸）

ヴェトナムは日本にとって，今後ますます重要な国の１つとなっていこうとしている。しかし，私たちがヴェトナムについて考える際，最も必要となるはずの「一般の人々の暮らし」については，相次ぐ戦争などのため，これまで調査研究をすることがまったく不可能であった。

当研究は，ヴェトナム北部村落において，社会組織，信仰，生業などを中心に，文化人類学の立場から調査研究を行い，聞き取れる範囲での伝統的社会文化の再構成と，戦争と社会主義による変容過程を把握し，これからのヴェトナム社会文化研究の基礎を提供するものである。

24. DNA 分析の法的統制――プライバシー保護の観点からの EC，ドイツ，日本の法政策の比較　（藤原 静雄）

高度技術社会を象徴する技術の１つである DNA 分析技術は，医療の分野を中心として多くの福音をもたらす反面，プライバシーの侵害の可能性という深刻な問題をわれわれに突き付けている。

当研究は，この問題に対し，従来とは異なる法分野を横断するアプローチを試みるものである。その際，特に EC およびドイツ等の法制との比較という視点を重視する。この作業を通じて，プライバシー保護という観点からみて国際的に耐えられる，DNA 分析の法的統制の基準を探ることを目的とする。

25. アジアにおける西洋人の建築活動とその変遷に関する基礎的研究　(西山 宗雄 マルセーロ)

現在のアジア都市の基本的構造となったヨーロッパ植民地政策上の建築行為に関する研究は，東アジアでのイギリス，フランス，オランダを中心としており，その先駆者であったイベリア人の遺業についての本格的な研究はなされていない。また当該地域の建築史の体系的な整理は，ポルトガルにおいてさえも稀少な状態である。

当研究は，東南・西アジア地域における調査進展のため，ポルトガルおよび西国における関係文献調査とその文献目録の作成および，特にポルトガルの各地域ごとの主要関係建築物調査とその総覧の作成を行う。

26. 日・韓関係の報道から見たコミュニケーション・ギャップの研究　(李　錬)

日・韓関係は，1965年の国交正常化以後27年も経過したにもかかわらず，いまだに両国には大きなコミュニケーション・ギャップが残されており，誠に遺憾だといわざるを得ない。

当研究は，1965年以後から現在に至るまでの両国の代表的な言論報道を通じて，コミュニケーション・ギャップの諸問題を分析し，その解決策を模索する。それにより両国のコミュニケーション・ギャップを埋めるための1つの手がかりとしたい。

27. ケニアの自然保護区の外側に生息し，家畜と共存する大型肉食獣ヒョウの生態及びその家畜に対する被害を軽減する方法の研究 (水谷 文美)

ケニアの中部を横切る家畜ランチング地帯は，ケニアの自然保護の鍵となる地区で南に集約農耕，北に遊牧民の住む大乾燥地帯を控える。ほとんどのランチが豊富な野生草食獣を抱え，ヒョウやライオンの数も増加し，それに伴い，これらの肉食獣が牛や羊を襲う回数が増し，人々の自然保護に対する理解を得る妨げとなっている。

当研究は1988年度に続く助成で，ヒョウの生息密度，行動圏，動きはもとより家畜の捕食を記録し，さらにはヒョウのマネージメント方法の見通しをつけることを目標としている。

Ⅰ－2. 第Ⅱ種研究（試行・準備研究）

助成対象一覧

助成番号上の＊印は国際共同研究を示す。
助成番号下の（継2）は継続2回目を示す。無記入は新規。
助成番号下の（　）は代表研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。

	助成番号	研究題目 代表研究者　所属	助成金額 （円）
28	92-II-015*	中日流通の比較研究	
	(中国)	馮 昭奎　中国社会科学院日本研究所　教授　53歳　ほか4名	3,400,000
29	92-II-044	角筆文字の科学的解析とその言語文化史的研究――日中両国における角筆文献の発掘調査をめざして――	
		吉澤 康和　産業技術短期大学　教授　65歳　ほか5名	2,500,000
30	92-II-045*	チェルノブイリ核被災の後障害に関する総合研究――医学的調査と社会変革に伴う心理的対応について広島との相補的比較――	
		佐藤 幸男　広島大学原爆放射能医学研究所　教授　59歳　ほか7名	4,000,000
31	92-II-077*	多文化理解のためのカリキュラム・教授法をめぐる国際比較研究――日・中・ロ・英の比較調査――	
		関 啓子　一橋大学社会学部　教授　44歳　ほか15名	3,400,000
32	92-II-084	地球環境という視点からみたブータンの国家開発と環境保全	
		栗田 靖之　ブータンにおける開発と環境の研究会　53歳　ほか5名	3,800,000
33	92-II-085*	環オホーツク海地域における海獣狩猟民文化成立過程の研究――北海道・サハリン・マガダン・カムチャッカでの考古学調査――	
		山浦 清　環オホーツク海古文化研究会　45歳　ほか11名	4,000,000
34	92-II-106*	京都の都市デザイン政策に関する研究――環境シミュレーションによる都市の環境制御方法の選択――	
		大谷 幸夫　都市デザイン政策研究会　68歳　ほか8名	3,500,000
35	92-II-109*	新しい産業モデルの出現――自動車産業を中心とした国際的比較共同研究――	
		清水 耕一　岡山大学経済学部　助教授　42歳　ほか9名	3,400,000
36	92-II-117	「大陸の花嫁」策の社会的基盤と戦後日中社会に与えた影響――日中戦争期における青年女子移民政策の経緯と具体的展開に関する研究――	
		久保 義三　「大陸の花嫁」研究会　65歳　ほか6名	3,400,000
37	92-II-123*	日本および諸外国における桶・樽の歴史的総合研究	
		小泉 和子　桶樽研究会　58歳　ほか9名	1,900,000

	助成番号	研究題目 代表研究者　所属	助成金額 （円）
38	92-II-182*	サハラにおける高度技術移転に伴うオアシス社会の変容過程の研究 小堀 巖　サハラ研究会　68歳　ほか6名	4,000,000
39	92-II-191*	ロシア共和国内の博物館に収蔵されるアイヌ民族資料の調査研究 岡田 路明　日ソ極東・北海道博物館交流協会　理事　42歳　ほか2名	3,300,000
40	92-II-206	激動する旧ソ連邦における科学研究機関の活動状況と今後の動向に関する調査研究 市川 芳彦　旧ソ連邦学術研究機関動向調査研究会　63歳　ほか2名	4,000,000
41	92-II-226	幕末・維新期の風聞集等にみられる瓦版・錦絵類の基礎的研究――民衆の情報収集・分析・活用に関する研究―― 宮地 正人　絵画情報史研究会　48歳　ほか7名	3,500,000
42	92-II-239*	東南アジア熱帯林における伝統的生業と近代的開発――森と人の織りなすモザイク構造の分析―― 甲山 隆司　東南アジアの森と人研究会　37歳　ほか6名	4,000,000
43	92-II-246*	中央アジア乾燥地における大規模灌漑農業の生態環境と社会経済に与える影響 石田 紀郎　カザフ研究会　52歳　ほか11名	4,000,000
44	92-II-278* (継2)	手話コンピュータ辞書の構築に関する研究――映像メディアによる手話辞書―― 鎌田 一雄　電子化手話辞書研究会　45歳　ほか7名	3,900,000
45	92-II-310* (継2) (中国)	満族文化の基礎的資料に関する緊急調査研究――特に民俗学の領域において―― 愛新覚羅 顯琦　満族文化研究会　75歳　ほか7名	4,000,000
46	92-II-311* (継2)	東西ドイツの再統合とそのEC統合および東欧変革に対するインパクト――一元的社会経済体制の転換と中・東欧の民族問題―― 住谷 一彦　日欧文化比較研究会　67歳　ほか12名	4,000,000
		小　計（第II種研究）　**19**　件	**68,000,000**

研究概要（第II種研究）

28. 中日流通の比較研究

（馮 昭奎）

中国の市場経済への移行と中日両国の経済協力関係の発展につれて，中日両国にとって双方の流通システムに対する理解の必要性がますます高まりつつある。

当研究は，中日両国の流通政策，流通関連企業の組織形態と行動特徴，重要商品の流通経路，製品輸入と流通システム，流通分野における「情報化」と物流技術革新，農協と流通などに関して比較研究を行う。流通実態と事例に即して，転換期にある中国経済を流通の側面から日本と比較し，それぞれの経験と問題点を把握し，政策的課題や企業戦略等について提案を行う。

29. 角筆文字の科学的解析とその言語文化史的研究——日中両国における角筆文献の発掘調査をめざして　（吉澤 康和）

角筆というのは木・竹などの箸状の筆記具で，30年前に当研究の共同者が古文献のなかから凹み文字で書き込みが行われている例を発見して以来，角筆で注記などが施された古文献が数多く発見されるに至っている。

当研究は，物理学を専門とする代表者が，角筆文献の判読を容易にするために開発した角筆スコープをさらに改良し，持ち運びが可能で，より読みやすいものを作製し，これを利用して国内はもとより大英図書館の資料などを通して中国，チベット，ネパールなど，より広い範囲にわたって角筆文献の調査を試みるものである。

30. チェルノブイリ核被災の後障害に関する総合研究

（佐藤 幸男）

チェルノブイリ核被災の後障害については，調査の方法や対象の差異によって得られた結果も一様ではない。

当研究は，ベラルーシの医師・研究者と協力し，現場の医師の経験や病院の症例を重視し，カルテの検証や組織学的検査，一般検診なども行い，後障害の全体像を把握する手がかりを得ようとするものである。具体的には，①増加傾向にある小児甲状腺癌や奇形と放射線との関係を明らかにし，②奇形の遺伝的背景を探るため可能なかぎりの病歴，家族歴などの調査を行い，③社会心理面について，被爆による不安などストレスの原因解明を目指す。

31. 多文化理解のためのカリキュラム・教授法をめぐる国際比較研究——日・中・ロ・英の比較調査　（関 啓子）

多様な文化的背景の子どもたちを受け入れ出した日本の教育現場にとって，多民族が共生する社会でその現実を子どもにどう教育しているかを知ることは参考となる。

当研究は，日本，中国，ロシア，イギリスを対象に，各国共通して現代教育改革の目玉となっている「後期中等教育の多様化・多元化」とカリキュラム（さらに教授法・評価法）改造との関連を分析し，生徒の多文化理解の進度を外国語科と地理科の教授－学習過程に注目して調査する。これらの比較を通じて，現代教育改革が生徒の多文化理解をどのように方向づけているかを明らかにする。

32. 地球環境という視点からみたブータンの国家開発と環境保全　（栗田 靖之）

発展途上国における環境破壊と貧困の悪循環という課題の根元を考えるなら，先進国の近代工業化の背景にあった中心的イデオロギー，つまり科学技術主義や自由・民主主義といった鍵概念をも再検討する必要がある。

当研究は，慎重な近代化政策によって森林－生業－社会－王権の統合システムを維持してきたブータンを，悪循環を絶つ１つのモデルととらえ，国民統合や開発援助の具体的な政策決定過程を文化的基盤とのかかわりから分析することで，先進国－途上国が一体化して進行する地球規模の危機打開に１つの指針を与える試みである。

33. 環オホーツク海地域における海獣狩猟民文化成立過程の研究　（山浦 清）

ソビエトの崩壊とともに，ロシアの研究者はいままでの閉塞状況から解き放たれ，日ロの考古学者の共同研究は容易となってきた。反面，ロシアの研究者の経済的基盤は厳しく，国外研究者との交流を求める希望も強い。

当研究は，こうした外的状況のなか，北海道・樺太・マガダン周辺地域・カムチャッカというオホーツク海を取り囲む地域において展開した海獣狩猟民文化の成立・展開過程，およびその相互関係を，それぞれの地域のロシア研究者との共同調査を通して明らかにしようとするものである。

34. 京都の都市デザイン政策に関する研究——環境シミュレーションによる都市の環境制御方法の選択　(大谷 幸夫)

国際的な歴史都市である京都は，いま，外国人も含めて京都に関心を寄せる人々から支持の得られる，伝統と現代的な都市活動とが調和した，独自の都市計画方針，町づくりプラン，およびその推進策を必要としている。

当研究はこのような観点に立って，市民の参加を図りながら町づくりのあり方や，進め方の方法論を提案するものである。軸となる研究は，景観，日照，交通などによって市街地環境を，市民生活の立場から評価し得る「環境シミュレーション」の開発で，今後の環境アセスメントの手法としての活用の可能性を探るものである。

35. 新しい産業モデルの出現——自動車産業を中心とした国際的比較共同研究　(清水 耕一)

フォード主義的産業モデルが効力を失った今日では，トヨタ生産システムが新しいモデルとみなされている。しかし，各国は固有の経済・社会・文化的制約をもち，同じ原理から出発しても多様なモデルが出現すると思われる。さらにトヨタ生産システムも変わろうとしている。

当研究は，自動車産業を対象に各国の現実の変化を比較研究し，出現しつつあるモデルの一般的諸原理を明らかにしようという，12か国（仏，独，米，日等）の研究者による国際共同研究の一環であり，共通の調査項目に従って日本の代表的自動車メーカーを調査研究する。

36. 「大陸の花嫁」策の社会的基盤と戦後日中社会に与えた影響　(久保 義三)

1930～40年代，日本政府は対外侵略・植民地支配の尖兵たる「満州移民」「青少年義勇軍」の配偶者送出政策として「大陸の花嫁」策を打ち出したが，その政策経緯と確保・訓練・送出の実態，戦後への経緯は明らかではない。

当研究は，文献発掘，面接調査，生活実態調査等により，①「大陸の花嫁」策の政策意図と具体化の経緯，②各地域の教育会・男女青年団・婦人会・各種民間団体等の関与の実態，③渡航後の「花嫁」の現地への適応と自己形成の経緯，④「中国残留婦人」「残留孤児」等帰還者や家族の再適応問題，を継時的に考察するものである。

37. 日本および諸外国における桶・樽の歴史的総合研究　(小泉 和子)

近世期に発達した結桶・結樽は，それ以前の甕や曲桶に代わり，醸造業をはじめ，農林水産・工業の各分野のみならず，風呂桶などの生活用具の分野にも進出し，日本人の生活様式を変えていった。ところが近代以降は，まったく新しい素材と形態の容器の普及により，桶・樽はその役割を終え，職人とともに急速に消滅しつつある。

当研究は，日本の桶・樽が中世から近代までに果たしてきた社会的な役割や特徴について，醤油・酒などの醸造業における桶・樽および製造元との関係を中心に，世界各地の事例と比較しながら研究するものである。

38. サハラにおける高度技術移転に伴うオアシス社会の変容過程の研究　(小堀 巖)

サハラ砂漠のオアシスに点在する集落に，近年アルジェリア政府により大規模な灌漑施設や太陽光発電の投資が行われるようになり，伝統的なナツメヤシを中心とするオアシス農業や，交易の形態も変化を見せ始めている。

当研究は，サハラ南部の Aoulef オアシスを中心に，代表者の積年の調査資料を整理するとともに，日・ア・仏の研究者とともに，現地での自然・人文・社会環境の調査を行う。関係研究機関および研究者とも討議し，オアシスの変容過程を明らかにし，将来の方向を見定めようとするものである。

39. ロシア共和国内の博物館に収蔵されるアイヌ民族資料の調査研究　(岡田 路明)

アイヌ民族については，古くから諸外国の関心がもたれ，その有形資料は世界各国の博物館に保存されている。このなかには日本国内のコレクションより古い時代のものもあるが，その実態は明らかでないことが多い。

当研究は，ロシアの研究者との共同で，ロシア共和国内の各地の博物館等に収蔵されるアイヌ民族資料，およびこれに付随する記録の調査研究を行うことによって，アイヌ民族の歴史と文化を探り，あわせて，資料の記録を通して日本とロシアとの交流の歴史を考察するものである。

40. 激動する旧ソ連邦における科学研究機関の活動状況と今後の動向に関する調査研究　（市川 芳彦）

1991年末のソビエトの解体へと一気に進んだ世界史上の一大変革の真っ直中で，伝統ある旧ソビエトの文化・学術は崩壊の危機に瀕している。旧ソビエトの科学の崩壊は，全世界の文化にとって大きな損失ともなる。

当研究は，物理学の最先端分野の研究者の視点から，ロシア，ウクライナ，その他の地域の科学研究機関の現状を調査することにより，いまや大きく方向転換を図ろうとしている旧ソビエトの科学・技術の将来への動向を探索する。日本と旧ソビエトの間の学術交流の拡大のために，有用な基礎データベースを構築することを目指す。

41. 幕末・維新期の風聞集等にみられる瓦版・錦絵類の基礎的研究　（宮地 正人）

近年民衆史研究において，非文字資料の重要性が指摘されている。特に絵画は多様な情報を含み，歴史史料として有効である。

当研究は，幕末・維新期に流通した錦絵・瓦版・風聞集類を網羅的に収集し，さらに歴史史料分類を加えてデータベース化を試みる。収集にあたっては，国立国会図書館，東京大学史料編纂所を中心とするが，全国の諸機関もその対象とする。集積したデータは，絵画史料の総合目録データベースを作成することにより，さまざまな分野で活用できるよう基礎情報としての整理を行う。

42. 東南アジア熱帯林における伝統的生業と近代的開発——森と人の織りなすモザイク構造の分析　（甲山 隆司）

東南アジアの熱帯林地域には，歴史的な多民族構造を背景に，多様な社会的・文化的過程が共存している。熱帯林とそこに住む人々はこうした諸過程に対応し，動的に推移するモザイク的地理構造を形成している。

当研究は，自然・社会のモザイク構造に即して熱帯林問題の骨格を描き出すことを目的とする。熱帯林に加えられた人為的改変と引き続く自律的修復の過程を定量的に解析し，土地利用にかかわる伝統的生業と近代的開発の間の確執を把握することによって，熱帯林保全と資源管理のプログラムを提出する方向を探る。

43. 中央アジア乾燥地における大規模灌漑農業の生態環境と社会経済に与える影響　（石田 紀郎）

旧ソビエトの中央計画経済体制の下で中央アジアで推進された大規模灌漑農業は，一時的に農業生産性は上げたものの，アラル海やバルハシ湖の水位低下とそれに伴う砂漠化の進行，塩分・農薬成分の土壌への蓄積，漁業の衰退等，重大な生態系悪化を導いた。

当研究は，乾燥地における水と人間の関係を多角的にとらえ，環境再生のための基礎的知見を提供しようとするものである。日本，オーストラリア，カザフ共和国の農学，環境経済学の専門家が，水文学，気象学，植物学，土壌学，環境毒性学などの学際的な観点から調査を行う。

44. 手話コンピュータ辞書の構築に関する研究——映像メディアによる手話辞書　（鎌田 一雄）

手話は，手指動作・顔の表情・口形などの視覚情報によりコミュニケーションを行うが，従来の手話辞書はイラスト等で手話動作を記述する手法でつくられてきた。

当研究は，マルチメディアコンピュータシステムを利用して，レーザーディスクを記憶媒体とする，動画像が表示できる辞書の実現を目指すものである。辞書利用者・使用目的によって必要となる辞書形態等も異なるが，日本語から手話を検索する日・手辞書，逆に手話記述パラメータから対応する手話・日本語を検索する手・日辞書を主たる対象とする。

45. 満族文化の基礎的資料に関する緊急調査研究——特に民俗学の領域において　（愛新覚羅 顕琦）

満族の文化は，元来漢化が進んでいたが，さらに近年の近代化の趨勢のなかで，その固有の姿を急速に失いかけている。それゆえ，満族の伝統文化の究明はいまや緊急の学問的課題となっている。

当研究は，1990年度に実施した予備研究の経験に鑑み，実地調査を効果的に達成すべく中国側の陣容を改編し，人類学者はもとより歴史学者も含めて，家族に関する民俗に対象を限定して調査を行う。満族と，その支族でいまなお満語を話すシボ族の聚落の調査を通じて，家族慣習資料の蒐集に努めるものである。

46. 東西ドイツの再統合とその EC 統合および東欧変革に対するインパクト　　(住谷 一彦)

旧東欧諸国は，体制転換から 3 年を経てなお経済上の困難な課題と格闘しつつ，さらに生活水準の低下，経済格差の顕在化を背景とした民族運動の激化という問題に直面している。

当研究は，こうした東欧における変革の実態を明らかにしようとするもので，1990 年度の東ドイツ，ハンガリーを中心とする予備研究に引き続き，さらに各国研究者との国際共同の体制を固めて，地域における事例調査を行い，民族を含んだ経済学の基礎確立を目指す。

Ⅰ－3. 第Ⅲ種研究（総合研究）

助成対象一覧

助成番号上の＊印は国際共同研究を示す。
助成番号下の（継2）は継続2回目，（継3）は継続3回目を示す。
助成金額下の（　）は助成期間を示す。無記入は1年間。

	助成番号	研究題目 代表研究者　所属	助成金額 （円）
47	92-Ⅲ-003 （継2）	ヨーロッパ周縁地域における民族問題と移民・難民――「国家」概念の再検討―― 畑中 幸子　中部大学国際関係学部　教授　62歳　ほか4名	10,000,000 （2年）
48	92-Ⅲ-008 （継2）	満州族の言語と文化に関する共同研究――満日漢辞典の編纂を目標として―― 河内 良弘　満族言語研究会　64歳　ほか5名	4,500,000 （2年）
49	* 92-Ⅲ-014	北極アイスコアを利用した地球規模汚染の歴史と将来予測――自然（火山爆発・隕石落下等）と人間活動の割合―― 工藤 章　プルトニウム環境汚染調査研究会　53歳　ほか5名	13,000,000 （2年）
50	* 92-Ⅲ-015 （継2）	ロンタラ調査に基づく南スラウェシの伝統医薬の研究 山本 出　ロンタラ伝承医薬研究会　64歳　ほか10名	7,000,000 （2年）
51	* 92-Ⅲ-024 （継2）	ネパールにおける科学・数学カリキュラムの改善をめざす日常生活の中での知識・認識の研究 上野 直樹　ネパール教育プロジェクト　42歳　ほか8名	9,000,000 （2年）
52	* 92-Ⅲ-026 （継2）	太平洋島嶼地域の「持続可能な人間社会の発展」策に関する総合的研究 佐藤 幸男　アジア太平洋マイクロ・ステート研究会　44歳　ほか11名	9,000,000 （2年）
53	* 92-Ⅲ-031 （継2）	タイ国北部の焼畑から常畑への移行過程における耕地生態と村落社会の変容に関する研究――モンスーン環境に調和した耕地持続型農業システムの開発と定着を目指して―― 服部 共生　熱帯畑作農業研究会　66歳　ほか12名	9,000,000 （2年）
54	* 92-Ⅲ-033 （継2）	1989～90年革命の展開に伴う東欧の地方社会の変容に関する研究 南塚 信吾　東欧地方社会研究会　50歳　ほか14名	12,000,000 （2年）
55	* 92-Ⅲ-043 （継3）	中国帰国者の適応過程に関するプロスペクティブ・スタディ 江畑 敬介　中国帰国者適応過程研究会　52歳　ほか15名	4,800,000

	助成番号	研究題目 代表研究者　所属	助成金額 (円)
56	92-III-044* (継 2)	発展途上国における突然死の実態及び予防に関する研究——タイ東北部住民にみられる Lai Tai を素材として—— 遠藤 仁　東京大学医学部　助教授　54 歳　ほか 14 名	9,000,000 (2 年)
		小　計（第III種研究）　10 件	**87,300,000**
		研究助成合計　56 件	**199,400,000**

研究概要（第III種研究）

47. ヨーロッパ周縁地域における民族問題と移民・難民——「国家」概念の再検討　(畑中 幸子)

民族問題は，国民国家および多民族国家という 2 類型の枠組みのなかで解決されることが期待されたが，20 世紀末の今日に至っても依然として未解決であり，21 世紀は民族問題の世紀といわれている。リトアニア，エストニア，ウクライナ，ポーランドとドイツなどヨーロッパ周縁部はこうした民族問題を集約的に表出し，重要な事例を提供している地域である。

当研究は，昨年度の第II種研究に引き続き，これらの地域における，①「国家」と民族意識，②民族の移動を研究する。①ではフォークロアに表れた民族意識，大国（ソビエト）崩壊後の民族意識および民族対立，小国のナショナリズムとは何かを探る。②では共産主義体制の崩壊により，亡命者や移民の本国帰還が特にバルト諸国で目を引くことから，彼らの民族意識を国の外と内から考察する。また，経済難民や亡命者の入国に苦慮するドイツの庇護政策の転回点を民族問題と合わせて研究する。

48. 満州族の言語と文化に関する共同研究——満日漢辞典の編纂を目標として　(河内 良弘)

満州語は，清朝の歴史と文化の研究上重要な言語であって，近年に至り中国や台湾の檔案館（古文書館）からおびただしい数量の満州歴史文書が発見され，正確な訳読が期待されているが，歴史文書解読のための辞書が備わっていないため，訳読を困難にしている。

当研究は，これらの満文古文書読解のための満日漢辞典の編纂を目標とする。1990 年度の予備研究の成果を踏まえ，全体の作業を編纂実務と研究の 2 部に分けた。編纂実務では，コンピュータの専門家との共同により，満州文字のフォントエディターをはじめ，満州文字が印字可能で，約 2,000 字の漢字外字が印刷可能，さらに約 10 万件以上のレコードをハンドリングできるデータベースソフトを独自に開発することとし，これと並行して収録語彙の下敷きとなる『五體清文鑑訳解』のパソコンへの入力を進めている。研究の部についても継続して行い，辞書としての総合化を目指す。

49. 北極アイスコアを利用した地球規模汚染の歴史と将来予測——自然（火山爆発・隕石落下等）と人間活動の割合　（工藤 章）

極地域の万年氷河には，降雪により大気汚染物質が層となって閉じ込められ，そのコアサンプルから汚染の経年変化をたどることができる。グリーンランドのアイスコアの研究から，1980年代以降，有機鉛の国際的な法規制の影響で，鉛濃度が激減していることが明らかとなっている。一方，今後50億の人口が，限られた地球に住み生活水準の向上を目指していくうえで，ある程度の環境汚染は避けがたく，むしろその許容限度を決めることが要求されてくる。その際，各汚染物質の自然界でのバックグラウンドを知ることが必要となる。

当研究は，北緯80度西経73度標高1,600mの北極カナダ領にある万年氷河からアイスコアを採取し，産業革命以前から現在までの，地球規模汚染物質の歴史的濃度変化，特に，人間活動だけでなく，火山爆発，隕石落下等の自然現象の影響も明らかにしようとする。

50. ロンタラ調査に基づく南スラウェシの伝統医薬の研究　（山本 出）

ロンタラとはヤシの葉に刻まれた古文書で，特にインドネシア南スラウェシ社会の文化遺産である。ロンタラに記載された伝承医療法に近代医学の光をあてるにあたり，根幹をなす処方に記載された植物名は地方名古名で記されており，いったんロンタラの所在から散逸すれば同定はきわめて困難となる。現在ロンタラは，美術・骨董品として海外に流出しつつあり，これを活用する伝統医療者も減少し，文化遺産として危機に瀕している。

当研究は，1990年度の予備研究でロンタラの入手・披見，伝統医療者への面接，伝承医薬，処方・調剤・用法とそこに記載された現地語の植物名とそのリストづくり，これらの情報整理システムの構築を実施したため，情報の充実と並行して，名称と実物の照合による植物の同定を課題とし，成果の現代語への翻訳を行う。日本とインドネシア研究者の共同で，薬学，化学，植物学，言語学，文化人類学の学際的な体制で取り組む。

51. ネパールにおける科学・数学カリキュラムの改善をめざす日常生活の中での知識・認識の研究　（上野 直樹）

多くの開発途上国と同様，ネパールにおいても学校教育からのドロップアウトが多い。その大きな理由は，学校教育の言語，内容ともに欧米から導入されたものを骨子とし，日常生活からかけ離れているということである。一方，バザールなどではストリート・マスという独自の計算方法が行われ，村の生活のなかでは生物に関する実用的な知識が機能している。

当研究は，このような背景を踏まえて，村やバザールにおける日常知識を十分に生かし，かつそれを科学的な知識と適切に統合したカリキュラムを開発することを目標に，ネパールにおける日常生活のなかで獲得される算数，科学に関連した知識，技能の性質，内容がどのようなものかを明らかにするための調査を組織的に行う。1991年度の試行・準備研究に引き続き，現地調査を実施し，さらにカリキュラム・教材の試用など教育現場への適用を目指す。

52. 太平洋島嶼地域の「持続可能な人間社会の発展」策に関する総合的研究　（佐藤 幸男）

太平洋島嶼国・地域は，これまで「伝統・未開性」といった「特異性」が注目されてきた。しかし，この「特異性」を逆に問い返しつつ，これら地域の社会経済システムの特質を分析することで，「永続可能な人間社会の発展」のあり様を検討することも可能であろう。これは，これまで支配的であった「発展」の意味転換を模索すると同時に，オルタナティブな発展のモデルの1つとして理論化することでもある。

当研究は，ブルントラント報告として有名な「持続可能な開発」論の概念を，人間社会のあらゆる活動が生み出す複合的な環境破壊の原因を取り除こうとする理念の1つととらえ，この理念型を基礎に，島嶼国社会が抱える諸問題をヒト・カネ・モノの流れから解明し，その内実に即してこれらの地域独自の狭小性，島嶼性，生活様式に根ざした地域的「共生」の論理構成を理論化しようと試みる。1989,90年度の試行・準備からの発展である。

53. タイ国北部の焼畑から常畑への移行過程における耕地生態と村落社会の変容に関する研究（服部 共生）

熱帯での森林破壊が深刻化するなかで，焼畑農業の広がりが懸念されている。一方，焼畑に依存し生活している人々のいる現実も無視できない。問題は，近年の人口増加や市場経済の浸透が，生態的に安定した伝統的焼畑農業を立ち行かなくしている点にある。その結果が際限のない森林の開伐である。ここでの問題は，農民の多くが地力の再生維持する背景をもたないままで焼畑の常畑的利用をせざるを得ない事態に直面していることである。

当研究は，かかる事態に直面する，タイ国北部の焼畑を生業とする山地民とタイ農民の混住している一農村において，現在の焼畑の常畑的利用過程における耕地の生態学的変化の実態を，横断的かつ同時に調査するとともに，並行してそれらの耕地を経時的に追跡調査する。さらに，熱帯モンスーン地域における常畑化を可能にする農業システムの開発導入試験や，それらの農業システムの当該地域への社会経済的な受容可能性も検討する。

54. 1989～90年革命の展開に伴う東欧の地方社会の変容に関する研究（南塚 信吾）

1989～90年にかけて始まった東欧革命については，革命に伴う各国の制度的変化や首都を中心とする全国的な変化は，わが国でもある程度知られているが，国民の大部分が生活する地方社会（地方都市や村）における変化は，ほとんど知られていない。

当研究は，東欧各国から地方都市ないしは村を１つずつ取り上げて，その政治・経済・社会・文化の諸側面における変化を調査・研究し，地方社会がどのような変容を遂げつつあるのかを，明らかにしようとする。対象となる地方社会は，土着的な要素を残しながらも近代化の波に洗われているものを選択し，調査・研究の重点も，制度的側面よりも，地方社会の統合の様式の変化や地方社会の構造の変化の究明に向けている。したがって，地方自治，社会的儀礼，家族関係，パトロン－クライエント関係，教会の役割，差別などに注目する。1991年度予備研究での現地共同体制の確立が基盤となっている。

55. 中国帰国者の適応過程に関するプロスペクティブ・スタディ（江畑 敬介）

近年，わが国の国際化は著しい。それに伴って，多様な文化を担った人々のわが国への移住も盛んになりつつある。いわゆる中国帰国者の場合も，「大量帰国」時代を迎えているが，彼らは，日本語にも日本文化にも馴染みが少ない異文化への移住者として，適応上のさまざまな困難に遭遇している。

当研究は，中国帰国者の日本社会への適応を促進し，適応障害の減少と予防策を明らかにすることを目的として，順次帰国する約250世帯（1,000名）を対象に，帰国直後から３年間にわたる適応過程を追跡調査し，あわせて，帰国しない中国在留者とその家族の適応状況とも比較することによって，適応要因を包括的にとらえようとするものである。また，当研究は，多文化社会における適応と福祉のあり方を方向づけるモデル研究の１つと考えられ，中国帰国者のみならず，他の諸外国からの移住者の社会への適応にも寄与しようとするものである。

56. 発展途上国における突然死の実態及び予防に関する研究――タイ東北部住民にみられるLai Taiを素材として（遠藤 仁）

途上国では，工業製品の購入に必要な現金収入を得るために，農民が都市部や外国へ出稼ぎに行くケースが増えているが，この出稼ぎ中に発生する突然死がタイ東北部出身者に多発している。この突然死を地元ではLai Taiと呼び，その原因や予防対策はいまだ不明である。

当研究は，タイ側研究者からの協力要請に基づき，このLai Taiの実態をタイ東北部で調査し，原因を追求することにより予防策の確立を目指して，以下の諸項目を実践する。すなわち，①突然死の日本，タイ両国比較，②社会生活の実態調査，③突然死関連疾患の臨床研究，④食事中の必須微量元素の分析，⑤土壌・水・農産物等の環境因子の調査，⑥病態モデル動物の作製とLai Taiとの対比，⑦微量栄養素・アルカリ剤・微量元素の補充による予防の試み，等の研究を総括するなかで予防策の提言を目指す。

II．市民研究コンクール

II－0．市民研究コンクールの概要

市民研究コンクールのねらいは，それぞれの地域で生活する住民と専門の研究者とが一体となって行われる，地域の生活に密着した長期的な研究活動を促進することにある。“身近な環境をみつめよう”のテーマの下に，1979年度以来1年おきに5回の公募を行い，その後いったん公募を休止して過去の実績に関する総括評価プロジェクトを実施し，その結果を踏まえて1991年度から第6回の公募を再開した。

今年度は，第5回のフォローアップ助成対象1件と，第6回の本研究助成対象7件の決定が行われた。

第5回では，1991年3月の理事会で最優秀賞1件，優秀賞2件が決定した後，このうち1チームからの申請を受けて長期的なフォローアップ助成について検討を行ってきたが，選考委員会での選考を経て，1993年3月の理事会において公益信託設定のための基金として2,000万円の助成が決定した。

また，第6回では，予備研究助成対象15チームの9か月にわたる予備研究の成果を基に選考が行われ，1993年3月の理事会で本研究助成対象7件に対してそれぞれ400万円の助成が決定した。第6回については以下のようなスケジュールで進められている。

〈項目〉	〈第6回市民研究コンクール〉
●研究計画の公募	1991年10月～1992年1月
●予備研究助成対象の決定	1992年3月
●予備研究実施	1992年4月～12月
●本研究助成対象の決定	1993年3月
●本研究実施	1993年4月～1995年3月
●最優秀賞・優秀賞の決定	1995年10月

なお，第5回，第6回コンクールの選考委員会の構成は次のとおりである。

第5回　委員長：小原秀雄

委　員：赤瀬川源平，有馬真喜子，岡部昭彦，小川信子，鈴木継美，高野公男，播磨靖夫，日高敏隆，本間義人

第6回　委員長：日高敏隆

委　員：赤瀬川源平，嘉田由紀子，高野公男，土井陸雄，播磨靖夫

II－1. 第5回研究コンクール フォローアップ助成

助成対象一覧

	コード番号	研究題目 応募団体名（代表者・氏名）	対象 都道府県 人数	助成金額 （円）
1	5C-090	港町・函館における色彩文化の研究――下見板のペンキ色彩の復原的考察を通して―― 元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会　村岡 武司	北海道 25	20,000,000

選考経過

第5回研究コンクールでは，最優秀賞あるいは優秀賞を得たチームのなかから1件を対象に，その後の長期的な活動の展開を支援するためにフォローアップ助成を行うこととしていた。その内容は，公益信託などの形での運用を前提とした研究奨励基金(1件：2,000万円)，若しくは3～5年間程度の継続的な活動のための助成金（総額1,000万円以内）というもので，助成金は研究奨励基金の該当がない場合にのみ適用される。

今回のコンクールで賞を得た3チームのうちからは，最優秀賞の「元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会」のみが，研究奨励基金としてのフォローアップ助成へ申請を行った。

1991年9月に第7回選考委員会が開催され，申請チームからのヒアリングも含めて審議が行われ，その結果，以下の2つの条件の下にこれを研究奨励基金の候補とし，さらに検討が進められることになった。その条件とは，委員会での意見を踏まえてさらに申請計画の内容を練り直すことと，公益信託設定が許可される可能性について北海道当局との折衝を行うことである。

前者については同年12月にはチームの側からの改善案が提示されたが，後者については許可の主体となる北海道庁住宅都市部の側に信託設定の先例がなかったこともあって，折衝にほぼ1年半を要する結果となった。

1993年2月に，道側から設定許可の可能性が示唆されたため，第8回選考委員会を開催し，前回委員会での条件が満たされた旨，全委員からの了承を得て研究奨励基金候補として理事会への推薦を図ることとなり，これを受けて3月の理事会で助成が決定した。

フォローアップ助成におけるテーマは「函館色彩まちづくり」とし，公益信託の設定を通じて，これまでにチームが培ってきた研究や実践の成果をさらに地域のなかで広く深く根付かせていくことをねらいとしている。募金型公益信託として地域における市民主体の大きな基金にまで発展させていくことがもくろみとされており，結果がおおいに期待される。

なお，公益信託の受託者は当初より熱意をもってその実現に協力してきた住友信託銀行がこれにあたる。

II－2. 第6回市民研究コンクール本研究助成対象

助成対象一覧

	コード番号	研究題目 応募団体名（代表者・氏名）	対象 都道府県 人数	助成金額 （円）
1	6C-009	まちを学校にするための仕組と仕掛けに関する研究――「まちの謎解きブック」からの展開―― 石打の子どもと地域づくりを考える会　林 初恵	新潟 16	4,000,000
2	6C-017	大島の間隙生物――瀬戸内海・大島の砂浜にすむ生き物たちの生態―― 大島間隙生物研究会　重松 洋	愛媛 17	4,000,000
3	6C-031	北国の草原湿地帯のシンボルであるオオセッカの好む環境に関する研究 オオセッカの生育環境研究グループ　宮 彰男	青森 22	4,000,000
4	6C-034	蒲生野における身近な水と生活文化の研究 ――「あたりまえ」の農村の「あたりまえでない」水環境調査―― 蒲生野考現倶楽部　池内 順一郎	滋賀 17	4,000,000
5	6C-037	ギフチョウの野外における行動と生態研究 天竜村ギフチョウ研究会　野牧 君夫	長野 15	4,000,000
6	6C-058	私のえらんだ文化財――人はどのようにしてものをえらぶか―― 野外活動研究会　岡本 信也	愛知 23	4,000,000
7	6C-062	豊島の地域文化・養育文化を見直しその現代的意味を考える 豊島の地域文化を見直す会　澤田 英三	広島 24	4,000,000
		合　計　　7 件		**28,000,000**

(注)本研究助成期間：1993年4月1日～1995年3月31日の2年間

研究対象概要

1．まちを学校にするための仕組と仕掛けに関する研究
（石打の子どもと地域づくりを考える会）

新潟県の石打は，かつては貧しい寒村だったが，40年足らずの間にスキーの観光地として変貌を遂げた。このような環境の劇的変化は，自然を含めた環境や人々の暮らしを一変させた。都市生活の普及で，何世代にもわたって受け継がれてきた，生態系にのっとった暮らしが生み出した，美しく豊かな文化は失われていきつつある。

当研究は，このことに心を痛めた住民が，研究者や専門家の協力を得て，地域の暮らしと環境を見直し，本来，地域も担っていた子育ての力をいま1度，町に取り戻そうというのがねらいである。予備研究で制作した「まちの謎解きブック」を核に，さらに老人からの聞き取りによる生きたライブラリーづくりや，さまざまなワークショップなどを通じて，子どもたちが地域で学ぶ機会をつくり，祖先からの知恵のメッセージを伝えるような場を作り出していくことを目指す。

2．大島の間隙生物――瀬戸内海・大島の砂浜にすむ生き物たちの生態
（大島間隙生物研究会）

大島は瀬戸内海の愛媛県近くに位置する周囲約50km程度の島であるが，護岸工事や埋め立てなどで砂浜や自然の海岸が刻々変化してきている。

当研究は，地元大島高校の教師と生徒が中心となり，この島の砂浜に住む微小な砂粒間隙生物を対象に，その季節消長，砂質や水質との関係，護岸や生活排水などの人為的環境の影響などを長期にわたって観察していこうというものである。予備研究では，間隙生物の観察に大部分のエネルギーが向けられ，それによってかなりのデータも蓄積されてきたが，環境そのものの評価尺度としてこれが妥当かどうかという検討が，今後の重要な課題になる。また，研究の主体が高校生であるために，この研究がどのように次代に引き継がれていくかという点，市民研究として，地域でのよりいっそうの広がりを持ち得るかという点についても，当研究では課題として探究していく。

3．北国の草原湿地帯のシンボルであるオオセッカの好む環境に関する研究　（オオセッカの生育環境研究グループ）

青森県三沢市の東北部にある仏沼湿原は，渡り鳥の中継地であり，希少種や危急種を含む多数の野鳥の繁殖地だが，鳥獣保護区などの規制がないために開発計画が進行中である。

当研究は，仏沼湿原に世界最大級の繁殖地を持つと目されているオオセッカという危急種指定の野鳥を対象に，その生息環境を保全することをメインテーマとするが，オオセッカだけでなく，植生やオオセッカ以外の野鳥，昆虫，魚類，哺乳類，それに野焼き，畑作などの人間活動までを広く観察対象として，それらのなかでのオオセッカの生息環境保全を考えていこうというものである。当研究では，予備研究までの観察を継続するだけでなく，研究対象地域を鳥獣保護区やラムサール条約指定地域にし，自然観察・環境教育の場とすること，オオセッカの生育に適した環境条件を知るための実験区の設定と幅広い目標を掲げている。

4．蒲生野における身近な水と生活文化の研究
（蒲生野考現倶楽部）

琵琶湖の湖東部の水田地帯にある蒲生野は，地図の上でみればどこにでもあるようなごく当たり前の農村地帯である。地域に入っても，これといって風景的な特色をみつけにくい。地元の人たちも「なんもないところ」という。

当研究では，よそ目にもまた内側の目からも何も特色がないと思われている地域環境のなかで，特に「ため池」と「みぞっこ」を取り上げ，その自然生態や環境と人間とのかかわりをめぐる生活文化について，地域住民の手で発掘し，記録に残していくことを目的としている。3世代・4世代にわたる幅広い参加者，子どもたちによる「たんけん」があり，そしていろいろなことを「はっけん」し，その流れのなかから「ほっとけん」という気持ちが生まれてくるようなプロセス重視の柔軟な姿勢，環境問題を自分たちの視点からとらえ自己確認・自己発信をするためのくふうなどに，方法としての特色がある。

5．ギフチョウの野外における行動と生態研究

（天竜村ギフチョウ研究会）

ギフチョウは昔から日本ではよく知られたチョウでありながら，その生態はほとんど分かっていなかった。生息地である雑木林も開発に押されて減少し，種としての絶滅の危機にもさらされている。

当研究は，長野県最南端の天竜村にギフチョウの生息地を発見したチームが，その自然のなかにおける生きた姿を明らかにしようとするものである。すでに予備研究において，ギフチョウのこの調査地での食草であるヒメカンアオイのすべての株に番号をつけ，そこに産卵されたギフチョウの卵，それからかえった幼虫のその後の動きをつぶさに追うことによって，これまで知られていなかった生態学上の重要な知見が明らかとなってきた。当研究では，さらにギフチョウの生活史の謎の部分を解明し，生息環境も含めた保護のための処方箋を探ろうとする。

6．私のえらんだ文化財――人はどのようにしてものをえらぶか

（野外活動研究会）

日常の生活や風俗が激変していく現代にあって，私たちにとってかけがえのないものとは何か，記憶にとどめておきたいことは何か。それは権威によって指定された文化財とは異なる，私にとっての文化財といえる。

当研究は，多くの参加者を募り，1人ひとりが路上観察のフィールドワークによって収集する，私にとっての文化財を資料化し，その意味分類などを試みる一方，実物，スケッチ，写真による実験展示を行い，選ぶ私とそれを見立てする私との間に通底する意識を明らかにしていこうとするものである。予備研究ですでに資料カードの展示会も行い，参加者も着実に増えつつある。研究対象はふだん見落としているもの，社会通念ではほとんど価値を失ったものばかりで，そこに社会通念の文化には入れようのない文化の粉のようなものがにじみ出ている。それを採集していくことは，社会通念を見直すという新しい力につながる可能性を秘めている。

7．豊島の地域文化・養育文化を見直しその現代的意味を考える

（豊島の地域文化を見直す会）

瀬戸内海の安芸灘・芸予諸島の中央に位置する豊島は，みかんの産地やあび漁という独特の魚法を発達させたことで知られている。また，「家船」と呼ばれる夫婦での県外出漁もユニークな暮らし方で，そこには独特な子どもの養育文化や地域が一体になった相互援助的養育コミュニティの発達がみられている。しかし，こうした暮らしの様相も，人口の高齢化，過疎化などにより，次第にその独自性が失われつつあるという。

当研究は，この豊島独自の地域文化，とりわけ伝統的に発達してきた養育文化がどのようなものであったかを記録し，同時にこれらの暮らし方の現代的意味を考えようとするものである。予備研究段階において，研究者と地元住民が一体となった研究体制が確立されつつある。当研究ではさらに，聞き手と語り手の「対話」を通じて生き生きした生活像を描き出し，最終的には一連の研究のプロセスを物語として1冊の本にすることを目指す。

Ⅲ．市民活動助成

III－0．市民活動助成の概要

本助成は，昨年度に準じ，市民活動の分野における活動全体の発展･向上に役立つことを主な目的に，「活動の交流や促進の契機となるプロジェクト」に対する助成を行うことをその主旨としている。

具体的には，以下の内容に対し，年２回の公募(第１期＝４月１日～６月20日，第２期＝10月15日～12月15日）により助成を行った。

①これまでの活動に関する記録の“作成”(原稿の執筆から完成まで)

②すでに作成された活動記録等の“出版”

③複数の活動団体相互の連携による集会（セミナー，ワークショップ，シンポジウム等）の開催・運営，および，その成果のとりまとめ等

④多くの活動団体を対象とした情報紙／誌の編集・発行。海外の，または，海外への市民活動情報の翻訳・出版など

⑤一定の地域や分野における活動拠点，および，これに準ずる団体の基盤整備等

⑥他の分野の活動を一定期間にわたって体験するための人的交流

⑦市民活動全体の支援を目指した調査や研究

⑧その他，市民活動全体の活性化に役立ち得るプロジェクト

第１期の公募の結果，125件の申請があった。これについては，７月から８月にかけての選考委員会（委員長・栗原彬，ほか４名）での慎重な選考を経て，９月末開催の第65回理事会にて10件，1,770万円の助成対象を決定した。助成期間は，11月より１年間である。

また，第２期の公募では，85件の申請があった。これについては，1993年１月から２月にかけての同選考委員会での選考を経て，３月開催の第66回理事会にて９件，1,730万円の助成対象を決定した。助成期間は，４月より１年間である。

なお，上記の選考に際しての条件および基準は以下のとおりである。

①「活動記録の出版」に関する選考の条件

・記録作成の作業が完了し，若干の手直し程度で完全原稿ができる状態

にあること。

・事実に即した内容であること。

・多数の読者が興味深く読めるよう十分な配慮や工夫がなされていること。

・出版社との間に，出版計画の大筋について事前に同意が得られていること。

②「上記以外のプロジェクト」に関する選考の基準

1）申請団体の通常の活動について

・活動自体が多くの人々に支えられているか。

・柔軟な発想やアイディアに基づく活動であり，今後の継続性が見込めるか。

・閉鎖的でない広がりのある活動か。

・積極的な社会意識をもった創造的な活動か。

2）プロジェクトの計画内容について

・独創性の感じられる内容か。

・計画の実現性があり，成果が広く波及する可能性を有しているか。

・現時点での計画が，そのグループにとっても他のグループにとっても，今後の展開・発展のうえで重要な契機となるか。

・計画を遂行する際の適切な人材が確保できているか。

III－1. 市民活動助成（第１期）

助成対象一覧

	助成番号	テーマ 代表者　所属	助成金額 （円）
1	92-K-028	東京・日野市における「市民版・まちづくりマスタープラン」作成の試み 明峯 哲夫　日野・まちづくりマスタープランを創る会　代表　46歳　ほか10名	1,900,000
2	92-K-032	「資料　日本ウーマン・リブ史　全三巻」の出版 三木 草子　「資料ウーマン・リブ史」刊行をすすめる会　代表　49歳　ほか6名	1,700,000
3	92-K-048	フィリピン―日本共同：都市農村地域住宅建設・供給における運動体経験交流フォーラムの開催と準備 ホルヘ アンソレーナ　ポンの会（ACHR日本事務局）　代表　62歳　ほか13名	1,700,000
4	92-K-049	精神障害者のセルフ・ヘルプ活動に関する史的検証および研究成果の報告書作成 石川 到覚　セルフ・ヘルプ活動を考える会　代表　45歳　ほか15名	1,800,000
5	92-K-058	すずめ共同作業所の活動に関する記録の出版 伊野部 淳吉　社会福祉法人　すずめ福祉会　会長　64歳　ほか6名	1,200,000
6	92-K-061	登校拒否・不登校の児童・生徒に対する教育援助の一環としてのホームスクーリング活動 奥地 圭子　東京シューレ　主宰　51歳　ほか10名	2,000,000
7	92-K-062	「自立生活センター設立ハンドブック」（仮称）作成のためのモデルプロジェクト 山田 昭義　全国自立生活センター協議会（JIL）　代表　50歳　ほか11名	1,900,000
8	92-K-105	富士山流域における水のネットワークづくり 渡辺 豊博　三島ゆうすい会　事務局長　42歳　ほか11名	1,600,000
9	92-K-112	患者塾の開催とブックレットの発行 辻本 好子　医療人権センターCOML　事務局長　44歳　ほか13名	2,000,000
10	92-K-115	アメリカ市民活動に関する日本向け情報誌「草の根アメリカ」（仮題）の発刊 岡部 一明　日本太平洋資料ネットワーク（JPRN）　顧問　42歳　ほか12名	1,900,000
		市民活動助成・第１期計　**10**　件	**17,700,000**

III－2. 市民活動助成（第２期）

助成対象一覧

助成番号下の（継２）は継続２回目を示す。無記入は新規。

	助成番号	テーマ 代表者　所属	助成金額 （円）
11	92-K-129	「市民とアジアをむすぶ国際フォーラム '93 愛知」の開催 池住 義憲　市民とアジアをむすぶ国際フォーラム'93 愛知実行委員会　事務局長　48 歳 ほか 10 名	2,000,000
12	92-K-144 （継 2）	日本に残されている貴重な湿地の保護・保全の運動 山下 弘文　日本湿地ネットワーク　代表　59 歳　ほか 8 名	2,000,000
13	92-K-149	インドネシアに関わる NGO 間の国際情報交流事業 加納 啓良　INGI 神奈川会議実行委員会　代表　44 歳　ほか 7 名	1,900,000
14	92-K-160	東アジア 4 ケ国女性労働者の交流と研修プログラムの実施 塩沢 美代子　アジア女子労働者交流センター　所長　68 歳　ほか 4 名	1,900,000
15	92-K-161	みずうみケアキャンプの開催（重症心身障害児とその家族のためのサマーキャンプ） 飯森 裕一　みずうみケアキャンプ実行委員会　代表　38 歳　ほか 17 名	1,700,000
16	92-K-185	ビーチクリーンアップ活動およびその記録の作成 小林 功敬　クリーンアップ関西事務局　代表　31 歳　ほか 11 名	2,000,000
17	92-K-187	売買春被害者としてのアジア女性の緊急保護活動 大沢 伸恵　かながわ・女のスペース“みずら”　代表　41 歳　ほか 10 名	2,000,000
18	92-K-192	信州伊那における内なる国際化 ――外国人のための日本語学校の運営と生活便利手帳の作成―― 若林 敏明　伊那国際交流懇談会　事務局長　37 歳　ほか 10 名	1,800,000
19	92-K-211 （継 2）	山形県全域に激増している外国人花嫁への識字教育，医療ケアそして日本人家族へのアプローチ 武田 節子　日本国際ボランティアセンター山形　代表　48 歳　ほか 5 名	2,000,000
		市民活動助成・第 2 期計　9　件	**17,300,000**
		市民活動助成　第 1 期・第 2 期合計　19　件	**35,000,000**

助成対象概要

1．東京・日野市における「市民版・まちづくりマスタープラン」作成の試み　(明峯 哲夫)

現在の都市が抱えるさまざまな問題は互いに錯綜し，個別的な対処・打開がきわめて困難になりつつある。このような状況下，今後の町づくりには，行政と市民の対等な関係に基づく話し合いを経た計画づくりが肝要であろう。それにはまず，市民の側の建設的な提案力が不可欠となってくる。

当プロジェクトは，意識ある日野市民有志が中心となり，同地域を現在の「ベッド・タウン」から「自立した生活都市」へと脱皮させることをねらいに，4つの部会を柱とした具体的な提言づくりを目的としている。

2．「資料　日本ウーマン・リブ史　全三巻」の出版　(三木 草子)

日本の女性運動は明治以来，さまざまな人々によって多様な形で展開されてきた。その結果，女性をめぐる環境も大きく変化しつつあるが，性差に対する意識は，いまなお十分改善されているとは言いがたい。

当プロジェクトは，それまでの女性運動が著しい変貌を遂げた，1970年代の「ウーマン・リブ」運動に焦点をあて，その際に作成されたビラ・チラシ・パンフレット等，種々の資料や行動記録を集成・編纂して出版することとしている。これにより，今後の女性問題を論じるうえでの資料とすることを目的としている。

3．フィリピン－日本共同:都市農村地域住宅建設・供給における運動体経験交流フォーラムの開催と準備　(ホルヘ アンソレーナ)

住宅を通じた町づくりは開発過程の重要な側面である。この分野での住民・専門家双方による経験交流のネットワーク化がいま，アジア地域でも必要とされている。

当プロジェクトは，住宅を通じた住民参加の町づくりに経験のある日本の専門家・市民がフィリピンを訪問，フォーラム形式で経験交流を行うものである。ここでは，都市・農村部スラム地区住民への低価格住宅供給，および居住環境改善を住民参加で進めているグループと交流し，必要に応じた技術的助言を行うとともに，その詳細をとりまとめ，成果の共有を図ることとしている。

4．精神障害者のセルフ・ヘルプ活動に関する史的検証および研究成果の報告書作成　(石川 到覚)

近年，地域保健・医療および福祉の分野で注目されているセルフ・ヘルプ活動は，孤独で孤立しやすい疾病・障害者の生活を回復させ，一般市民との共生関係を築いていくうえで重要視されている。

当プロジェクトでは，差別と偏見にさいなまれながらも，活動を展開している精神障害者を中心とした複数のグループの歴史的変遷の過程を検証することにより，これらの活動の意義と役割および機能などを解明していくと同時に，その成果をとりまとめ，他の自助団体や関係各方面へ還元することとしている。

5．すずめ共同作業所の活動に関する記録の出版　(伊野部 淳吉)

たとえ障害が重くても，地域のなかでその一員として働き，生活がしたいという願いにこたえて開所した「すずめ共同作業所」(高知県高知市)の活動は，地域のさまざまな人々に支えられながら着実に前進し，すでに16年を経過している。

当出版は，一昨年度の助成によってとりまとめられた同作業所のこれまでの記録を刊行し，活動の成果を広く伝えていくことを目的としている。

6．登校拒否・不登校の児童・生徒に対する教育援助の一環としてのホームスクーリング活動　(奥地 圭子)

近年，登校拒否・不登校の児童・生徒は増加の一途をたどっているが，彼らへの対応には，無理に学校へ戻そうとするのではなく，多様な成長への援助が考慮されるべきであろう。

当プロジェクトは，市民活動が生み出した学校外の学びの場の1つである「東京シューレ」が，現在，在宅の形で過ごしている多くの子どもたちに，ホーム・スクーリングのための新しいコミュニケーション手段と学習援助を用意し，自己実現への道を支援することを目指している。

7．「自立生活センター設立ハンドブック」(仮称)作成のためのモデルプロジェクト　(山田 昭義)

自立生活センターとは，重度障害者が地域で自立した生活を送るのに不可欠なサービスを，利用者の立場に立って提供する組織である。これらセンターの相互援助と全国的普及を目指して1991年11月，「全国自立生活センター協議会」(JIL) が設立された。

当プロジェクトは，特に厳しい環境におかれている東北地方に，核となる自立生活センターを設立することにより，同地方の障害者の自立を支援すると同時に，このようなセンター設立をいっそう効果的，広範に行うための基礎となるノウハウの確立を図るものである。

8．富士山流域における水のネットワークづくり　(渡辺 豊博)

富士山からの地下水の恩恵を受け，豊かな水辺環境を保持してきた「水の都・三島」も，いまでは上流地域の地下水の汲み上げと涵養域の減少により，年間を通じての水の噴出はなくなり，危機的状況にさらされている。

当プロジェクトでは，市民・企業・行政が一体となった形で，富士山流域全体における水のネットワークづくりを目指し，各パートナーの組織化を図るとともに，水のネットワーク会議の設立や「水」に関する調査などを実施し，流域内の連携と交流の活発化を推進していくこととしている。

9．患者塾の開催とブックレットの発行　(辻本 好子)

医療人権センターCOMLは1990年9月に設立され，医療を消費者の目でとらえ，患者中心の開かれた医療を目指して活動している。「いのちの主人公」「からだの責任者」として患者が主体となり，積極的に医療に参加しようと提唱しているグループである。

当プロジェクトでは，「賢い患者になりましょう」をキャッチフレーズとした患者塾を開催し，参加者の話し合いのなかから患者と医療者が互いに気づき合い，関係づくりを進めていこうとしている。また，患者塾の内容をブックレットにまとめ，刊行する予定である。

10．アメリカ市民活動に関する日本向け情報誌「草の根アメリカ」(仮題) の発刊　(岡部 一明)

日本太平洋資料ネットワーク (JPRN) は，アメリカ在留の日本人を中心として1985年にカリフォルニア州に設立された非営利団体 (NPO) で，人権やマイノリティの擁護に焦点をあてた活動を展開している。

当プロジェクトは，混沌とした状況のなかから新しい可能性を生み出すアメリカの草の根活動に関する情報を日本に伝えるとともに，日米双方の社会が現在，どのような可能性をはらみつつあるのかを検証・提起することを目指している。また，このような試みを通して，日本の市民活動の一助となることも目的としている。

11．「市民とアジアをむすぶ国際フォーラム'93愛知」の開催　(池住 義憲)

「市民とアジアをむすぶ国際フォーラム」は，1988年の小田原，1989年の淡路島の大会を経て，今回で3回目となる。ここでは，① NGOや市民相互間におけるネットワークづくり，②国際協力を目指す社会づくり，③共に等しく生きられる社会づくりを目的としている。

当プロジェクトは，環境や第三世界の問題を地域で考え，地域の人々とともに解決していくための糸口を見出す試みを通して，市民間のネットワークづくりを促進し，地域づくりにつなげていく機会とすることを目指している。

12．日本に残されている貴重な湿地の保護・保全の運動　(山下 弘文)

日本湿地ネットワークでは1991年以来，湿地に対する人々の関心の高まりを背景に，開発の波にさらされ危機的な状況にある日本の湿地の保護・保全に関する種々の試みを行ってきた。

当プロジェクトは，昨年度の助成による成果も踏まえ，ラムサール条約締結国会議の開催に合わせ，独自の国際シンポジウムを実施することとしている。ここでは，上記の会議に出席する関係者等に日本の湿地の実態を知らせるとともに，「持続的な賢明な利用」を模索する場とすることをねらいとしている。

13. インドネシアに関わるNGO間の国際情報交流事業
(加納 啓良)

日本は現在，インドネシアにとって最大の貿易相手国であると同時に，ODA供与国でもある。にもかかわらず，政府間レベルでの交流に比べ，市民レベルでのそれは従来きわめて低調であった。

当プロジェクトでは，①日本の援助や企業進出に関する情報や資料を収集し英訳のうえ，インドネシアおよび関係諸国のNGOに実情を発信していく，②インドネシアにおけるNGO等に関する情報を和訳のうえ，同国に関心を寄せる日本の市民や活動団体に伝える，ことなどを目的としている。

14. 東アジア4ケ国女性労働者の交流と研修プログラムの実施 (塩沢 美代子)

韓国・台湾・香港などの東アジア地域では，近年，製造業からサービス業への産業構造の移行などに伴い，女性たちは深刻な雇用問題に直面している。

当プロジェクトでは，日本も含め，同様の状況におかれた4か国の女性労働者たちが集い，それぞれの状況認識を深めながら今後の雇用のあり方を考え，女性労働者運動の方向を探ることを目指している。具体的には，まず，事例研究に基づく学習と討議，経験交流を行い，最終的に，とりまとめのためのシンポジウムを開催する予定としている。

15. みずうみケアキャンプの開催（重症心身障害児とその家族のためのサマーキャンプ） (飯森 裕一)

みずうみケアキャンプ実行委員会は，(財)太田総合病院(福島県郡山市)の小児科スタッフによって1989年に組織され，同小児科における重度の心身障害児を対象としたキャンプを実施してきた。

当プロジェクトでは，これまでの実施母体である病院関係者のみでなく，県下の他の施設や行政機関とも共同しながら，対象とする障害児やスタッフも病院外から広く募って実施することとしている。これにより，この活動を地域にさらに広げるとともに，在宅障害児の生活の質的向上に役立つことを目指している。

16. ビーチクリーンアップ活動およびその記録の作成
(小林 功敬)

クリーンアップ関西事務局は，誰にでもできる環境保護活動を目指し，1991年以来「ビーチクリーンアップ」を提唱・実践している。これは，海岸に漂着したゴミをデータとして定量的に把握し，データに基づいたゴミ問題の改善提案を行うものである。

当プロジェクトは，1993年度のクリーンアップ関西事務局の「ビーチクリーンアップ」への取組みの概要と，活動により収集されたデータおよび，データ分析による考察や改善提案を「ビーチクリーンアップリポート」として，とりまとめることとしている。

17. 売買春被害者としてのアジア女性の緊急保護活動
(大沢 伸恵)

今日，不法滞在と呼ばれるアジア人女性は，タイ人だけでも2万人を超え，「性産業」に従事している（させられている）者も多い。“みずら”は，女性による女性のための相談室として1990年に活動を開始したが，1991年からは外国人女性の緊急保護活動にも取り組み出した。

当プロジェクトでは，こうした女性たちの緊急避難所としてのシェルター機能の充実，および，相談業務体制の確立を図ることとしている。さらに，こうした活動を通しての経験を，多くの人々に伝え，解決に向けての契機となる集会も開催する予定としている。

18. 信州伊那における内なる国際化――外国人のための日本語学校の運営と生活便利手帳の作成 (若林 敏明)

外国人労働者の増大は，同質・画一社会に染まった日本人に内なる国際化を促している。伊那国際交流懇談会は，同地域において，さまざまな国際交流および支援活動を実践している個人や団体が連携し，情報交換や相互理解を深めながら共通の課題に取り組むことを主な目的として設立された。

当プロジェクトは，高校生を含んだ市民が，在住の外国人とともに，日本語学校の開設や「生活便利手帳」の作成を行うことなどを通して，誰もが安心して暮らせる町づくりを目指そうとしている。

19. 山形県全域に激増している外国人花嫁への識字教育，医療ケアそして日本人家族へのアプローチ　（武田 節子）

近年，日本の農村地域では，農業の不振，急激な過疎化，農家の「嫁不足」などを背景に，いわゆる“外国人花嫁”が増加しているが，一方で，これに伴うさまざまな問題も生じつつある。

当プロジェクトは，昨年度の助成による日本語学校4校や医療情報センターの運営，および，各国理解講座の開催に加えて，今年度は韓国において，意識ある人々とともに，“花嫁”問題をめぐる話し合いの機会を設け，「ほんとうの情報提供」を目指した問いかけを行うこととしている。

Ⅳ．国際助成

IV－0. 国際助成の概要

国際助成の対象地域は当面の間，東南アジア諸国に焦点を絞っており，関心分野は，過去16年間に行った国際助成の経験から，1992年現在，各地域の固有文化(indigenous culture)の保存と振興を目指すプロジェクト等に重点をおいている。

また，助成対象の選考にあたっては，以下の諸点を満たすようなプロジェクトを重視している。

①東南アジア諸国の人々の発想になり，東南アジア諸国の人々によって行われるプロジェクトである。

②政府や国際機関のプロジェクトであるよりも，大学や民間（非営利）のプロジェクトである。

③具体的な成果が期待でき，社会的なインパクトの大きいプロジェクトである。

国際助成への応募方法を簡単にまとめると次のとおりである。東南アジア諸国の人々が助成を希望する場合は，助成を希望するプロジェクトについて簡単な概要を書いて，当財団の国際助成部門あてに直接送っていただきたい（当財団の事務所は東京にあるのみで海外にはない)。

原則として以下には助成を行わない。基金の拠出，建設費，装置購入，博物館用収集品の購入，図書館用蔵書の購入，機関助成，すでに発足しているプログラムの年間経費，政治活動，宗教活動等。また，プロジェクト・リーダーおよび研究者への給料の助成は原則として行わない。申請は1年中受け付けるが，申請プロジェクトの具体性およびプロジェクトについての情報の多寡によって，審査に要する時間が異なる。通常，審査に要する期間は6か月から1年である。ほとんどの申請プロジェクトについて，審査前および審査中に財団のプログラム・スタッフが申請者を訪問し調査を行う。継続プロジェクトであっても毎年申請が必要である。助成決定は10月の理事会で行われる。

マレーシア東南アジア研究奨励助成は本年度より国際助成の枠内で新たに開始した。その目的は東南アジアの若手の研究者による東南アジア研究の促進を図ることを目的としている。

IV－1. 国際助成対象

(継 2)：継続 2 年目
(継 3)：継続 3 年目
(継 4)：継続 4 年目
(継 5)：継続 5 年目
(継 6)：継続 6 年目
(継 7)：継続 7 年目
(継 8)：継続 8 年目

助成対象一覧

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 (ドル)
1	パタニ：イスラム君主主権国家から少数民族コミュニティーへ ワン・カディル C.M.　ブルネイ・ダルサラム大学歴史学科　講師（ブルネイ）	10,200
2	音楽とクメール人の生活 K. ナロム　芸術大学　教員（カンボジア）	5,000
3	パーリ語クメール語辞書の再版と配布 O. ケム　仏教研究所　所長（カンボジア）	29,300
4 (継 3)	スンダ文化百科事典 アイップ R.　作家（インドネシア）	20,000
5 (継 3)	ジャワの村落盗賊：1850 年－1942 年 スハルトノ　ガジャマダ大学文学部歴史学科　講師（インドネシア）	1,800
6 (継 2)	フローレスの地方語（リオ語，シッカ語，ンガダ語）の機能 アロン M. ムベテ　ウダヤナ大学文学部　講師（インドネシア）	4,000
7 (継 2)	暴力，抵抗と反乱：1942 年から 1962 年のアチェ社会史研究 M. イサ S.　シャクアラ大学教育学部　上級講師（インドネシア）	3,400
8 (継 2)	西ジャワのバンテン遺跡発掘成果報告書および伊万里焼図録の編集・印刷 ハッサン M.A.　国立考古学研究所　所長（インドネシア）	40,000
9 (継 2)	バリの貝葉文献ロンタルのマイクロフィルム撮影 I.G.N.R. ミルシャ　バリ州立バリ文化記録センター　所長（インドネシア）	6,900
10 (継 3)	南スラウェシの村落社会の社会・文化変容 イドゥルス A.　ウジュンパンダン教育大学社会科学教育学部　講師（インドネシア）	8,700

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
11	ビマ文化の保存：ビマ年代記，テキストおよび口承伝統の翻字と翻訳 ヘリウス S.　バンドゥン教育大学社会教育学部歴史学科　講師（インドネシア）	7,800
12	インドネシアの老人のライフスタイルと生きがいに関する研究 クンチャラニングラット　インドネシア大学社会人類学　名誉教授（インドネシア）	18,000
13	バリのクレジット組織の発展：1859－1937年 I.B. シデメン　ウダヤナ大学文学部歴史学科　講師（インドネシア）	3,900
14	国際会議：東南アジアにおける東南アジア研究の推進 ヒルマン A.　インドネシア科学院社会文化研究センター　所長（インドネシア）	30,200
15 （継 2）	古代ラオスの碑文研究 トンサ S.　情報文化省博物館考古学局　局長（ラオス）	9,800
16 （継 2）	ラオス美術史の研究 ボウヘン B.　情報文化省博物館考古学局　局長補佐（ラオス）	5,500
17 （継 4）	カンボジア語－ラオ語辞書の編纂 マハ・カンパン V.　ラオス社会科学委員会　副委員長（ラオス）	18,000
18 （継 2）	ラオ慣習法貝葉文献の翻字 サムリット B.　情報文化省ヴァナシン雑誌　顧問（ラオス）	7,700
19 （継 5）	貝葉文献のインヴェントリー作成 ダラ K.　情報文化省ヴァナシン雑誌　所長（ラオス）	27,500
20	ラム・シタンドン歌謡の研究 トンカム O.　情報文化省文学局　局長（ラオス）	7,500
21	民話，格言，歌謡にみられるフモン族の伝統の研究 ネン X.　情報文化省ヴァナシン雑誌　副編集長（ラオス）	1,500
22	ラオスの教育史研究のセミナー カミー B.　ヴィエンチャン教育大学心理・教育学科　学科長（ラオス）	3,000

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
23 (継 3)	陸軍元帥ピブンソンクラームの生涯と時代――最も長く務めたタイの首相―― コプクワ S.P.　マレーシア国民大学歴史学科　準教授（マレーシア）	4,300
24 (継 2)	村落社会からプランテーション労働者へ――マレー半島東海岸のマレー人の地域レベルにおける文化変容と社会変化 ワン・ザワウィ I.　マラヤ大学経済経営学部　準教授（マレーシア）	3,700
25 (継 3)	マレーシアの 8 家族：民族とマレーシアの開発がもたらした社会・経済的結果 アジザー bt K.　マラヤ大学文化人類学科　教授（マレーシア）	8,100
26	クランタン，パタニ地方語の比較研究 ニック・サフィア K.　マラヤ大学人文社会科学部　教授（マレーシア）	4,000
27 (継 8)	古典ネワール語辞書編纂 K.P. マッラ　ネワール語辞書委員会　委員長（ネパール）	12,800
28 (継 6)	ネグロス・オクシデンタル州の社会・文化・経済史：1850 年―1985 年 V.L. ゴンザガ　セント・ラ・サル大学社会調査センター　所長（フィリピン）	3,100
29 (継 4)	スペイン植民地時代に関する未出版の古文書の調査，翻字，翻訳，出版 V.B. リクアナン　フィリピン歴史文化保存ナショナル・トラスト　副会長（フィリピン）	24,300
30 (継 2)	生態と環境の問題への社会・文化的アプローチ：イフガオ族のライス・テラスの事例 S.D. マヒウォ　フィリピン大学アジア研究所　助教授（フィリピン）	15,000
31 (継 3)	ミンダナオの山岳民族の環境保全に関する民族生態学的慣習 H.K. グロリア　アテネオ・デ・ダバオ大学社会科学部歴史学科　教授（フィリピン）	19,500
32 (継 2)	フィリピンの水にまつわる伝承：モスレムを中心として A.T. マンブアイ　ミンダナオ州立大学　講師（フィリピン）	3,000
33 (継 2)	ラ・ウニオン州の成立：1850―1990 年 A.O. メインバン　ニュー・エラ・カレッジ　学長（フィリピン）	11,800
34 (継 7)	フィリピン諸語辞書 E. コンスタンティーノ　フィリピン大学社会科学・哲学学部言語学科　教授（フィリピン）	3,900

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
35 （継 2）	モロランドの 20 世紀の民族史 F.V. マグダレーナ　ミンダナオ州立大学研究センター　所長（フィリピン）	8,400
36 （継 3）	フィリピン研究のための固有の資料 J.M. フランシスコ　アテネオ・デ・マニラ大学ロヨラ神学校　助教授（フィリピン）	20,300
37 （継 2）	フィリピン南部・スリガオの考古学，先史，民族史 L.E. バウゾン　フィリピン社会科学協議会理事会　委員長（フィリピン）	24,300
38 （継 2）	エリオ・コレクション：ミサミス・オリエンタルの地方史のための資料 F.R. デメトリオ　セイヴィヤー大学博物館　館長（フィリピン）	4,400
39	民主主義，安定，そして発展：1946 年から 1992 年のフィリピン議会の役割 R.S. ヴェラスコ　フィリピン大学マニラ校文理学部社会学科　助教授（フィリピン）	10,300
40	17 世紀と 18 世紀のフィリピンの社会史 L.C. デリー　フィリピン研究協議会　メンバー（フィリピン）	7,800
41	フィリピンの 1935 年から 1951 年の間の外交政策の展開：日本を中心として R.T. ホセ　フィリピン大学社会科学・哲学学部歴史学科　助教授（フィリピン）	2,100
42	輸出経済における外資会社の役割：1920 年から 1949 年のビルマの米とフィリピンの砂糖に関して M.S.I. ジョクノ　フィリピン大学社会科学・哲学学部歴史学科　準教授（フィリピン）	9,100
43	ヒガンテス島の民族誌：人間活動のシステムとエコロジカル・セル C.N. ザヤス　フィリピン大学ヴィサヤ校水産学部水産政策研究所　助教授（フィリピン）	18,400
44	マギンダナオ族の慣習と信仰 E.R. ディソマ　ミンダナオ州立大学社会・人文学部　準教授（フィリピン）	8,300
45 （継 3）	現代クメール語との関連における古代・中世クメール語辞書 ウライシー V.　シンラパコン大学考古学部　助教授（タイ）	12,400
46 （継 2）	チェンマイ－ランプン盆地の古代集落 サラスワディー O.　チェンマイ大学人文学部歴史学科　助教授（タイ）	13,500

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
47 （継 3）	タイ法制史：シャム王国と南部王国の法的システムの比較研究 ピティナイ C.　タマサート大学法学部　助教授（タイ）	18,200
48 （継 2）	東北タイのクメール遺跡の土地利用と文化的変遷 タダ S.　コーンケーン大学建築学部　講師（タイ）	17,600
49 （継 2）	アホム・ブランジ文献の研究 レイヌー W.　アユタヤ歴史研究センター　講師（タイ）	14,700
50 （継 5）	パンニャサ・ジャータカの北タイ版の研究 ピチット A.　チェンマイ大学人文学部タイ語学科　準教授（タイ）	13,100
51 （継 3）	タイにおけるホアビン人の研究 スリン P.　シンラパコン大学考古学部　準教授（タイ）	6,700
52	チャオ・プラヤ・デルタとメコン・デルタの比較研究：土地の状況と歴史的発展 ナロン T.　チュラロンコン大学理学部地理学科　準教授（タイ）	15,700
53	ビルマにおけるタイ（シャン）文字の歴史と発展 サイ・カム・モン　アユタヤ歴史研究センター　上級研究フェロー（タイ）	14,800
54	タイ・ルー族の織物の比較研究 ソンサク P.　チェンマイ大学芸術文化センター　助教授（タイ）	11,000
55 （継 2）	ハ・ナム・ニン沿岸地域における開墾と新しい村の設立の歴史 P.D. ドアン　ハノイ大学歴史学部　教授（ヴェトナム）	6,000
56 （継 2）	ヴェトナムの伝奇物語の研究 N.H. チ　ヴェトナム国立社会科学センター文学研究所　教授（ヴェトナム）	8,500
57 （継 2）	ヴェトナムのドンソン文化 H.V. タン　ヴェトナム国立社会科学センター考古学研究所　所長（ヴェトナム）	7,500
58 （継 2）	漢字で書かれたヴェトナム小説の総合コレクション T. ギア　ヴェトナム国立社会科学センターハンノム研究所　教授（ヴェトナム）	14,900

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
59	1975年以降のホーチミン市における開発に対する華人の社会的ポテンシャル	
(継2)	M．ドゥオン　ヴェトナム国立社会科学センター　所長（ヴェトナム）	6,800
60	オケオ文化	
(継2)	L.X．ディエム　ヴェトナム国立社会科学センターホーチミン市社会科学研究所　副所長（ヴェトナム）	18,600
61	ヴェトナム語慣用句辞典	
(継2)	H.V．ハン　ヴェトナム国立社会科学センター言語学研究所　所長（ヴェトナム）	7,800
62	北ヴェトナムにおける高齢者と社会保障体系	
(継2)	B.T．クオン　ヴェトナム国立社会科学センター社会科学研究所社会構造・社会政策部　部長（ヴェトナム）	11,800
63	ヴェトナム百科事典	
(継5)	P.N．クオン　国立ヴェトナム百科事典編纂センター　教授（ヴェトナム）	20,000
64	国際会議：現代生活における伝統的祭り	
(継2)	L.H．タン　ヴェトナム国立社会科学センター　副所長（ヴェトナム）	13,300
65	10世紀から19世紀半ばまでのヴェト族の移住の歴史	
(継2)	D．トゥ　ヴェトナム国立社会科学センター人口開発研究センター　所長代行（ヴェトナム）	9,000
66	現代チャム語－ヴェトナム語，ヴェトナム語－チャム語辞書	
(継2)	B.K．テ　ホーチミン市大学ヴェトナム・東南アジア研究センター　所長（ヴェトナム）	6,100
67	ヴェトナムの伝統演劇，ハッボイの辞典	
	N．ロック　ホーチミン市文学・言語学科　学科長（ヴェトナム）	11,200
68	ヴェトナムのジャーナリズムの歴史：1865年－1990年	
	H.M．ドゥック　ハノイ大学ジャーナリズム学部　学部長（ヴェトナム）	5,200
69	フエの伝統工芸	
	N.H．トン　フエ大学考古学・民族学科　学科長（ヴェトナム）	2,500
70	フエ美術館所蔵美術品の研究とカタログの出版	
	T.C．グエン　フエ歴史遺産管理局　所長（ヴェトナム）	8,500

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
71	クアンナム・ダナン省ホイアンのサーフィン甕棺文化の考古学発掘 N.D. ミン　ホイアン史跡管理事務所　副所長（ヴェトナム）	14,900
72	ミン・マン帝陵 M.K. ウン　トゥア・ティエン・フエ省文化情報スポーツ局　研究員（ヴェトナム）	5,700
73	ヴェトナムのフモン族 P.Q. ホアン　ヴェトナム国立社会科学センター民族学研究所　研究員（ヴェトナム）	8,700
74	カオダイ教 D.N. ヴァン　ヴェトナム国立社会科学センター宗教研究センター　所長（ヴェトナム）	5,000
75	大学レベルの東南アジア研究の教授カリキュラムの改善 P.D. ズオン　ヴェトナム国立社会科学センター東南アジア研究所　所長（ヴェトナム）	9,000
76	ヴェトナムの地簿コレクションの詳細な検討 N.D. ダウ　ホーチミン市社会科学委員会　メンバー（ヴェトナム）	22,300
77	ヴェトナムの編年学，永久暦，および累積暦 L.T. ラン　ヴェトナム国立科学センターシステム経営研究所　研究員（ヴェトナム）	6,800
	小　計（国際助成一般）　77 件	**864,400**
1 〜 5	マレーシア東南アジア研究奨励助成　別表（p.77）の５名	32,900
	国際助成合計　82 件	**897,300** ドル **(113,645,643** 円)

助成対象概要（国際助成）

1．パタニ：イスラム君主主権国家から少数民族コミュニティーへ　（ワン・カディル C. M.）

当研究は，現在ブルネイの大学に奉職するマレーシア人歴史学者による南タイのパタニ地方の歴史研究である。

パタニ地方は，16 世紀にはマレーの主権国家として繁栄を誇っていたが，19 世紀初頭にシャム王国に併合され融合政策を強いられてきた。当研究は，繁栄を享受していたイスラム宗主国家が衰退しタイ国に併合されてしまった背景と要因，そしてそのイスラム社会がタイに併合されていく過程，住民の対応を明らかにすることを目的に 16～20 世紀のパタニの歴史を研究する。

2．音楽とクメール人の生活

（K．ナロム）

当プロジェクトでは，クメール人の生活のさまざまな機会に行われる儀礼に伴う音楽を記録，採譜し，本にまとめることを目的とする。クメールの庶民生活のなかで，多くの伝統的な音楽が発達してきたが，今日その多くが消滅の危機に瀕している。

シェムリエップ，タケオ，バッタンバン，およびプノンペン周辺でフィールド調査を行い，これらの地域の村々を訪ねて，音楽をよく知る人にインタビューを行い，また実演をしてもらい録音，採譜といった記録作業を行う。最終的には報告書として出版する予定である。

3．パーリ語クメール語辞書の再版と配布

（O．ケム）

カンボジアの仏教研究所は，フランス領インドシナ時代から多くの仏教関係およびカンボジアの文化伝統に関する蔵書を有する著名な研究機関であったが，ポル・ポト時代（1975～79 年）に破壊された。ようやく今日，仏教研究所は復興され，散逸した図書の一部も回復された。

仏教研究所では，ポル・ポト時代に書物が失われてしまった全土の寺の復興のために，仏書再版の事業を行うことを計画している。当プロジェクトはその一環として，仏教研究所が以前に出版したパーリ語クメール語辞書の再版と全国の寺への配布を行う。

4．スンダ文化百科事典

（アイップ R.）

当プロジェクトは，スンダ文化百科事典の編纂を目的としている。スンダ語は，ジャワ語に次ぐ地方語で，約 2,500 万人が使用しており，その歴史は 5 世紀にさかのぼる。インドネシアの有力な地方文化であるが，これまで文化百科事典が編まれたことはない。

当百科事典は，言語，文学，舞台芸術，歴史，宗教，哲学，社会習慣，考古学，経済，政治に関する 3,500 の見出し項目を扱う。第 1 年度は見出しを選び，執筆者を決めた。第 2 年度は内容のガイドラインを作成し，800 の見出し項目を執筆中で，本年度も引き続き執筆を行う。

5．ジャワの村落盗賊：1850 年－1942 年

（スハルトノ）

オランダ植民地下のジャワでは，プランテーションの周辺に盗賊団がはびこっていた。彼らはプランテーションの官吏，伝統的首長，富裕民，華人などから略奪を繰り返した。

当研究は彼らの活動を単なる犯罪行為としてではなく，植民地支配に対する抵抗運動の一表現形態としてとらえている。第 1 年度は，文献調査をジャカルタで行い，第 2 年度は，文献調査をオランダで，フィールド調査をインドネシアで行った。本年度は，これまでの成果を基に論文を執筆する。

6．フローレスの地方語（リオ語，シッカ語，ンガダ語）の機能　（アロン M．ムベテ）

ヌサ・トゥンガラ・ティムールのフローレス島には少数派の地方語があり，固有文化の要を成している。しかし，国語としてのインドネシア語の普及により使用機会が減少している。当研究は，これらの言語が現在どのように使われているのかを，1 年に 1 言語ずつ調査する。

第 1 年度はリオ語を取り上げ，農業礼儀や宗教儀式での使われ方，小中高校の教育現場や家庭での役割，民話等の収集を通して，リオ語の機能を調査した。本年度はシッカ語，第 3 年度目はンガダ語について同様の調査を行う予定である。

7．暴力，抵抗と反乱：1942年から1962年のアチェ社会史研究　（M．イサ S.）

1942～62年まで，インドネシアの西端アチェでは，地域内の権力闘争や外部勢力が原因となって，暴力，反乱が次々と起こった。複雑な社会状況の分析を必要とするため，これまでの歴史研究は不十分なものであった。

当研究は，地元出身の研究者が史実の経過を再構築し，それらの真の背景やねらいを分析し，この時期のもつ意味をアチェ史およびインドネシア国史のなかで再定義しようというものである。

第1年度は文献収集，インタビューを行い，本年度は収集した資料を分析し，報告書を執筆する予定である。

8．西ジャワのバンテン遺跡発掘成果報告書および伊万里焼図録の編集・印刷　（ハッサン M.A.）

バンテンは，16世紀中葉から19世紀初頭にかけてインドネシアのジャワ島西部を中心に栄えたイスラム王国であり，その首都バンテン・ラーマはマラッカ王国滅亡後の東西貿易の中心地であった。その発掘が1976年から国立考古学研究所で行われ，都市の構造，生産活動，貿易の実状が明らかになってきた。

当プロジェクトでは，第1年度は1977～90年の発掘に基づいた研究論文，出版物の収集および発掘調査の報告書を出版し，本年度は出土した伊万里焼の図録をインドネシア語，日本語併記で出版する予定である。

9．バリの貝葉文献ロンタルのマイクロフィルム撮影　（I.G.N.R. ミルシャ）

バリ島やロンボク島には貴重な貝葉文献ロンタルが，個人や地方行政府によって所有されていることが，当研究者が1989年度に行った調査（1,604題目が約900か所に分散）で明らかになった。

これらのロンタルが近い将来所在不明になることを防ぐためにはマイクロフィルムに収めることが望まれる。当プロジェクトは，マイクロフィルム化に向けての準備を行い，本年度は，センター所蔵のロンタルを選定し，カタログを作成し，ジャカルタの科学記録情報センターでマイクロフィルムの撮影を行う。

10．南スラウェシの村落社会の社会・文化変容　（イドゥルス A.）

当研究では，南スラウェシの村落社会（灌漑米作農村，高地畑作農村，漁村）に過去20年間に導入された新しい技術が，社会構造（土地所有，労働関係，社会組織，職業と人口の移動）や文化（識字率，ライフスタイル，消費パターン，政治参加，儀礼），社会問題（犯罪，紛争，貧困）に，どのような変化をもたらしたかを調査する。

調査には統計的データの収集，フィールド調査，村人のインタビュー等の方法を用いる。第1年度には灌漑米作農村を，第2年度は高地畑作農村を，本年度は漁村を対象とする。

11．ビマ文化の保存：ビマ年代記，テキストおよび口承伝統の翻字と翻訳　（ヘリウス S.）

東インドネシアに位置するスンバワ島には，現在のインドネシア共和国建国以前，スンバワ，ドンプ，ビマの3つのイスラム王国が存在していた。そのうちドンプとビマは共通の民族や言語をもち，ビマ文化を形成した。この地域は17世紀初頭にイスラムが到来してから，ゴワ（マカサール）との関係が緊密になり，ボ（Bo）と呼ばれる年代記が編纂された。

当プロジェクトはこの旧宮廷を中心に書かれたボを収集・翻字し，注釈をつける一方，一般民衆の民俗，詩，慣習，宗教等を扱った口承伝統も収集して翻訳・出版する。

12．インドネシアの老人のライフスタイルと生きがいに関する研究　（クンチャラニングラット）

インドネシア人の平均寿命は年々伸びてきており，10年後には全人口に占める老人の割合が高くなることが推測される。また，インドネシアは多様な民族によって構成されており，現在は農村社会から工業社会への移行過程のなかにある。しかも地域によって工業化の度合は異なり，老人のおかれている状況はさまざまである。

当研究は，2年間で都市ジャカルタとジョクジャカルタの農村を各2か所ずつ選び，そこに住む老人の家族構成，日常生活，将来の生活設計，生きがい等に焦点をあてて研究することを目的としている。

13. バリのクレジット組織の発展：1859－1937年

(I.B. シデメン)

バリ社会では，昔から個人または組織から借金をする習慣がある。sekeha などのバリの伝統的組織は，伝統的な方法で決められた金利を基に資金を貸すクレジット銀行としての性質さえ有している。1900年以降オランダ植民地政府が銀行を設立して以来，バリのクレジット制度問題はより複雑化し，村落での貨幣流通の高まりにつれこの制度は発展していった。

当研究は，バリ人の借金の習慣が過去の伝統および植民地政策に根ざしていると考え，1859～1937年のバリにおけるクレジット組織の発展について歴史研究を行う。

14. 国際会議：東南アジアにおける東南アジア研究の推進

(ヒルマン A.)

近年東南アジア諸国間相互の関心が高まってはきているが，欧米等の東南アジア研究と比べ，まだ十分とはいえない。特にインドネシアには，東南アジア研究を発展させるための制度上の基礎がない。

本国際会議「東南アジアにおける東南アジア研究の促進」は，インドネシアにおける東南アジア研究の発展を目的として開催される。会議は，①東南アジアの大学における東南アジア研究の教授法，②東南アジア研究の最近の傾向，③東南アジア研究の制度的ネットワーク，をサブテーマに1993年秋にジャカルタで開催される。

15. 古代ラオスの碑文研究

(トンサ S.)

ラオス最古の碑文は5世紀にさかのぼる。14～19世紀には石や銅に刻まれた大量の碑文がつくられ，全国に分布している。これらは，ラオスの歴史研究に重要な意味をもつが，いままで組織的に研究されたことがない。

当研究では，これまでに収集された碑文に関するラオス内外の資料を収集・目録化し，また未収集の拓本を作成，また写真撮影を行う。特に重要な文献は翻字と翻訳を行う。第1年度は国内でのフィールド調査とフランスでの文献調査を行った。本年度は国内での補足調査と資料の分析，翻字，翻訳等を行い，成果を出版する。

16. ラオス美術史の研究

(ボウヘン B.)

当研究者は長年ラオス各地にある美術館を見て回り，その特徴，製作年代などを丹念に調べ，カードに記入してデータを蓄積してきた。第1年度では，ランサーン王国以前の美術から三王国時代の美術を網羅したラオス美術史の執筆を行い，本として出版した。

第2年度では，前作以降の時代すなわちフランス植民地時代から共産政権成立までの1893～1975年のラオス美術の変遷を対象として研究を行い，出版する計画である。このために歴史文献の収集，外国人研究者の成果の吸収，フィールド調査，写真撮影などを行う。

17. カンボジア語－ラオ語辞書の編纂

(マハ・カンパン V.)

ラオスとカンボジアは異なったことばを話しているが，地理的には隣国であり，両国とも仏教徒が大半を占める。現在，両国間に友好条約が結ばれており，双方の多くの学生が相手国に留学し，また学者間の交流も進展してきている。

当プロジェクトは，これらの交流を促進し両国の相互理解を深めることを目的として，これまでに編纂されたことのないカンボジア語－ラオ語辞典を3年がかりで編纂しようというものである。本年度では出版原稿を完成し，辞書を出版する。

18. ラオ慣習法貝葉文献の翻字

(サムリット B.)

当プロジェクトは，後記「貝葉文献のインヴェントリー作成」のプロジェクトによって発見されたラオ族の古い慣習法の文献から，特に重要と思われる3種類の慣習法文献を選定し，異本などの調査を行って翻字の定本を定め，現在ラオ文字に翻字して出版する。

3年間のプロジェクトで，各年度1点の慣習法を対象とする。第1年度は，Soi Sai Kham という慣習法について，研究と翻字を行った。本年度は，Pha Thammasad Luang という慣習法について，研究と翻字を行う予定である。

19. 貝葉文献のインヴェントリー作成

(ダラ K.)

当プロジェクトは，ラオスの寺院などに散在している貝葉文献の所在を明らかにし，僧侶などにそれらの文献を読むトレーニングを施し，コンピュータにデータを入力して貝葉文献のインヴェントリーづくりを行う。

第1，第2，第3年度には，ヴィエンチャン州とルアンプラバン州を対象に貝葉文献の調査とインヴェントリーづくりを行った。昨年度から3年間をかけて，引き続き南部の3州を対象に同様の作業を進めることとなった。昨年度に引き続き，本年度もカムモウアン，サヴァンナケート，チャンパサックの3州で調査を行う。

20. ラム・シタンドン歌謡の研究

(トンカム O.)

ラオスおよび東北タイで最も有名な音楽はラムと呼ばれ，モーラムという1～2人の歌い手と，ケーンという楽器の伴奏によって歌われる。典型的なラムは，男女のモーラムの掛け合い歌であり，中国南部から東南アジア全域にみられる歌謡の1つの典型的なパターンである。

当プロジェクトの目的は，ラム・シタンドン歌謡とラオスの文化一般との関係，およびその歌詞にみられるラオ人の価値観を明らかにすることである。このために，フィールド調査，歌い手のインタビューなどでデータを収集し，研究報告書をまとめる。

21. 民話，格言，歌謡にみられるフモン族の伝統の研究

(ネン X.)

ラオスの高地に住むフモン（メオ）族は，中国南部，ヴェトナム，タイ等に広く住む東南アジアの代表的な山地少数民族の1つである。かつては中国雲南省に王国をつくっていたといわれ，独自の文化伝統を保持している。中国やタイのフモン族の民族学的研究は，従来からかなり成されてきたが，ヴェトナムやラオスのフモン族については，研究を行うことがなかなか困難であった。

当研究では，①ラオスのフモン族の歴史と暮らし，②フモン族の文学と伝統，③物語り，慣用句や格言などをテーマに研究し，報告書にまとめる予定である。

22. ラオスの教育史研究のセミナー

(カミー B.)

現在ラオスでは，全国の高校教師の養成を目的とした教育大学が唯一の大学である。教育大学は1964年に設立され，当時は仏語・英語の文献を参考に講義が行われてきたが，1975年以降ラオ語による教育に移行し，外国語の分かる教官もごく少数となり，講義に支障をきたすようになっている。

当セミナーでは，すでに退官している旧世代の教育関係者を招いて，ラオスの教育史についてのペーパーを分担して書いてもらい，これを討議のうえまとめて本にし，教育大学での教育史の授業の教科書とするねらいである。

23. 陸軍元帥ピブンソンクラームの生涯と時代——最も長く務めたタイの首相　(コプクワ S.P.)

当研究は，タイ国歴代首相のなかでも最も長くその地位（1938～44年と1948～57年の2回）にあったピブンソンクラーム元帥について，タイ近代史のなかで学問的かつ中立的に研究しようとするものである。

第1年度は，タイ，イギリス，アメリカでの文献調査とインタビューを行い，また可能なかぎり戦前・戦中期の日本側の資料も利用した。第2年度は，収集した資料を基に論文を執筆し，完成させ，本年度オックス・フォード大学出版会から出版する予定である。

24. 村落社会からプランテーション労働者へ

(ワン・ザワウィ I.)

当研究は，1972～75年に行われたマレー半島東海岸の農村部の近代化に伴う文化変容と社会変化についての研究を再調査し，出版するものである。

当研究は，伝統的マレー農村からプランテーション農園へと変化した地域の農園労働者の背景（出身村，以前の職業，村を出た理由），社会・文化的組織および政治組織の発達，サブカルチャー，労働状況と労働者の考え方の変化などの諸点について社会学的方法および文化人類学的方法を併用して調査し，本年度はそれを出版する。

25. マレーシアの8家族：民族とマレーシアの開発がもたらした社会・経済的結果　(アジザー bt K.)

マレーシアは複合民族国家(マレー系,中国系,インド系,先住民)である。当研究は,おのおのの民族社会の個人レベルに開発が与えた影響に焦点をあて，マレーシア社会の全体像を明らかにする。そのために都市部と農村部に住む4民族，合計で8家族の世代史を再構成する。

研究には，4民族出身の研究者と日本人研究者が共同であたり，文化人類学的調査を行う。第1年度の予備調査に続き，第2年度は本格的フィールド調査を行った。

本年度は調査結果を1冊の本にまとめて出版する予定である。

26. クランタン，パタニ地方語の比較研究　(ニック・サフィア K.)

マレーシアのクランタン州は，マレー半島がイギリスの植民地となる以前はシャム王国の一部で，南タイのパタニ地域と言語を共有していた。今日でも両地域は基本的には共通の民族，宗教，言語を有しているが，教育，国語，マスメディア，国家建設の文化領域等における相違は，両地域のその後の言語発達に影響を及ぼした。

当研究では，クランタンとパタニで話されている地方語の発展を言語学的に比較研究し，両言語の方言辞書の作成を目指す。第1年度は,文献調査とフィールド調査を行い，第2年度には方言辞書を完成させる予定である。

27. 古典ネワール語辞書編纂　(K.P. マッラ)

ネワール語はチベット・ビルマ語族のなかでも,文字をもち，しかも古い時代の文書が残っている数少ない言語の1つである。本言語を理解することはヒマラヤ地方の歴史や文化，仏典等を研究するうえで非常に重要である。

当プロジェクトは，これまでに古典ネワール語で書かれたあらゆる文献から，辞書に収録する語彙の抽出，翻字，翻訳の作業を行い，データをコンピュータに入れた。しかし辞書の完成には，語彙の語形変化のチェック，意味の再検討，英訳など編集作業が必要となる。本年度は編集作業を完了させ辞書の出版を行う。

28. ネグロス・オクシデンタル州の社会・文化・経済史：1850年－1985年　(V.L. ゴンザガ)

ネグロス・オクシデンタル州では，サトウキビの栽培がアシエンダ（大農園）で行われており，それを所有するネグロス人は大きな権力を握っていた。しかし，世界市場における砂糖価格の下落により砂糖産業は壊滅し，現在アシエンダからは多数の失業者が出，社会問題となっている。当研究は，現在の社会経済的危機の歴史的背景を明らかにし，ネグロスの社会史，文化史を補うことも目的としている。アメリカとフィリピンで行った古文書調査と民族誌調査の成果も統括して，本にまとめ出版する。

29. スペイン植民地時代に関する未出版の古文書の調査，翻字，翻訳，出版　(V.B. リクアナン)

当プロジェクトの目的は，セビリアの古文書館に保存されている未出版の古文書の調査，翻字，英訳，出版である。対象となるのはフィリピンがマゼランに発見されてから植民地時代に終わりを告げるまでの期間の古文書で,4年間で200年分の古文書の調査を行い,100年分の古文書の英訳を出版する。その後は本の売り上げを回転資金とし，助成金なしで事業を遂行する。これらの本が出版されれば，スペインに文献調査に行くことなく歴史研究ができるようになる。

30. 生態と環境の問題への社会・文化的アプローチ：イフガオ族のライス・テラスの事例　(S.D. マヒウォ)

イフガオ族のライス・テラスは，人間の物質的および非物質的側面を混合した希有な生きている文化遺産である。人間とその環境の社会・文化的側面の相互関係を理解するには，理性的・社会的・精神的存在である人間とそれを取り囲む自然の要素との相互作用の総合的ダイナミックスを研究する必要がある。

当プロジェクトでは，イフガオ族のライス・テラスを研究することにより，文化と文明は物理的環境・生態と深く関連しており，環境の問題は物理的な問題だけでなく，精神的・文化的な問題であることを明確にする。

31. ミンダナオの山岳民族の環境保全に関する民族生態学的慣習　(H.K. グロリア)

フィリピンでは木材切出しによる森林伐採が問題となっているが，同時に山岳少数民族による焼畑農業も環境破壊の要因であると信じられている。しかし人類学者は，その土地土着の民族で焼畑を行う人々は，その土地の条件に適応した，環境を破壊しない焼畑の技術を作り上げてきたと主張している。

当研究では，ミンダナオで焼畑を行うさまざまなグループの土着の環境保護の方法を明らかにすることを目的とする。

32. フィリピンの水にまつわる伝承：モスレムを中心として　(A.T. マンブアイ)

フィリピン南部には，モスレム・フィリピン人の13の民族言語学的グループがある。彼らは川岸に住むか，海岸や湖の近くで生活している。そのため彼らは水に関する信仰や儀礼を有している。これらの水にまつわる伝承（ウォーターロア）は，モスレム・グループの生活に大きな影響を与えている。

しかしこの水にまつわる伝承は，科学，技術のような近代化とイスラム原理主義の両方から挑戦を受けている。当プロジェクトは変わりつつある状況のなかで，水にまつわる伝承を記録し保存することを目的としている。

33. ラ・ウニオン州の成立：1850－1990年　(A.O. メインバン)

当プロジェクトは，ルソン島北西部にあるラ・ウニオン州が成立された1850～1990年までの歴史を執筆することである。ラ・ウニオン州は「イロコス地域への入口」といわれる州である。ラ・ウニオン州の成立には，アジアにおけるスペイン支配の最後の50年間の植民地秩序のダイナミックスが反映されているとともに，州の主な住民となった3民族グループ（イロカノ族，パンガシナン族，イゴロット族）の反応も反映されている。

同時に，当プロジェクトではスペイン，アメリカ，日本の植民政策の比較も行う。

34. フィリピン諸語辞書　(E. コンスタンティーノ)

当研究者は過去20年間，さまざまなフィリピン言語の辞書を編纂してきた。当プロジェクトでは，研究者のこれまでの蓄積を集大成し，105の言語を対象とするフィリピン諸語辞書を編纂しようとするものである。辞書の見出し語は約2万語で，各見出し語は英語でつくられ，その後にフィリピン諸語での同義語を示す。データ処理にはコンピュータを使い，各年度に約35言語を対象に作業を行っている。本年度は各言語の辞書を1つに合体させ，次年度に印刷を行うための，版下作成を行う。

35. モロランドの20世紀の民族史　(F.V. マグダレーナ)

モロランドとは19世紀の終わりごろに，ミンダナオ島の3分の2の地域をカバーする，非キリスト教徒が居住していた地域を指していう。スペイン支配，アメリカ支配，日本支配を受ける前に，モロランドには2つのグループ，すなわちモロ（イスラム化された民族）と山岳地に住む異教徒が住んでいた。第3のグループであるキリスト教徒は1990年代初めに，移住してきた。

モロランドの民族史として20世紀の社会を再構築しようというのが，当プロジェクトの目的である。歴史学と社会学のアプローチを合わせて民族史を書く。

36. フィリピン研究のための固有の資料　(J.M. フランシスコ)

フィリピンの言語で書かれた文書は，古くは16世紀のものが存在するといわれているが，それらの文書は各所に散らばって保存されている。最近これらのフィリピンの言語で書かれた文書を使って，フィリピンの植民地の経験を明らかにし，フィリピン文化の発展の研究を，より細かいニュアンスをもたせて行うということがなされている。しかしこれらのフィリピン固有の文書は，フィリピン人研究者の手に入りにくいのが現状である。そこで当研究では，これらの文書をマイクロフィルムで収集し，活字にし，部分的に出版しようとするものである。

37. フィリピン南部・スリガオの考古学，先史，民族史
(L.E. バウゾン)

スリガオ・デル・ノルテ州は，フィリピン，ミンダナオの北東部の端に位置する。この州は考古学の遺物が多く発見されるところである。遺物は古くは紀元前5世紀のものから，中国や東南アジア大陸部との交易が行われた10～16世紀の間のものが発掘されている。1990年にスリガオ・デル・ノルテ州で大量の考古学的遺物が発見され，国立博物館の考古学部のスタッフの予備調査により，その重要性が判明した。当プロジェクトでは，発掘を本格的に行うほか，現地で発見される文献を基にして歴史研究も行う。

38. エリオ・コレクション：ミサミス・オリエンタルの地方史のための資料 (F.R. デメトリオ)

1970年に，95のフォルダーに納められたエリオ・コレクションがセイヴィヤー大学の博物館に寄附された。このコレクションは，ドン・ヴィンセンティ・エリオ（1863～1938年）が収集した雑誌や定期刊行物の切り抜きや，注意深く注のついたノートからなっている。その内容はホセ・リサールに関する資料，地方史に関する資料，文学と文化に関する資料である。

当プロジェクトではスペイン語とセブアノ語で書かれている資料を英語に翻訳し，オリジナルとともに出版することを目的としている。

39. 民主主義，安定，そして発展：1946年から1992年のフィリピン議会の役割 (R.S. ヴェラスコ)

当プロジェクトは民主主義，社会の安定，経済発展を促進するうえでフィリピン議会が果たす役割の歴史的および機能的記録を行い，分析することを目的としている。戒厳令以前（1946～72年），戒厳令時代（1978～86年），EDSA革命以降（1986～92年）の3つの時代における，議会の主力派閥，構造，立法のプロセスと成果について解明する。

当研究は，今日の政治現象に固有の政治文化が与えている影響を明らかにするとともに，アジアの隣国である日本とマレーシアとの比較も試みる。

40. 17世紀と18世紀のフィリピンの社会史
(L.C. デリー)

1600～1800年の間にスペインのフィリピン支配が固められた。この間にスペインの植民地政府がフィリピンで何を行い，それに対して土着民がどう反応したかが，その後のフィリピン社会と文化の形成に大きな影響を与えている。当研究者は，スペイン支配の前までは怠惰ではなかったフィリピン人が，スペイン支配下で怠惰になったといわれるのはどうしてかという疑問から出発している。

この300年間に起こったことを研究すれば，フィリピン現代社会が直面している問題の起源やフィリピン社会の発展のパターンと変化が明確になる。

41. フィリピンの1935年から1951年の間の外交政策の展開：日本を中心として (R.T. ホセ)

当プロジェクトは1935～51年，すなわち，コモンウェルス政府の樹立から第2次世界大戦を経て，サンフランシスコ条約が締結されるまでの間のフィリピン政府の外交政策について研究する。特に対日本についての外交政策に焦点を絞る。

現在のフィリピン政府の外交政策について理解するためには，前述の時代の外交政策についてのより深い理解が必要である。

当研究者は日本の大学で研究した経験があり，人を得たプロジェクトである。

42. 輸出経済における外資会社の役割：1920年から1949年のビルマの米とフィリピンの砂糖に関して (M.S.I. ジョクノ)

ビルマ，フィリピンの植民地時代の農業に対する研究はあっても，植民地の輸出経済の発展に外資会社が果たした役割については，あまり研究されていない。当研究者は，ビルマの米とフィリピンの砂糖に関連してそのような会社の役割について比較研究するものである。

当研究者は，博士論文で植民地下のビルマの米とチーク材についての研究を行っており，今回の研究はその延長線上にある。個人研究ではあるが，東南アジアを1つの地域としてみる視野から行われる新しいタイプの研究である。

43. ヒガンテス島の民族誌：人間活動のシステムとエコロジカル・セル　(C.N. ザヤス)

フィリピンは島国でありながら，生産とコミュニケーションの場としての海岸コミュニティについての研究はあまりなされていない。当研究は，人類学と環境問題の専門家が行うインターディシプリナリーな研究で，人間の生活の場である海岸コミュニティの全体像を，長期間の観察を基にしてとらえようとするものである。当研究者は日本の漁村の研究で博士号を取得しており，その経験をフィリピンで生かそうという試みである。フィリピンの人類学は，山岳部に住む人々を対象とする偏る傾向があるなかで，新しい視点からのアプローチである。

44. マギンダナオ族の慣習と信仰　(E.R. ディソマ)

当プロジェクトは，当研究者が当財団の助成を受けて行った「マラナオ族の慣習と信仰」と同じ方法論で，もう1つのモスレム・グループであるマギンダナオ族を対象として同様の研究を行おうとするものである。マラナオ族についての研究成果は本として出版され，モスレム自身によるモスレムについての研究として高い評価を得ている。

モスレム自身がその慣習と信仰を社会的，経済的背景を考えながら分析する当研究は成果が期待され，地方の研究者への刺激になるものと考えられる。

45. 現代クメール語との関連における古代・中世クメール語辞書　(ウライシー V.)

当研究の目的は，6～19世紀のクメール碑文にみられる古代および中世のクメール語の辞書を編纂することである。本辞書には2万語の語彙項目を収める。語彙項目は，東北タイで発見された碑文とフランス人の研究者がいままでに出版している資料からとる。表記は，クメール文字，ローマ字で翻字したもの，音声記号によって行い，タイ語とフランス語か英語で意味を説明する。辞書の冒頭には古代，中世，現代クメール語の音韻学的システムと語形論的システムについて研究成果を含める。

46. チェンマイーランプン盆地の古代集落　(サラスワディー O.)

チェンマイーランプン盆地は8世紀にハリプンチャイ（ランプン）が最初の町として興り，その遺跡は現在も城壁や堀として残っている。ハリプンチャイは13世紀に滅ぼされ，チェンマイを首都とするランナ王国が建設された。

当プロジェクトは，チェンマイーランプン盆地の18の古代のコミュニティの歴史を対象として，インターディシプリナリーなアプローチで研究する。方法論的には，貝葉文献，サムッド・コイ（本），碑文，航空写真，陶器等を利用して行われる。

47. タイ法制史：シャム王国と南部王国の法的システムの比較研究　(ピティナイ C.)

タイの法制の歴史を考えるとき，4つの古代の文化の中心地が挙げられる。①ランナ王国：北タイの9県で，タイーユアン語の文字で貝葉に書かれた資料がみつかる。②イサン王国：東北タイの14県で，タイーノイ語の文字で貝葉に書かれた資料がみつかる。③タクシン王国：南タイの14県で，タイ語とクメール語の文字で白ブット（本）か黒ブット（本）に書かれた資料がみつかる。④シャム王国：タイ中央部の35県で，タイ語およびクメール語の文字でサムッド・コイ（本）に書かれた資料がみつかる。当研究は，これらの法制の比較を行おうとするものである。

48. 東北タイのクメール遺跡の土地利用と文化的変遷　(タダ S.)

8～13世紀までのタイの東北部はクメール王国の影響下にあり，東北タイにはいまもクメール遺跡が散在している。当研究では，これらのクメール遺跡の歴史を明らかにしようとするものである。具体的には，それらの遺跡の起源，発展，放棄，再生，都市の変化の傾向について理解し，遺跡のタイプと体系を明らかにし，クメール文化の保存と振興を図り，東北タイにおけるクメールの歴史と文化的背景の理解を促進する。当研究者はタイ政府の芸術局で遺跡の保存の担当をしていた人で，現在はコンケン大学で研究を行っており，適材を得ている。

49. アホム・ブランジ文献の研究

（レイヌー W.）

インド・アッサム州に住むアホム族は，13世紀にタイから移住したタイ族であり，19世紀にイギリス支配を受けるまでの民族の歴史をタイ語で記録している。このアホム・ブランジの文献は，アホムの歴代の王の年代記で1228～1826年にわたって書かれたもので，タイ族の文化と社会の初期の形に関する情報がアホム文字で記録されている。

当プロジェクトでは，最も完全なアホム・ブランジ文献を現在タイ国で使われているタイ文字に翻字し，内容を読み，現代タイ語に翻訳することを目的としている。

50. パンニャサ・ジャータカの北タイ版の研究

（ピチット A.）

ジャータカ物語は，釈迦が悟りを開くまでに輪廻転生を重ねた前世を描いた仏教説話である。仏教が広まるにつれて，各地方の風俗・習慣を取り入れたその地方独特の地方版が生まれた。15～16世紀に北タイの僧が書いたとされるパンニャサ・ジャータカはこのような地方版の1つで，北タイ王国のみでなく周辺の諸王国などにも受け入れられ広く東南アジアの仏教国に定着していった。

当研究は，発祥の地である北タイ版の定本づくりである。これまで多数の貝葉文献異本の翻字，研究と定本の選定を行った。本年度は出版を行う予定である。

51. タイにおけるホアビン人の研究

（スリン P.）

タイ西部にみられる石炭岩の洞窟を調査すると，これらの洞窟は狩猟と採集によって生活していたホアビン人の生活の場であったことが明らかになり，中石器時代の人々と分類される。それに対して，低地で農耕を行っていた人々は道具をつくり，新石器時代の人々であると考えられる。当研究では，タイの後期ホアビン人は狩猟，採集の生活から農耕の生活へ移行したかどうか，もしそうだとしたら，ホアビン文化から新石器時代へ移行した理由を，人口増加，食糧不足，生態系の変化，技術革新，等の要因から明らかにする。

52. チャオ・プラヤ・デルタとメコン・デルタの比較研究：土地の状況と歴史的発展　（ナロン T.）

第1回トヨタ財団国際助成研究報告会において，東南アジアの研究者による国際共同研究を行うことの重要性が認識された。当プロジェクトは，この報告会に端を発するネットワークから生まれたものである。

東南アジア大陸部の3つのデルタには共通点があるが，現在少なくともそのなかの2つ，すなわちチャオ・プラヤとメコンについては比較研究が可能である。これらのデルタの形成における自然的要因と人的要因を調査するため，研究はインターディシプリナリーなものになる。第1年度はフィージビリティ・スタディを行う。

53. ビルマにおけるタイ（シャン）文字の歴史と発展

（サイ・カム・モン）

当プロジェクトは，ビルマにおけるタイ（シャン）文字の起源と発展を研究し，新しいシャン文字を類似の文字から選び出すことを目的とする。ビルマのタイ系の民族，シャン族の各グループは山岳地帯に孤立して生きてきたため，共通の文字が発展しなかった。シャン族の学校でもシャン文字は教育に使われていない。

シャン文字は，北タイのランナー・タイ文字と中国南部の雲南に住むタイ族のユーナン文字に近いため，それらの文字から新しいシャン文字を選び出す。またシャン族の文化史研究促進のための新しいアプローチを模索する。

54. タイ・ルー族の織物の比較研究

（ソンサク P.）

当プロジェクトは北タイ，ラオス，ビルマに住んでいるタイ・ルー族の織物を研究しようとするものである。この織物がタイ・ルー社会でどのような役割を果たしているかについて記録し，すべてが失われてしまう前に織物の識別をすることを目的としている。現在，大量生産された織物が手織物にとって代わりつつあり，またアンティークの織物はどんどん外国へ売られてしまっている。当プロジェクトは，この失われつつある芸術を後世に残し，そのデザイン，パターン，技術を村や美術館で保存することを促進する一助となることをねらいとしている。

55. ハ・ナム・ニン沿岸地域における開墾と新しい村の設立の歴史　(P.D. ドアン)

今日ハ・ナム・ニンと呼ぶハナム，ナムディン，ニンビンの地域は，歴史上頻繁に開墾と新しい村の設立が行われた沿岸地域で，紅河デルタ開墾の典型的地域である。

当研究では，① 17 世紀以前の紅河デルタの開墾状況，② 17～19 世紀にかけてのハ・ナム・ニン地域での移住と新しい村の設立の状況，および開墾に関連した堤防，遊水池の建設，③新開地でのコミュニティ形成の過程，④開墾における王朝の役割などを明らかにする。第 1 年度ではフィールド調査，文献調査などを行った。本年度は補足的フィールド調査を行い，研究報告書をまとめる。

56. ヴェトナムの伝奇物語の研究　(N.H. チ)

中国の唐，宋，明代にかけ，1 つの重要な文学ジャンルであった伝奇物語は，日本，朝鮮，ヴェトナムという周辺の漢字文化圏に大きな影響を与えた。日本でも雨月物語などの古典として，今日でも広く親しまれている。

当研究は，ヴェトナムに伝わった伝奇物語を収集し，定本にまとめる作業，中国の伝奇物語との比較，および漢字で書かれている物語を現代ヴェトナム語に翻訳する。第 1 年度は，中国，旧ソビエトなどから資料を購入し，翻訳作業も行った。本年度はすべての作業を完成するとともに，研究論文を執筆して，翻訳とともに出版する。

57. ヴェトナムのドンソン文化　(H.V. タン)

当研究は，ドンソン銅鼓で名高いドンソン文化に関する総合的な考古学研究である。これまでヴェトナム人考古学者の手で行われてきた研究の総括を目的とする。

このため，新たな発掘調査，すでに発掘した遺物の整理，分析，地図・写真・スケッチの作成などのほか，学説上の問題であるドンソン文化の起源，年代決定，地方変異，サーフィン文化とドンナイ文化という周辺文化との関係等に一定の貢献を目指す。第 1 年度はさまざまな情報の収集活動を行ったが，本年度は各分担者が研究論文の執筆を行い，討議，評価のうえ出版する予定である。

58. 漢字で書かれたヴェトナム小説の総合コレクション　(T. ギア)

ヴェトナムでも紀元前 2 世紀から今世紀初頭まで漢字が広く使われ，また，漢字の部首を組み合わせ新たにつくられた文字も使われた。漢字・ノム文字で書かれ今日まで残っている文書のうち文学は，約半分を占める。

しかし，ヴェトナムでは，今日，漢字・ノム文字の読める人はほとんどいない。そこで，当プロジェクトは現在までに分かっている漢字で書かれた文学のすべてを，現代ヴェトナム語に翻訳し出版することを目的とする。第 1 年度は，翻訳作業の大部分を完了させ，本年度は，すべての翻訳を完成，解説を執筆したうえで出版を行う。

59. 1975年以降のホーチミン市における開発に対する華人の社会的ポテンシャル　(M. ドゥオン)

華人系ヴェトナム人は，1989 年の国勢調査によると約 96 万人であるが，そのうち約 43 万人がホーチミン市に，32 万人がメコンデルタの諸省に住んでいる。

当研究では，①ホーチミン市の現在の華人コミュニティ形成の歴史，②ヴェトナム再統一後の彼らの社会変化と民族的動態，③ヴェトナム国籍のもつ意味などについて，インタビュー，企業・協会の調査，文献調査などにより人口学，経済学，社会学などの学際的研究を行う。本年度は，第 1 年度に行った個別テーマの予備的調査研究を完了させ，研究報告書を作成して出版する。

60. オケオ文化　(L.X. ディエム)

オケオ文化と呼ばれる古代文明は，6～7 世紀頃に出現しメコンデルタ下流域を含む広い地域を範囲として，インド・中国・ペルシャなどと交易があった。

オケオ文化は，中国の文書に記されている扶南王朝の 1 つの遺跡かともいわれるが，議論の多い古代文明で，不明の点が多い。当研究は，アンギアン省での発掘調査，既存の遺物の調査などから，オケオ文化に関する最新の考古学研究の成果をまとめることを目指す。第 1 年度は，3 か所の発掘を行ったほか，さまざまな情報収集を行った。本年度は，これらをまとめて本として出版する。

61. ヴェトナム語慣用句辞典

(H.V. ハン)

当プロジェクトは，約 4,000 のヴェトナム語の慣用句の辞典を作成することを目的とする。慣用句のなかには，約 20 %の中国語起源の慣用句も含まれる。

選定方法としては，1945 年以降に出版された新聞，雑誌，文芸誌からの慣用句の収集，および慣用句選択の基準，慣用句と格言の区別，句の単位，方言，民謡等について小ワークショップを開催し，これに基づいて編纂を行う。第 1 年度は，スキャナーを使って出版媒体からデータを蓄積した。本年度は，データ収集を完了させるとともに文法的な解析を加え，辞書の出版を目指す。

62. 北ヴェトナムにおける高齢者と社会保障体系

(B.T. クオン)

当研究の対象は，北部平野部に住む約 230 万人のヴェト族の高齢者とこの 30 年間に実施された社会保障政策である。彼らは，①農民，②公務員，③その他自営業者に大別され，彼らの生活状況はそれぞれ非常に異なっている。

当研究は，応用社会政策研究であり，①既存文献の調査・研究，②社会保障体系評価の指標体系をつくり，質問表を用いて 60 歳以上の高齢者への調査，世帯主への調査を主要な方法とする。第 1 年度は，アンケート調査の試行，インタビュー，および文献収集を行った。本年度は，研究報告書を完成させ出版する。

63. ヴェトナム百科事典

(P.N. クオン)

ヴェトナムでは，科学，文化，芸術等に関する情報がなかなか入手しにくい。そこで百科事典の編纂が急務である。この百科事典はヴェトナム 4000 年の歴史の間に生み出された科学的，文化的，芸術的知識を一般の人々に与え，同時に世界の同様の知識も紹介するものである。

ヴェトナム百科事典編纂国家評議会が編纂を組織する。国家評議会は 6 人の学者により構成され，その下に特別委員 30 人，24 の委員会のメンバー 220 人，執筆者と助言者 300 人を動員する。本年度は助成の最終年度であり，百科事典の出版が予定されている。

64. 国際会議：現代生活における伝統的祭り

(L.H. タン)

ヴェトナムには古来，さまざまな種類の祭りが行われ，戦争中は下火になっていたが，近年再びたいへん盛んになってきた。これらの祭りのなかには，農事儀礼，伝説上の英雄の祭り，宗教的な祭りなど目的，内容的にも異なるさまざまなものがあり，東南アジア周辺諸国での祭りとの類似性，相違点がみられる。

昨年度，タイとインドネシアの祭りの研究者と交流し，両国の祭り研究の状況を把握するために調査旅行を行い，人脈の開拓と，本会議に貴重な指摘を多数得ることができた。この成果を基に，本年度は国際会議を開催する。

65. 10 世紀から 19 世紀半ばまでのヴェト族の移住の歴史

(D. トゥ)

今日のヴェトナムの主要民族であるヴェト族は，紀元後 1000 年の間に紅河流域のデルタ地域に山地から移り住み，その後の 1000 年近くをかけて南部メコンデルタまで移住してきた。

当プロジェクトは，このヴェト族の移住の歴史をたどるために，族譜，地神の記録，土地台帳，戸籍などの史料を調査するほか，人口学的な分析を行う。第 1 年度は，フィールド調査による資料の収集および地元研究者との意見交換を行った。本年度もこの調査を継続し，最終的に報告書にまとめ出版する。

66. 現代チャム語－ヴェトナム語，ヴェトナム語－チャム語辞書

(B.K. テ)

チャム族は，現代ヴェトナムの有力な少数民族の 1 つである。チャム語の辞書は，フランス人研究者の編纂したものがあるが，チャム語の文語を対象としたもので，文語と口語が相当に異なるため日常の用には足りない。

当プロジェクトでは，現代チャム語－ヴェトナム語とその逆のヴェトナム語－チャム語辞書（各 1 万語収録）の作成を目指す。第 1 年度は，チャム語語彙の収集，カード化を中心的に行い，データをコンピュータに入力した。本年度も作業を継続するほか，外国人研究者との交流などを通じて，分析手法の改善などに努める。

67. ヴェトナムの伝統演劇，ハッボイの辞典

(N. ロック)

12～13世紀頃に生まれ，今日も庶民に親しまれている伝統演劇ハッボイ（中国の京劇に似た演劇）のさまざまな側面を記録した辞典を作成するのが，当プロジェクトの目的である。具体的内容としては，古典，現代の代表作品の紹介，典型的登場人物，秀作の抜粋，劇作者たち，著名な俳優たち，研究史，劇団，地方的変異，歴史的変遷などである。

このために，文献の収集，俳優などへのインタビューなどにより資料を収集する。3年間で辞書の完成を目指す。

68. ヴェトナムのジャーナリズムの歴史：1865年－1990年

(H.M. ドゥック)

当プロジェクトは，100年以上に及ぶヴェトナムのジャーナリズム（主として新聞）の歴史を研究し，本編と資料編として成果を出版することを目指す。研究のトピックとしては，社会的傾向，内容分析とジャーナリズム文化，代表的ジャーナリスト，新聞の印刷部数等の統計的分析，社会的影響力などとなる。

方法的には国内およびフランス，アメリカなどの図書館に保存されている1次資料の分析を中心に，インタビュー等も行う。

69. フエの伝統工芸

(N.H. トン)

1802～1945年まで阮朝の首府であったフエには，皇帝の命令により，全国からさまざまな伝統工芸の名工が集められ，木像，金像，瓦などの種類別に公的工房が設けられた。今日，フエは唯一こうした工房組織が工芸組合として残っている場所である。

当研究では，各職種の起源，創始者，技法の変化，各時期の代表産品，現状など職種ごとに工芸と工房の歴史を明らかにする。また，技術，生産過程，生産組織，分業，職業に関連した慣習や宗教も研究する。このために文献調査，インタビュー，参与観察などを行う。

70. フエ美術館所蔵美術品の研究とカタログの出版

(T.C. グエン)

1908年に阮朝のズイ・タン帝の命により，フエの王宮内に設けられた今日のフエ美術館は，フランス領時代から大量の美術品，家具，彫刻，陶磁器，象牙などが収集され続け，またチャムの古美術品も収蔵された。ヴェトナム戦争の最中には，旧サイゴンに美術品が移されたりしたが，現在はフエ美術館に戻されている。

当プロジェクトは，約1万点の収蔵美術品について，その種類，量，材質，製造方法，年代等を調べて収蔵品目録を完備させると同時に，代表的作品のカタログを出版することを目的とする。

71. クアンナム・ダナン省ホイアンのサーフィン甕棺文化の考古学発掘

(N.D. ミン)

中部ヴェトナムで発見される推定2000年以上前の甕棺文化は，東南アジアのいろいろな地域とのつながりがありそうなきわめて興味深い考古学的研究対象である。発見地にちなんでサーフィン文化と呼ばれる。

中部ヴェトナムの古い港町ホイアンの周辺では，サーフィンの遺跡から多数の甕棺が発掘されているが，本格的発掘調査はいまだ手をつけられていない。当プロジェクトでは，地表調査，地図作成，試験発掘，本発掘，遺物の研究，発掘調査報告書の執筆を行う。発掘の主体は，ホイアン史跡管理事務所であるが大学の協力も得る。

72. ミン・マン帝陵

(M.K. ウン)

阮朝の皇帝ミン・マン帝の貢献は，阮朝全般への低い評価もあって統一後のヴェトナムではほとんど顧みられなかった。近年，阮朝の見直しの気運のなかで，その代表的皇帝の1人としてのミン・マン帝の再評価の動きも出てきている。

地元の研究者である助成対象者は，ミン・マン帝再評価をほかに先駆けて説いてきた1人であり，当プロジェクトでは，これまでの蓄積に加えて，資料収集，旧貴族や知識人階級からのヒアリングなどでミン・マン帝の業績をまとめるほか，帝の陵墓の建築的研究を行い出版する。

73. ヴェトナムのフモン族

(P.Q. ホアン)

ヴェトナムの有力な少数民族の1つであるフモン族(メオ族)は，500万人以上の人口を有し，北部山岳地帯の標高600m以上の山地，特に中国，ラオスとの国境地域に居住している。彼らは，焼畑をしながら移動しており，その伝統的生活様式を固く保持している。

当研究では，焼畑の実態，物質文化，社会組織，結婚と葬儀などの儀礼，社会規範などの多岐の側面にわたって民族学的な調査を行うことを目的としている。このために主として参与観察などのフィールド調査を行い，モノグラフとして成果を出版する。

74. カオダイ教

(D.N. ヴァン)

第1次大戦から第2次大戦の間に，特に南ヴェトナムを中心に新宗教が多数生まれた。カオダイ教もその1つで，政治的要素も含みつつ急激に成長し，一時は100万人以上の信者をもった。今日でも，ヴェトナム戦争前と変わらない信者がいる。宗教的には，仏教，儒教，道教，キリスト教，西欧神秘思想などの習合的な性格が強い。

当研究では，カオダイ教の宗教内容，社会・宗教的コンテキスト，各世界宗教の要素の混合状況とその推移，他宗教との関係，社会・政治組織，軍事組織などについて，文献研究，フィールド調査などを通じて研究する。

75. 大学レベルの東南アジア研究の教授カリキュラムの改善

(P.D. ズオン)

ヴェトナムにおける東南アジア研究は従来，フランスの学者の研究成果に大きく依存してきた。しかし，東南アジア諸国との直接の交流が，経済・文化などの面で深まるなかで，既存の東南アジア研究の教育カリキュラムを改善する必要に迫られている。

当プロジェクトは，東南アジア研究所とハノイ教育大学が共同で，東南アジア諸国の地理，経済，環境，考古学，民族，宗教，芸術，文学，歴史等々の項目と言語教育の新カリキュラムの開発を行おうとするものである。実施にあたっては，地域の研究機関の学術協力を求める。

76. ヴェトナムの地簿コレクションの詳細な検討

(N.D. ダウ)

阮朝によって，1805～36年にまとめられたヴェトナム全土の地簿は，10,044巻が戦火を免れ今日まで残っている。中国語で書かれ，すべての村ごとにまとめられている。内容的には，耕作地の見取り図，境界の説明，石高の説明，公的証明の4つからなる。全土の悉皆データであり，ヴェトナムの社会科学研究にとってきわめて基本的な資料である。

当プロジェクトは，10数年をかけてこの地簿の研究に取り組んできた民間史家が，その成果を逐次刊行していこうとするものである。

77. ヴェトナムの編年学，永久暦，および累積暦

(L.T. ラン)

ヴェトナムには古来，7種類の暦がある。太陽暦，太陽－太陰暦，週，24気候期，干支，星座である。このうち後3者の暦は，これまであまり研究されていない。このため，古文書にこれらの暦で書かれた年代を年代決定する際に，まちがいがあることが，対象者の研究により明らかとなった。

当プロジェクトでは，数学者を中心とする研究チームがパソコンを使って，図と表で西暦を他の暦に変換する方式(永久暦)，1～2000年までのすべての日を4種の暦で表わした表（累積暦）を作成することを目指す。

IV-2. 国際助成 マレーシア東南アジア研究奨励助成

本プログラムは，本年度より国際助成のサブ・プログラムとして開始した。東南アジア諸国間の相互理解を促進し，ひいては自国および東南アジア地域のアイデンティティを確立するには，東南アジアの人々自身による東南アジア研究が重要であるとの認識が急速に高まりつつあることに鑑み，そうした研究の発展を担う若手研究者の育成を目的としている。特に，研究対象地域の言語を用いた1次資料の活用や現地調査を行える研究者の育成に重点をおく。開始にあたって当分は，地理的に東南アジアのほぼ中心に位置し，東南アジア研究学科を有する大学のあるマレーシアを選び，マレーシアの大学院に所属する東南アジア人が，自国以外の東南アジア地域の研究を行うことに対して研究費等の助成を行う。

マレーシアの社会・人文系学科のある大学に応募要項を送付し，1992年4～7月に公募を行った。応募は10件あり，5件が助成対象となった。5件中1件が博士課程，残りは修士課程の研究で，論文としてまとめられるため明確な成果が期待できる。またマレーシア人によるものが3件，その他の2件はフィリピン人とインドネシア人による研究である。比較研究が4件を占め，研究対象地域もビルマ，タイ，マレーシア，インドネシア，フィリピン，カンボジアおよびヴェトナムと多彩になった。

助成対象一覧

	研究題目 代表者　所属	助成金額 （ドル）
1	“ドミサイル”から“ドメイン”へ：独立後のフィリピン，マレーシアの現代文学の代表作品の形成 L.J. マラリ　マレーシア国民大学ムラユ言語文学文化研究所　博士課程	9,000
2	東スマトラとマレー半島のハドゥラーの比較研究 ライラン M.　マラヤ大学東南アジア研究学科　修士課程	2,500
3	マヨン：マレー世界の歌謡と芸術 J.S. フェルナンド　マラヤ大学東南アジア研究学科　修士課程	7,100
4	植民地の財政システム，1900－1942年：英領ビルマと英領マラヤの比較研究 ジョージ S.　マラヤ大学東南アジア研究学科　修士課程	7,900
5	19世紀のタイ：近代化の始まり マラ・ラジョ S.　マラヤ大学歴史学科　修士課程	6,400
	合　計　5 件	**32,900** ドル

Ⅴ．インドネシア若手研究助成

V－0．インドネシア若手研究助成の概要

インドネシア若手研究助成は，1987年度から(当初国際助成の一部として)開始したプログラムである。研究資金の乏しいインドネシアの社会・人文科学分野の若手研究者に，自由で独立した研究を行う機会を提供することを目的としている。その趣旨に鑑みて，対象とする研究は原則として36歳以下の若手研究者の個人研究とし（例外あり），大学研究者だけでなく，NGOの若手研究者，大学以外の研究機関の研究者，ジャーナリストなどにも広く門戸を開放している。このため，国際助成とは異なり一般公募制をとっている。

基本テーマとして，「固有の文化や歴史の再考」と「急激に変化する社会の学術的な分析」を掲げ，これに関連する研究テーマであれば個々の研究のテーマは問わない。選考の基準は，①発想のオリジナリティ，②研究の社会的意味，③助成金を受けるのが研究者の成長にとってよいタイミング，④他からの資金の得にくさ，⑤研究の実現性，の5点である。

本年度の応募件数は815件で，前年度（528件）に比べて大きく増えた。選考の結果，61件が選ばれたが，そのうち12件は修士論文執筆のための研究，4件は博士論文執筆のための研究である。本年度は，ここ数年申請件数が増え続けていることを配慮して，助成件数･助成金総額を，前年度の35件からかなり大幅に増やした。

本年度は社会省，工業省，警察，情報省，宗教省などの政府機関に所属する若手研究者から初めて助成対象者が出ている。民間では，NGO(5名)，新聞社（1名），私立大学（3名）の助成対象者があった。助成対象者のうち女性の研究者は，18名（約30％）であった。

研究の分野的には，経済学，社会学，文化人類学，教育学，文学，歴史学，環境研究などの分野から数名ずつが選ばれ，非常に広い社会・人文科学の分野をカバーしている。

前年度に引き続き，1992年5月1日，2日にインドネシア，チパナスにおいて1991年度の助成対象者の最終報告会，ならびに1992年度対象者の中間報告会を開催した。中間報告会の開催は，これが初めてである。

V-1. インドネシア若手研究助成対象

助成対象一覧

	研究題目 代表者　所属	助成金額 (ルピア)
1	イリアンジャヤ州メラウケ県アスマット地方の慣習法社会における生命自然資源とエコシステムの保全に関する慣習法体系の研究 ヤン CH. ワリヌシー　インドネシア法律援護財団ジャヤプラ支部　研究員　28歳	6,000,000
2	「ドゥンダン・パウア」——ミナンカバウの口承文学—— スルヤディ　アンダラス大学文学部　非常勤講師　27歳	4,500,000
3	ラ・ガリゴ物語におけるサウェリガディンの中国への航海 ——ブギス族の伝統文学の神話構造の研究—— ヌルハヤティ ラフマン　ハサヌディン大学文学部　講師　34歳	3,000,000
4	インドネシアにおける特定産業内の国際貿易のパターン ムハッマド ユスフ　ハサヌディン大学経済学部　講師　29歳	6,000,000
5	モータリゼイションと商業化が，伝統的漁民と近代的漁民の所得レベル，分配のパターン，社会経済的分極化に与える影響 バゴン スヤント　アイルランガ大学社会政治学部　講師　26歳	3,600,000
6	R. チェチェ・スマントリのスンダ舞踊作品の形成と発展：1950年－1990年 エンダン チャトゥルワティ　インドネシア舞踊芸術アカデミー　講師　35歳	4,500,000
7	クディリ県プレマハン郡プフジャラック保健所地域の農村総合サービス所のボランティアワーカーの業務実態への動機の種類の影響 O.T. ウィリ ブロルドゥス　社会福祉省東ヌサトゥンガラ州支部　スタッフ　38歳	2,500,000
8	西ジャワ州ベカシ県チバルサ郡のコミュニティの建築石材小工業者とその周辺社会の生活環境保全に関する認識 サフラニ ダウライ　工業省中小企業総局　スタッフ　33歳	4,000,000
9	家内陶器工芸における女性の経済的役割とそれが農村および家庭の社会文化的価値観の変化に与える影響——三つのロンボック工芸村のケーススタディ—— マア イリナワティ　西ヌサトゥンガラ農村社会・生活環境研究所　研究員　30歳	4,000,000
10	トロック・ルンパクナ・ボネ——ブギス族の古典文学の文献学的考察—— ムハッマド ラピ タン　ウジュンパンダン教育大学　講師　32歳	3,000,000

	研究題目 代表者　所属	助成金額 （ルピア）
11	華人系企業人とプリブミ系企業人の若い世代――共通点と相違点―― トゥン ユ ラン　インドネシア科学院社会文化研究所　研究員　34歳	4,000,000
12	リアウにおけるタウケと漁民の関係――社会的な摩擦と社会システム維持の機能に重点をおいた概念の発展―― ユスマル ユスフ　リアウ大学教育学部　講師　31歳	4,500,000
13	産業と女性――スラバヤ市の女性労働者の生活維持戦略の研究―― スティナ　アイルランガ大学社会政治学部　講師　34歳	4,000,000
14	ロンボク島のインドネシア国軍兵士移民計画 ――経済，防衛，治安の側面とそれに伴う文化的摩擦―― ハリマトゥス サディア　マタラム大学農学部　講師　29歳	3,500,000
15	キアイ（イスラム指導者）の指導力と力の構造――ダルル・ウルム・ジョンバンイスラム塾のケーススタディ―― スカムト　ダルル・ウルム・ジョンバン大学　非常勤講師　32歳	3,000,000
16	東マンチャヌガラ国からパチタン県へ――19世紀の社会変化プロセスの一研究―― イスワフユディ　ジョグジャカルタ教育大学　講師　34歳	3,000,000
17	政治的側面からみた西スマトラの開発インフラストラクチャとしての女性組織「ブンド・カンドゥアン」の可能性 ラニー エミリア　アンダラス大学文学部　講師　34歳	4,000,000
18	高校教育におけるパンチャシラ道徳教育――政治の社会化機能に関する一研究―― スヨノ　1945年8月17日大学行政学部　講師　35歳	2,500,000
19	ブランタス川デルタ地方における農民の共通感情の存在としてのクレマン儀礼の研究――シドアルジョのクノンゴ村のケーススタディ―― アフマッド ファトゥハン　マラン教育大学　講師　35歳	4,000,000
20	南スマトラにおける伝統的マルガ統治の廃止が自然資源利用のパターンに与えた影響――コメリンイリール県の森林消滅の事例研究―― ジョニ エミルソン　スリウィジャヤ大学研究センター　研究員　26歳	4,000,000
21	高級住宅地と個人主義的行動パターンの出現――バンドゥンの分析的描写的研究―― ブルブル アブドゥラフマン　パスンダン大学　非常勤講師　30歳	3,000,000
22	サヌシ・パネ――一人の知識人とその演劇作品―― ヒルワン クアルダニ　インドネシア芸術大学芸術学部　講師　28歳	3,000,000

	研究題目 代表者　所属	助成金額 （ルピア）
23	19世紀から20世紀初頭のプリアガン地方の諸県の行政機構 イエチェ マルリナ　パジャジャラン大学文学部　講師　36歳	3,500,000
24	アングック演劇――大衆芸能の一形態―― エンダン レトノワティ　インドネシア科学院社会文化研究所　研究員　34歳	4,500,000
25	西カリマンタンのイバン族 ムルヤワン カリム　週刊誌「ジャカルタ・ジャカルタ」　記者　36歳	6,000,000
26	産業労働者のストライキ発生の背景となる福祉，疎外程度，その他要因――スラバヤ市の産業労働者のケーススタディ―― スダルソ　アイルランガ大学社会政治学部　講師　24歳	3,500,000
27	産業地域周辺に警察組織を展開する戦略――西ジャワ，ベカシの産業地域の事例研究―― I．マデ パンデ チャクラ　ジャカルタ首都圏地域警察本部　警察少尉　33歳	4,500,000
28	ブギス・マカッサル族の過去の土着知識体系――南スラウェシ州ブルクンバ県ビラ村のアンマナガッパ帆船の船乗りのケーススタディ―― エイマル B．デマリノ　ハサヌディン大学農学部　講師　28歳	4,200,000
29	アクバルン・カリム物語――文献学的一考察―― ムフリス　シャクアラ大学教育学部　講師　30歳	4,000,000
30	百貨店とスーパーマーケットの存在が消費者の行動変化に与える影響――ジュンベル市のケーススタディ―― ヘンドロ スマルトノ　ジュンベル大学文学部　講師　29歳	4,000,000
31	マタラム市の季節移民――社会文化変化に関する一研究―― アミルディン　マタラム大学農学部　講師　30歳	3,000,000
32	サラワット・ドゥラン――ミナンカバウのイスラム口承文学―― アドリイェッティ アミル　アンダラス大学文学部　講師　36歳	4,000,000
33	メダン小説――1930年代の文学書とオランダ東インド植民地社会―― スワルソノ　インドネシア科学院社会文化研究所　研究員　33歳	3,500,000
34	インドネシアの企業における労働者の福祉に関する労働諸規定実施についての法的研究 アブドゥラ スライマン　タドラコ大学法学部　講師　33歳	6,000,000

	研究題目 代表者　所属	助成金額 (ルピア)
35	校長の意思決定能力——西スマトラの公立高校の校長の意思決定に影響する要因の研究—— ヤスリアル　パダン教育大学　講師　31歳	4,500,000
36	チレボン港の発達（1870－1937）とそれがチレボンの都市社会の社会経済的生活に与えた影響 シンギ T. スリスティヨノ　ディポヌゴロ大学文学部　講師　28歳	4,000,000
37	タルビヤ・イスラミヤ協会の政治概念と政治行動：1945－1970 アライディン　シャリフヒダヤトゥラ・イスラム高等学院　大学院生　34歳	4,500,000
38	デサ行政制度実施が西スマトラのミナンカバウ族の伝統的共同体ナガリの存続と人々の社会文化的生活に与えた影響 シルヴィア ローザ　アンダラス大学文学部　講師　27歳	3,600,000
39	ジョグジャカルタの同性愛者のプロフィール ——ジョグジャカルタの同性愛者の社会的背景と性行動—— クスウィナルノ　情報省新聞世論研究所　研究員　29歳	3,000,000
40	プサントレン（イスラム塾）リルボヨー——宗教伝統の統合における構造と機能—— A. ハニエフ S. ガフル　インドネシア大学文化人類学研究科　大学院生　33歳	4,000,000
41	ジョグジャカルタのムランギ・スレマン村のタレカット・カディリヤ（イスラム神秘主義）信者の社会文化の構造変化 ドゥドゥン アブドゥラフマン　スナンカリジャガ・イスラム高等学院　講師　29歳	3,500,000
42	1979年第5法に基づくデサ行政構造の中でのバリの慣習法上の村組織の機能の存続，変化および有効性 エンダン ドゥウィヤンティ　社会経済・マスコミ研究所　研究員　26歳	4,500,000
43	スラカルタにおける土着金融制度ガデ・ジャワの家族経営に関する研究：1892－1956 プラマナ　個人　27歳	2,500,000
44	東ヌサトゥンガラ州マンガライ県のルトゥン郡および都市行政調整地域周辺の土地問題の法的調整効率への文化の影響の研究 カメルス　ヌサチェンダナ大学法学部　講師　33歳	5,000,000
45	タレカット・バンタキヤの反抗 オット ヌル アブドゥラ　シャクアラ大学農学部　講師　33歳	3,500,000
46	民衆の権利擁護の過程における法律援護者（パラリーガル）の役割——東スラバヤの農民のケーススタディ—— アンディック ハンディヤント　インドネシア法律援護財団スラバヤ支部　研究員　26歳	3,500,000

	研究題目 代表者　所属	助成金額 （ルピア）
47	バタック族の伝統的ケチャピ（弦楽器）――伝統的バタック族のケチャピ演奏家の家族とその音楽に関する民族音楽研究―― アンドレ インドラワン　インドネシア芸術大学芸術学部　講師　31歳	6,000,000
48	東ジャワの漁業における分配への伝統の強さと漁業事業の収益性の分析――伝統と事業の収益性に関する一研究―― ヌッディン ハラハップ　ブラウィジャヤ大学水産学部　講師　31歳	4,000,000
49	ジャンビ市における不定期労働者としての女性労働者の法的保護 バフデル J. ナスティオン　ジャンビ大学法学部　講師　35歳	3,000,000
50	伝統産業におけるプリブミによる事業活動の柔軟性と適応力――プカロガン，プカジャガのバティック産業の維持と紡績産業への転換―― ハジリヤント Y. トハリ　ディポヌゴロ大学文学部　講師　32歳	3,500,000
51	ウェトゥ・テルイスラム社会の宗教行動――西ヌサトゥンガラ州西ロンボクのバヨン村のケーススタディ―― エルニ ブディワンティ　インドネシア科学院政治行政研究所　研究員　32歳	5,700,000
52	サンドロ・ワヌア（村の治療師）と土着医療システム――漂流民バジョの再定住地の土着医療と母子保健看護婦の行動変化の研究―― ムスタミン アルウィ　ハサヌディン大学社会政治学部　講師　33歳	4,000,000
53	ラジャ・アリ・ハジの作品，ブスタヌル・カティビナ・リス・スブヤニル・ムタアリミンの文献批判 アピプディン　インドネシア大学文学部　講師　30歳	3,500,000
54	既刊のジャワ語・インドネシア語文献目録に未登録のジャワ語アラビア文字古文献（ペゴン文献）の目録作成と分類 ティティッ プジアストゥティ　インドネシア大学文学部　講師　35歳	4,500,000
55	南スラウェシ州ゴワ県のダム開発過程における地元プランロエの人々の考え方と態度の変化 ザイヌディン カイユム　ゴワ県庁　職員　33歳	4,000,000
56	女性労働者の労働組合での組織化の阻害要因――ジョグジャカルタのマリオボロ通りの売り子のケーススタディ―― ウィトロ　個人　29歳	3,500,000
57	バドゥイ族の境界の保存 ウッケ ルクミニ　インドネシア大学社会政治学部　講師　26歳	4,000,000
58	東ジャワのジョンバンのイスラム塾トゥブイレンと同タンバッブラスにおける教育の相互作用――黄表紙教義本からみた考察―― イルハムニ　マラン教育大学　講師　27歳	3,500,000

	研究題目 代表者　所属	助成金額 （ルピア）
59	東ヌサトゥンガラ州クパン県のサブ族社会における伝統的絞り染め布地の社会宗教的機能 ダウド ディマ タロ　ヌサチェンダナ大学法学部　講師　33歳	4,500,000
60	ワヒディヤ――一つのタレカットの研究―― アブドゥル ムバロク　宗教省宗教・信仰活動研究所　研究員　34歳	3,500,000
61	西ヌサトゥンガラのロンボクからドンプへの住民の移動 スディアティ P.　自助開発財団　スタッフ　26歳	4,000,000
	合　計　61 件	**241,600,000** ルピア （**119,100** ドル） **15,288,891** 円

VI. 「隣人をよく知ろう」プログラム

VI-0. プログラムの概要

「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成は1978年度に発足し，日本向けのプログラムは15年目を迎えるに至ったが，1982年度から東南アジア向けのプログラム，また1983年度から東南アジア相互間のプログラムが開始された。1990年度からは，プログラムの対象地域に新たにインド，パキスタン，バングラデシュの南アジアの3か国を加え，南アジア向け・同相互間のプログラムが開始された。本年度からは，プログラムの整理を行い，従来の東南・南アジア向けプログラムと同相互間プログラムを統合して，アジア相互間とすることとした。したがって，「隣人をよく知ろう」プログラムは，日本向けとアジア相互間の2本立てとなる。

日本向けプログラムのねらいは，日本の人々が隣人である東南アジア・南アジア諸国の人々の文化・社会・歴史等についての認識を深めることを推進することである。そのために，東南・南アジア各国の人々が書いた文学作品や文化・社会・歴史などについて日本の一般読者へ紹介することがふさわしいと思われる本を，相手国の人々の意見を反映しつつ選び出し，それらの本の日本語版を制作するときの翻訳費，および出版経費の一部を助成する。本年度を含めて，この15年間で168件が助成対象となった。各国別の累計は，インド12件，インドネシア40件，ヴェトナム8件，シンガポール15件，スリランカ4件，タイ36件，ネパール4件，ビルマ18件，フィリピン14件，パキスタン2件，バングラデシュ2件，マレーシア11件，ラオス2件である。

アジア相互間プログラムは，日本・東南アジア・南アジアの国々の間での相互理解を促進するために，他の国の文学作品や文化・社会・歴史についての学術書などをそれぞれの国のことばに翻訳・出版する事業で，日本以外で実施される翻訳・出版事業を助成する。また，日本人によるこれら地域の研究成果を還元する目的で，研究成果を研究対象となった国の言語に翻訳・出版する事業もこのプログラムの対象とする。1992年度は，インド1件，インドネシア2件，ヴェトナム5件，スリランカ1件，ネパール1件，パキスタン1件，バングラデシュ2件，マレーシア3件が助成対象となった。

VI-1. 日本向け・翻訳出版促進助成

助成対象一覧

	日本語仮題名 訳者名	原著名 著者・編者名（原著国名）	出版社名	助成金額 （円）
1	泥棒 川口 健一	*Bi Vo* **Nguyen Hong**（ヴェトナム）	段々社	1,810,000
2	ファイズの歌 片岡 弘次	*Nuskhahhae-wafa* **Faiz Ahmad Faiz**（パキスタン）	花神社	1,120,000
3	パンジャーブ生活文化誌 麻田 豊	*Yadgar-e Chishti* **Nur Ahmad Chishti**（パキスタン）	平凡社	1,280,000
4	サバルタン・スタディズ 竹中 千春	*Subaltern Studies* I-III **Ranajit Guha**（インド）	平凡社	2,090,000
5	ティルックラル ——古代タミルの箴言集—— 高橋 孝信	*Tirukkural* **Tiruvalluvar**（インド）	平凡社	1,680,000
6	ギータ・ゴーヴィンダ，デーヴィー・マーハートミヤ 小倉 泰　横地 優子	*Gitagovinda, Devimahatmya* **Jayadeva** ほか（インド）	平凡社	1,400,000
7	ヤージュニャヴァルキヤ法典 渡瀬 信之 井狩 彌介	*Yajnavalkya Smrti* **Yajnavalkya**（インド）	平凡社	2,350,000
8	インドの偉大な音楽思想家たち 井上 貴子 田中 多佳子	*Composers* **V. Raghavan** 編（インド）	穂高書店	2,390,000
9	ランサーン王国の興亡 星野 龍夫 平田 豊	*Nithaan Khun Boohom* ほか **Maha Silaa Viilavong** ほか（ラオス）	穂高書店	2,310,000
10	リー・クアンユー首相中国を語る 田中 恭子	李光耀看六四後的中国・香港 **Lee Kwan Yew**（シンガポール）	穂高書店	2,240,000

	日本語仮題名 訳者名	原著名 著者・編者名（原著国名）	出版社名	助成金額 （円）
11	ベンガル民芸論 小西 正捷	*Folk Arts and Crafts of Bengal* **Gurusaday Dutt**（バングラデシュ）	穂高書店	1,680,000
12	はるか遠き日 加藤 則夫	*Thoi Xa Vang* **Le Luu**（ヴェトナム）	めこん	1,070,000
13	焼身 山下 博司	*Jeyakantan Cirukataikal* ほか **Ta. Jeyakantan**（インド）	めこん	1,530,000
14	オケオ文化とメコンデルタの古代文化 菊池 誠一	*Van hoc Oc Eo va cac van hoa co o dong bang Cuu Long* ホーチミン市社会科学研究所（ヴェトナム）	穂高書店	2,800,000
15	チャンパーの小枝 星野 龍夫 前田 初江	*Kon Cha Theng Wan Ni* 等 **Duang Champa**（ラオス）	めこん	1,120,000
16	70年代 枡谷 哲	*Dekada '70* **Lualhati Bautista**（フィリピン）	めこん	1,560,000
17	変わりゆく村 青山 鑛一	*Gam Peraliya* **Martin Wickramasinghe**（スリランカ）	南雲堂	2,090,000
	小　計（日本向け）	**17冊**		**30,520,000**

助成対象概要（日本向け・翻訳出版促進助成）

1．泥棒

グエン・ホン（1918～82）のこの小説は，1935～36年にかけて書かれ，1937年に刊行された。北部の港町ハイフォンを舞台に，すりやかっぱらいを稼業とする明日のない青年男女の生き様が当時の社会風俗を背景に冷徹な筆致で描かれている。この小説は1930年代の都市の社会風俗の一面をリアルに描いた作品であり，作者グエン・ホンのリアリズムの手法がみごとに結実した彼の代表作ともいえる作品である。また，ヴェトナムの近代文学を語る際には必ず言及される重要な作品であり，その文学的価値は今日でも少しも失われていない。

2．ファイズの歌

詩集『叫びの刻印』『友の町の夕べ』『我が心，われら旅人』から，詩人の生涯と作品を代表する作風を訳者が選び出す。ファイズは民族運動が高揚する時期に青年期を迎え，文学的にはロマン主義，進歩主義を経験した。イギリスから独立して誕生した自分たちの国であるはずのパキスタンが，自由な国でないことに直面し，求めるものが得られず，得られたとしても砂がこぼれるように消えていくことへの焦燥感と怒り，それでいて常に何かを求めて活動しなくては気がすまない詩人の志，これがファイズの世界である。

3．パンジャーブ生活文化誌

著者は1829年，現パキスタン・ラホール市の旧家に生まれた。20歳の頃よりウルドゥー，ペルシャ，パンジャービーの諸言語と伝統的習俗を同地在住のイギリス人たちに教え，また著作活動に入った。なかでも本書は，ラホールの伝統的社会・生活文化の総体的な姿を，自らの属するチシュティー家の具体的記述を通じてまとめたもので，ムスリムの誕生・成人・結婚・死などの人生儀礼，年中行事やイスラム聖者祭のウルス，衣・食・住にわたるさまざまな生活様式などを150項目ほどにわたって詳細に記述している。

4．サバルタン・スタディズ

インド史の再解釈を目指す共同研究『サバルタン・スタディズ』の傑出した作品を翻訳対象とする。歴史分析の視点と方法を論じた2論文と，ガンディー時代の民族主義に焦点をあてた4つの事例研究である。後者は，民族主義運動に民衆運動の独自のダイナミズムを再発見しようとする試みである。グラムシの“subaltern”概念を出発点に「下からの歴史」を探究する当研究は，1980年代のインド史研究に大きな影響を与えた。単にインド史の最新傾向であるのみならず，方法論も含め，他の分野・地域の研究との比較にも広がる内容をもつ。

5．ティルックラル――古代タミルの箴言集――

本書は，ティルヴァッルヴァル作の箴言集である。全体は1,330の二行詩からなり，汎インド的な人生の3大目標，「法」，「財」，「愛」を描く。南インドのタミル民族の精神的シンボル的な書である。インドには仏教のものも含め，宗教，世界，社会，人生などを短かな詩節で描く金言集，箴言集の類は数多いが，本書はどの宗派にも偏らない点で特色がある。またそれゆえ，人生などに対する洞察は深く，文学的修辞にあまりとらわれない簡潔な表現も，人の心に訴えかける。タミルのみならず，インドの英知を知る絶好の書である。

6．ギータ・ゴーヴィンダ，デーヴィー・マーハートミヤ

『ギータ・ゴーヴィンダ』は，牧童クリシュナに化身したヴィシュヌ神と，牛飼女ラーダーの官能的恋愛を主題にした田園情緒豊かな叙情詩である。この詩は，後世のクリシュナ信仰の高揚に大きな役割を果たし，また細密画に格好の素材を提供し，さらにしばしば音楽化された。一方，ドゥルガー女神に対する熱烈な賛辞に満ちた『デーヴィー・マーハートミア』は，古代の母神信仰に起源をもつ女神信仰をシヴァ教の体系に取り込む媒体となったものである。この書は，中世の美術において，女神の図像的根拠を与え，民衆の信仰をさらにかき立てた。

7．ヤージュニャヴァルキヤ法典

本書は『マヌ法典』と並ぶ最も重要な法典である。成立年代は3～5世紀までの間であるとされ，『マヌ法典』と比較すると，より明晰で組織的に編集されている。3篇からなり，慣習法，契約，訴訟，贖罪法を取り扱っている。法律に関する叙述の間には，格言詩が含まれ，さらに哲学，宗教，道徳について論じ，また胎生学的解剖学的な問題について論じた箇所も存する。この法典に対する『ミターリシャラー』注は，それ自体独立した価値を有する。この注釈はイギリス統治下のインドにおいて英訳され，当時の裁判において重視された。

8．インドの偉大な音楽思想家たち

インドでは普通「音楽」と訳される「サンギータ」は，実は音楽のみならず，思想・哲学・詩文学などをも広く含み込む総合的芸術ジャンルであった。したがって，ここにいう「作曲家」たちは，実は思想史上も文学史上も大きな影響を及ぼした，古今南北に及ぶ重要人物ばかりである。取り上げられた11人は，12世紀のジャヤデーヴァをはじめ，時代・地域・宗教・出身階層などのうえでも偏りがなく，現代インドの最高の著者たちが，その1人ひとりを取り上げて評伝的解説を担当執筆している。

9．ランサーン王国の興亡

4点のラーオ語文献を訳出するラオス通史のパノラマである。16世紀中葉に完成した『リン・ボーホム記』は，16世紀初頭までの北ラオス年代記。最も信頼し得る年代を今日まで伝えている『ラーンサーン年代記（別称ラオス年代記）』を第2部とする。これは11～18世紀までの事件史を簡潔に描いている。第3部は，近年死去した碩学シーラー・ウィラヴォン執筆による，18世紀の三国分裂時代の記述を編訳する。第4部はタイの朝貢国となったヴィエン・チャン王国最後の王アヌの独立戦争を扱ったマユリ，プーイパン両博士の論文である。

10．リー・クアンユー首相中国を語る

本書は，1989年6月4日の天安門事件以降の中国と香港に関するリー・クアンユー首相（当時）の発言を集めたものである。西側先進諸国は，天安門事件に関して中国を非難し，経済制裁を行ったが，リー首相は制裁に批判的である。これは，華人であるリー首相が中国政府に同情的なのではなく，東南アジア諸国に共通した反応である。東南アジア諸国にとって，中国が孤立化し，不安定になることこそ危険なのである。シンガポールにとっては，経済関係の深い香港の動揺も重大問題であり，リー首相の発言にはその安定を願う気持ちが強く出ている。

11．ベンガル民芸論

本書の著者グルショドイ・ドット（1882～1941）は，これまで日本であまり紹介されることがなかったが，日本でいえば柳宗悦のような役割を果たした人である。殊にベンガル地方（今日のバングラデシュを含む）にみられる民俗造形を，その背後にある伝統的な世界観・価値観，儀礼や神話，社会（殊に女性の役割）等を通じて分析し，それらこそが，むしろインダス文明以来一貫してインドの民族文化・民俗文化をなす通奏低音のような基層文化をなしていたことを明らかにした。

12．はるか遠き日

作者のレ・リュー（1942年生まれ）は，ヴェトナム戦争中，従軍作家として戦記文学を主に書いてきた。この作品の時代背景も，ヴェトナム戦争中から戦後にかけてであるが，主人公の造型に従来にない新しさがみられる。主人公は農村出身の青年。いま，ヴェトナム文学は，戦争を鼓舞する作品から戦後社会の混乱や歴史の見直しなど，真実を直視する作品へと脱皮を迫られている。兵士としては勇敢でも，愛情には悩み傷つく主人公の内面を赤裸々に描くことによって，レ・リューはヴェトナム文学のこの新しい流れに大きく寄与したのである。

13. 焼身

作者は1960年代のデビュー以来，南インド・タミルの文壇において第一人者の地位を保っている。本書では，彼の代表作としてタミル人にも馴染みの深い中編小説のいくつかを翻訳する。取り上げるのは，見知らぬ男性に強姦された少女の新しい生き方を模索した表題作のほか，町外れの安宿で皆に蔑まれながら働く貧しい男の良心の叫びを描いた「誰のために泣いたのか」など，いずれも社会的弱者の側に立ち，社会から半ば疎外され差別された人々の生き方を描いた1960年代の秀作である。

14. オケオ文化とメコンデルタの古代文化

1944年に行われたフランスのマルレー隊による扶南遺跡オケオの発掘以来，長らくヴェトナム南部における考古学調査は停止していた。1975年以降ヴェトナム社会科学院のホーチミン市社会科学研究所考古学部は，ダオ・リン・コン，ヴォー・シ・カイ両教授の指導の下にオケオ周辺，ドンタップニ地域における8世紀以前の遺跡を600か所にわたり発掘調査してきた。原著は，そのなかの主要なものに関する報告書である。ヴェトナム南部のインド化，また東西交易のターミナルとしての位置にかかわる多数の遺物建築遺構が含まれている。

15. チャンパーの小枝

現代ラオス語による現在活躍中の作家たちの作品集である。彼らは，3つのグループに分けることが可能である。第1は解放統一闘争に数十年参加していた社会主義を信奉する中年以上の作家，第2は王国側にいたが社会正義や汚職などをテーマとし，解放後も居残った首都ヴィエンチャンに住む作家，第3はラオス青年作家協会を設立して参加した，最も新しい自由化路線をいく新しい文学者たちだが，彼らの1990年代に入ってからの作品も日本へ紹介する。

16. 70年代

この作品は，フィリピン・マニラ郊外に住む富裕な一主婦，アマンダの目を通して，彼女が体験したマルコス統治下のフィリピンの1970年代を生き生きと描き出したタガログ語中編小説である。彼女は，夫フリアンとの間に4人の男の子をもうけたが，その子たちが成長し自らの進路を選び取っていくなかで，当時の戒厳令下の社会といやおうなくかかわっていき，さまざまな物語が展開する。作者のバウティスタは，この政変の底流となったフィリピン人の価値観の変化を，ベニグノ＝アキノ暗殺以前にこの作品において示している。

17. 変わりゆく村

著者の出身地である南部州の農村を舞台に，イギリス植民地支配が推進した近代化，都市化，商品経済化，中央集権化政策などにより，自立していた村人の暮らしが大きく変貌し，解体していく過程を主題にしたシンハラ語の作品である。20世紀初頭の時代的な背景の下で，支配的な地位を誇っていた名望家が没落し，身分の低い新興勢力に屈伏していかざるを得ない状況を娘の結婚をめぐる葛藤を中心に描写している。従来の宗教的な説話や奇想天外な物語から訣別して，シンハラ近代文学の出発点とみなされる画期的なリアリズム文学である。

VI-2. アジア相互間・翻訳出版促進助成

(継2)：継続2年目
(継3)：継続3年目
(継5)：継続5年目
(継6)：継続6年目

助成対象一覧

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 (ドル)
1 (継3)	*The Makioka Sisters*（『細雪』）のベンガル語への翻訳と出版 F. ラッピ　アフメッド記念財団　専務理事（バングラデシュ）	8,000
2 (継6)	*A History of Japan Vol.1* のヴェトナム語への翻訳と出版 N.D. ジェウ　ヴェトナム国立社会科学センター社会科学出版局　局長（ヴェトナム）	12,800
3	*The Family*（『家』）のヴェトナム語への翻訳と出版 P. レ　ヴェトナム国立社会科学センター文学研究所　所長（ヴェトナム）	9,500
4	*Japan : Past and Present* のヴェトナム語への翻訳と出版 H. ヴァン　ヴェトナム国立社会科学センター・ホーチミン市社会科学研究所　副所長（ヴェトナム）	11,500
5 (継5)	*Economic Growth and Income Distribution* と *Governments and Markets in Economic Development Strategies* のヴェトナム語への翻訳と出版 D.P. ヒエップ　ヴェトナム国立社会科学センターアジア太平洋研究所　所長（ヴェトナム）	14,500
6	*Science, Technology and Society in Post-war Japan* と『日本社会の構造』のヴェトナム語への翻訳と出版 C.M. タイン　ヴェトナム国立情報出版社　所長（ヴェトナム）	16,100
7 (継5)	*Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan*（『日本政治思想史研究』）のインドネシア語への翻訳と出版 M. サストラプラテジャ　カルティ・サラナ財団　副理事長（インドネシア）	6,200
8	*The Rise of Ersatz Capitalism in Southeast Asia* のマレーシア語への翻訳と出版 イシャク S.　フォーラム　メンバー（マレーシア）	8,300
9 (継2)	*Islam and Its Relevance to Our Age* のマレーシア語への翻訳と出版 サバリア A.　イクラック　編集者（マレーシア）	2,300
10 (継2)	*The Dinosaur of the Desert*（『砂漠の恐竜』）のインド6言語への翻訳と出版 R.P. ダミジャ　ナンダルタ　設立会員（インド）	29,200

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
11 （継 2）	*Black Rain*（『黒い雨』），*The Phoenix Tree and Other Stories* および *Silence*（『沈黙』）のウルドゥー語への翻訳と出版 S．アンシャリ　マシャル財団　事務局長（パキスタン）	17,200
12 （継 2）	*El Filibusterismo* のインドネシア語への翻訳と出版 アフマド R．　ドゥニア・プスタカ・ジャヤ　社長（インドネシア）	7,900
13 （継 6）	『春琴抄』のシンハラ語への翻訳と著者谷崎潤一郎の生涯と作品の解説の出版 D.A．ラジャカルナ　日本文学翻訳委員会　委員長（スリランカ）	5,500
14 （継 3）	南アジア文学作品 6 点のネパール語，ネワール語への翻訳と出版 K.M．シャクヤ　文学財団　理事長（ネパール）	3,000
15 （継 3）	*Thai PEN Anthology* のマレーシア語への翻訳と出版 アブバカール H．　学術振興財団　理事長（マレーシア）	8,200
16 （継 2）	*The Unknown Craftsman* と *Botchan* のベンガル語への翻訳と出版 B．チョウドリ　文学翻訳クラブ　会長（バングラデシュ）	13,500
	小　計（アジア相互間）　**16** 件（**26** 冊）	**173,700** ドル **(22,009,527** 円）

助成対象概要（アジア相互間・翻訳出版促進助成）

1．*The Makioka Sisters*（『細雪』）のベンガル語への翻訳と出版　（F．ラッビ）

本書は，大阪の船場育ちの蒔岡家の四姉妹を描いた谷崎潤一郎の最大長編小説である。なかでも，3番目の婚期の遅れた雪子の5回にわたる見合いを通して，昭和12～16年に至る阪神地区の富裕な家庭の日常生活や年中行事が絵物語風に描かれる。本書は戦争中と戦後の悪条件下に書かれたが，戦争で消滅していく日本の伝統と文化を書きとどめんがため，当局の圧力にもかかわらず書き続けられた作品である。その意味で，日本の伝統美を描く代表的作家の1人である谷崎潤一郎の代表作の1つでもある。

2．*A History of Japan Vol.1* のヴェトナム語への翻訳と出版　（N.D．ジェウ）

本書は，George Sansom 著の日本史の通史であり，現在英文で出版されている同種の本としては最も長くかつ定評のあるものである。同著は3部作からなり，第1巻は日本の地理，人種から始まり，大和朝廷の成立，平城京，平安京の建設などから元寇までを扱っている。助成対象者の所属機関では，これまでに助成により日本の古典文学（『源氏物語』『平家物語』）や近代文学作品（『楡家の人々』），また美術史の本などを翻訳出版してきており，実績がある。

3．*The Family*（『家』）のヴェトナム語への翻訳と出版　（P．レ）

本書は，島崎藤村の代表作の1つである。明治31～43年に至る10余年間の藤村の生家である島崎家（作中では小泉家）と長姉の嫁いだ木曾福島の高瀬家（同橋本家）という，共に由緒ある旧家の没落していく過程をたどりながら，家父長制家族制度の因習や儀礼が，それに縛られて生きる人々の運命をいかに狂わせていったかを描いている。伝統的家族制度と社会の近代化というテーマは，日本のみならずアジアに共通したテーマであり，ヴェトナムにおいてもきわめて今日的問題である。

4．*Japan : Past and Present* のヴェトナム語への翻訳と出版　（H．ヴァン）

本書は，Edwin O. Reischauer の手になる，比較的最近出版され（1990年）日本でも評判になった本である。日本の歴史を扱った英文の本は何種類かあるが，それぞれ著者の歴史観を反映した特徴がある。本書は，そのなかでも比較的最近の出版ということもあって，日本が経済大国化した現状のなかで書かれただけに，その理由を歴史のなかに探るという視座が特徴であろう。Sansom の前書に比べるとコンパクトで読みやすいともいえよう。

5．*Economic Growth and Income Distribution* と *Governments and Markets in Economic Development Strategies* のヴェトナム語への翻訳と出版　（D.P．ヒエップ）

前書は，書名と同名のセミナーの発表論文を出版したもので，アセアン各国の経済成長政策と貧困問題，分配の問題を扱ったアセアンの研究者の論文が収録されている。市場経済化を進めるヴェトナムにとって，これらの問題は，市場経済化に必然的に伴う課題であるだけに，近隣諸国の経験に学ぶという点で意味が大きい。後書は，戦後の日本，韓国，台湾の経済成長を分析して，市場経済とそれへの政府の介入，誘導政策を論じたものである。

6．*Science, Technology and Society in Post-war Japan* と『日本社会の構造』のヴェトナム語への翻訳と出版　（C.M．タイン）

前書は，中山茂の英文書き下ろしの著作で，戦後日本の科学技術史を科学社会学の立場から分析したもの。日本の科学技術発展礼賛的な書物ではなく，大学における研究の限界，反科学主義の動き，公害などの問題点にも十分に目を配った学術的著作である。後書は，福武直の社会学書である。明治維新に始まる近代化の性格を踏まえ，戦後の民主化とその限界を戦後社会の変動に即してとらえ，社会変動を経た現代日本の人間が戦前に比してどのように変化し，いかなる点で近代日本（戦前）の性格を残存させているのかを明らかにした著作である。

7．*Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan*のインドネシア語への翻訳と出版（M．サストラプラテジャ）

本書は，丸山真男の著作で戦後の日本思想史研究の道を切り開いた古典的名著といわれている。江戸時代における正統的儒教世界観の内面的崩壊過程を解明し，「自然」と「作為」の対抗関係のなかに日本思想の近代化の型を探求した著作である。当助成対象者は *Robert Bellah* の *Tokugawa Religion* を翻訳し，近代化と伝統というアジア共通の課題についてインドネシアの知識人の間での論争を惹起させた。本書は，この Bellah の著作への鋭い批判を含んでおり，インドネシアの知的活動への刺激に富んだ翻訳になると思われる。

8．*The Rise of Ersatz Capitalism in Southeast Asia* のマレーシア語への翻訳と出版（イシャク S.）

本書は，吉原久仁夫の英文著作である。東南アジアの経済は，東南アジアの華人資本と民族主義的政府の組み合わせのなかで発展したが，それは華人資本による支配を喜ばない政府による差別的政策により，真の資本主義発展の基礎である科学技術の振興や産業開発への投資には向かわずに，逃げ足の早い投資に留まったと著者は指摘する。その意味で著者は，東南アジアの資本主義を Ersatz Capitalism（えせ資本主義）と呼び，欧米や日本の資本主義と区別している。

9．*Islam and Its Relevance to Our Age* のマレーシア語への翻訳と出版　（サバリア A.）

本書は，Asghar Ali Engineer の著作でインドのボンベイで出版された進歩的イスラム思想に関する著作である。著者は，現代の精神的あるいは社会的な諸問題に直面するとき，イスラムの進歩的アプローチのみが有効で，復古的原理主義あるいは護教的近代主義では問題のいかなる解決にもつながらないことを主張している。こうした主張を，イスラムの歴史的起源，政治・哲学・経済学との関係，現代における人間解放との関連におけるイスラムの問題などを論じながら，展開している。

10．*The Dinosaur of the Desert*（『砂漠の恐竜』）のインド6言語への翻訳と出版　（R.P．ダミジャ）

本書は，第5回野間絵本コンクールで金賞となった作品で，田島伸二作，Kang Woo-Hyo（韓国）絵の絵本である。この絵本は，人間が互いに争い合うことの愚かしさを訴えた作品で，この作品を是非ともインドの子供たちにも紹介したいとのことで発案された。1990年度の助成で，インドの6言語（ヒンディー，ベンガリ，グジャラーティ，マラヤラム，タミール，ウルドゥー）に翻訳され出版された。今回は残りのインドの主要言語のうち，アッサム，カンナダ，マラティ，オリヤ，パンジャブ，テルグの6言語に翻訳出版する。

11．*Black Rain, The Phoenix Tree and Other Stories* および *Silence* のウルドゥー語への翻訳と出版　（S．アンシャリ）

第1の作品は，井伏鱒二の作品で広島原爆の実際の体験者へのインタビューなどを基に，原爆後の黒い雨によって被爆した若い女性を主人公に原爆の悲惨さを見事に描き出した作品である。第2の作品は，木崎さと子の短編小説である。いずれの作品も現代日本社会のなかで自己の確立と伝統的価値観の間で苦闘する女性たちを描いている。第3の作品は，遠藤周作の小説である。作品は，江戸幕府のキリシタン弾圧のなかで，信仰を守るかあるいは信者の命を守るために転向するかで苦悩する，若い日本人神父の物語である。

12．*El Filibusterismo* のインドネシア語への翻訳と出版　（アフマド R.）

本書は，フィリピンの民族英雄 Jose Rizal（ホセ・リサール）の代表作の1つで，スペイン植民地政府の横暴とフィリピン民衆の困窮を描き，フィリピンの民族主義運動の歴史を知るうえで欠かせない作品である。作品はスペイン語で書かれ，題名はスペイン植民地での独立運動の意味である。ホセ・リサールの作品はやがてフィリピンの独立革命へとつながり，アジアで最も早い独立運動へと展開していった。その意味でフィリピンを離れても重要な作品で，インドネシア語へ翻訳出版される意義は大きい。

13. 『春琴抄』のシンハラ語への翻訳と著者谷崎潤一郎の生涯と作品の解説の出版　(D.A. ラジャカルナ)

『春琴抄』は，谷崎潤一郎の代表作の１つであるが，この作品により不動の作家的地位を確保した記念碑的作品である。物語は，盲目の美女春琴とその家の奉公人で手引き役の佐助の倒錯した愛を，古典的手法を駆使して描いた作品である。佐助にとって春琴は，敬慕する女性であり，主人であり，地唄の師匠でありながら，同時に夫婦の関係でもあるという複雑な間柄だが，春琴が顔面に火傷を負うと佐助もまた自らの目をつぶして醜くなった春琴を見えないようにするなど，谷崎文学のマゾヒズム的恋愛歓喜と女性拝跪の極致を垣間みさせる作品である。

14. 南アジア文学作品６点のネパール語，ネワール語への翻訳と出版　(K.M. シャクヤ)

当プロジェクトでは，南アジア諸国（バングラデシュ，ブータン，インド，モルジブ，パキスタン，スリランカ）の文学作品を，ネパール語またはネワール語に翻訳して出版する。すでに，助成を受けてインドなどの文学作品を翻訳出版した実績がある。本年度は，インド（カンナダ語作品），パキスタン，バングラデシュ，ブータン，スリランカ，モルジブから作品を１点ずつ選び，合計６点をネパール語またはネワール語に翻訳して出版する。本年度の助成は，これら作品の翻訳費のみの助成である。

15. *Thai PEN Anthology* のマレーシア語への翻訳と出版　(アブバカール H.)

本書は，タイのペンクラブ(PEN)の編纂による詩と短編のコレクションである。東南アジアの伝統として，文学作品には啓蒙主義的な社会関与がみられる作品が多いが，このコレクションではそうした社会派的な傾向だけでなく，現代的な表現形態を追求した作品も含まれている。タイ文学の全体的な傾向をマレーシアに紹介するうえで，なかなか優れた選択であると思われる。助成対象者のグループは，文学者のグループであるため，東南アジアの文学作品をマレーシアに紹介するにふさわしい人々である。

16. *The Unknown Craftsman* と *Botchan* のベンガル語への翻訳と出版　(B. チョウドリ)

前書は，庶民の使う日常の器などに美を見出した民芸運動の創始者，柳宗悦の作品である。ベンガル地方も民俗工芸の盛んな地域で，グルショドイ・ドットという柳とちょうどよく似た主張を行った知識人も生んだ土地である。後書は，夏目漱石の初期の代表作『坊ちゃん』である。ユーモアに富んだ文体で，明治初期に松山の中学校の教師になった江戸っ子の主人公が巻き起こす騒動を描いた作品であるが，同時に近代化のなかで消えようとする古きよき時代精神を哀切をもって描いた作品でもある。

VI-3. 東南アジア諸語辞書編纂出版助成

助成対象

(継4)：継続4年目

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 (円)
1	現代ヴェトナム語大辞典	
(継4)	川本 邦衛　慶応義塾大学言語文化研究所　所長	5,500,000

助成対象概要

当プロジェクトは，1981年度，1983年度および1986年度に助成したプロジェクトの追加申請である。ワードプロセッサを用いて原稿をフロッピーディスクに打ち込み，電算写植に連繋させる方法を用いることにより，校正回数を減らし，経済的な印刷を行うことを目的にしており，編纂作業は着実に進んでいる。作業は最終的な見出し語数5万語を目指して，編纂作業から出版作業の段階の一部に入っており，1994年3月の出版を予定している。

VII. その他の助成

VII－0．その他の助成の概要

ＩからＶまでに紹介してきた基本的なプログラムのほか，これらに関連し，本年度も「計画助成」と「成果発表助成」を行った。

「計画助成」の主旨は,財団独自の調査と企画による長期的あるいは弾力的な助成の展開にあり，昨年度同様助成対象となるのは，以下の３項目のいずれかに該当するものとした。それらは，①現在および将来の財団の助成プログラムを展開するうえで重要と思われるもの，②わが国の民間助成活動を活発化し，その発展を図るうえで重要と考えられるもの，③その他，他財団との共同研究として，あるいは緊急を要するものとして特に民間財団の助成の意義が大きいもの，である。これらについては一般公募は行わず，財団事務局と関係者の話し合いによって必要な時期に計画書を提出してもらい，財団内部の企画会議で審査を行い，年３回の理事会で決定している。ただし，特に緊急を要するものについては，企画会議の審査を経て理事長の決済で決定できるものとしている(結果を理事会に報告する)。本年度は 13 件，3,255 万円に助成した。

「成果発表助成」は,トヨタ財団の研究助成等によって得られた成果を広く社会に発表すること，および成果を次のステップへ向けて展開するための契機とすることを目的としている。具体的には，報告書の印刷，出版物の刊行，シンポジウム等の開催，国際学会への出席などの経費が助成の対象である。財団の助成受領者から随時申請を受け付け，企画会議で審査・決定している。本年度は 13 件，2,414 万円の助成を行った。

なお，企画会議とは理事長，常務理事，財団スタッフによる会議で，原則として毎月開催し，上記の審査をはじめ財団活動の主要事項を審議する場である。

VII- 1. 計画助成

助成対象一覧

	テーマ 代表者　団体名	助成金額 (円)
1	第2回日本ネットワーカーズ・フォーラムの開催——その準備と検討——（2回目） 播磨 靖夫　日本ネットワーカーズ会議	3,500,000
2	第二次世界大戦中のフィリピンにおける日本の占領軍政およびその前後期に関する史料および口述記録の整理・収集・利用方法を検討する（第3年度） 池端 雪浦　日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム	3,500,000
3	社会科学研究協議会（SSRC）・全米学会協議会（ACLS）の東南アジア合同委員会への日本人研究者の参加（5回目） D.L. フェザーマン　米国社会科学研究協議会	1,050,000
4	日本の産業遺産のデータベースシステムの設計（第2年度） 内田 星美　産業遺産データベース研究会	4,000,000
5	中国・戦国時代の墓から出土した大型の漆棺の保存について——曹候乙墓主棺（内棺と外棺）及び包山二号墓内棺等，中国戦国時代の大型漆器の脱水保護（第1年度） 舒 之梅　中国湖北省博物館	5,000,000
6	民間公益活動の社会的役割——福祉分野を中心に——（第1年度） 関 成一　財団法人公益法人協会	500,000
7	(財)助成財団資料センターの運営（第8年度） 神田 博　財団法人助成財団資料センター	5,000,000
8	アジア図書館・図書目録の出版 山口 一郎　アジアセンター21	1,000,000
9	第5回日米大学図書館会議 清水 忠雄　大学図書館国際連絡委員会	500,000
10	東南アジアと東アジアにおける自律文化：1750年から1870年（第2年度） アンソニー リード　オーストラリア国立大学太平洋研究所	3,900,000

	テーマ 代表者　　団体名	助成金額 (円)
11	日本の英領マラヤ・シンガポール占領期（1941－1945）に関する史料調査（第１年度）	
	明石 陽至　　日本の英領マラヤ・シンガポール占領期フォーラム	3,000,000
12	日本民法典英訳事業（第１年度）	
	樋口 範雄　　民法英訳研究会	1,100,000
13	雑誌「ボランタス」特集号発行及びシンポジウム開催援助	
	神田 博　　財団法人助成財団資料センター	500,000
	計画助成合計　　**13** 件	**32,550,000**

助成対象概要（計画助成）

1．第2回日本ネットワーカーズ・フォーラムの開催
（日本ネットワーカーズ会議）

近年，さまざまな社会的背景を伴った市民活動が，各地で活発に展開されている。今後の社会状況の変化を考慮したとき，行政や企業とは異なる論理に基づくこうした活動がもつ重要性は，ますます高まるものと思われる。

今回のフォーラムでは，1989年に行われた第1回の成果を踏まえ，市民活動における「ネットワーキング」を，社会的にインパクトあるものとしていくための方策について，アメリカのNPO（Non-profit Organizations）関係者等も交えて，主に実務的な観点から，密度の濃い議論を行うこととしている。

2．第二次世界大戦中のフィリピンにおける日本の占領軍政およびその前後期に関する史料および口述記録の整理・収集・利用方法を検討する
（日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム）

当フォーラムは，今回が第3年度にあたる。第1年度は，研究者のネットワークづくり，文献目録作成，口述資料作成のための準備。第2年度は，日本，フィリピン，アメリカでの史料調査，口述記録の収集および和文ニュースレターでの報告。また，ニュースレターを要約して英文ニュースレターも発行した。本年度は，さらに台湾，オーストラリアによる史料の発掘を行うほか，補足的史料調査および口述記録の収集を行い，それらを整理・編集・刊行する。

3．社会科学研究協議会（SSRC）・全米学会協議会（ACLS）の東南アジア合同委員会への日本人研究者の参加
（米国社会科学研究協議会）

財団では，東南アジア合同委員会からの要請によってすでに4回，日本人研究者の参加費用を助成してきた。また，昨年度の会合は一部日本で開催され，日本の東南アジア研究者との交流が図られた。

今回は，これを契機に若手の日本人の東南アジア研究者を同委員会のメンバーとすることにより，研究者の交流の場を広げようというものである。

本年度は，ヴィクトリア（カナダ）とニューヨーク（アメリカ）での会合が予定されている。

4．日本の産業遺産のデータベースシステムの設計
（産業遺産データベース研究会）

当研究会は，1990年度の助成において，データベースの枠組みやシステムについて，関係者で議論し，他分野での同様な試みについても検討してきた。

今回はそれを受けて，関係学会との連絡調整の下に全国的な調査体制を確立し，同時に具体的な地域と分野についてパイロット・スタディを行い，将来のデータベース確立の具体的課題を探ろうとする。多くの課題や困難はあるが，どこかが取り組まなければならない緊急性のあるテーマである。

5．中国・戦国時代の墓から出土した大型の漆棺の保存について
（中国湖北省博物館）

中国武漢の湖北省博物館には，当時の姿をとどめたままで発掘された3つの大型漆彩絵木棺が保存されている。地下水によって保存されてきた木製遺物は，自然乾燥させると崩壊する。しかし常に水を噴霧し続けることによる現在までの保管方法ではすでに限界にきており，脱水処理と化学的な保護対策が緊急に必要になってきた。

今回のプロジェクトは，これまでに中小規模の木器で確立した10年余の試行錯誤による独自の化学処理による木製遺物の保存方法（乙二酸法）を，大型漆彩絵木棺に適用し，その永久的な保存を図ろうとするものである。

6．民間公益活動の社会的役割——福祉分野を中心に
（財団法人公益法人協会）

民間公益活動に関する研究は，近年次第に盛んになりつつあるが，まだ研究者の層も薄く，地道な積み重ねは少ない。今回は民間公益活動のなかでも大きな位置を占める福祉の分野に焦点をあて，その現状と課題を探り，望ましいシステムの構築を検討する。

福祉領域の研究は，主に社会福祉法人を対象にそれぞれの専門分野の研究が多数行われてきたが，福祉プロパーの視点から一歩離れ，民法法人や任意団体等も含めて広く民間公益活動の立場から，その現状を再検討することの意義は大きい。

7．(財)助成財団資料センターの運営

(財団法人助成財団資料センター)

助成する側と助成を求める側の橋渡しを目的に設立された助成財団資料センターも，任意団体としての活動を開始以来すでに7年を経過し，着実に社会のなかに定着しつつある。また，昨年度末には英文の「日本の助成団体の概要」を発行，本年度からはフィランソロピー研究会による独自の研究活動も始まったが，充実した活動を展開するに十分な財政基盤の確立には，いま一歩至っていない。今後は極力，プロジェクト単位の助成に切り替えることを期待し，本年度も引き続き財政的支援が必要と判断し，あえて運営費の助成を行う。

8．アジア図書館・図書目録の出版

(アジアセンター21)

アジアセンター21は，アジア諸国を中心に開発途上国の異文化理解を促進していくためのアジア文化センター，および，図書資料センターとしての「アジア図書館」の設立を目指して1981年2月に発足した市民団体である。

当プロジェクトは，さらに多方面からの支援を受けて，「アジア図書館」設立へ向けての運動を，より本格的なものとしていくことを目的に，これまでに収集した日本語表記の図書42,000冊と外国語図書に関する「目録」を作成・発行することとしている。

9．第5回日米大学図書館会議

(大学図書館国際連絡委員会)

多種多様な学術情報の集積体としての大学図書館の電子化や情報流通の促進は，学術研究体制の基盤整備の強化にとって大切なことである。日米大学図書館会議は，1969年の第1回以来過去4回開催されている。

今回の第5回会議では，学術情報の国際流通を促進するべく，日本とアメリカからの専門家の参加・協力によって大学図書館の電子化とシステム化等の課題に取り組む。本会議のもつ日本側からの国際的な学術情報の提供としての意義は大きい。

10．東南アジアと東アジアにおける自律文化：1750年から1870年　(オーストラリア国立大学太平洋研究所)

当研究は，財団の長期計画立案のための試行的なプロジェクトとして，アジアの現在のダイナミズムの源を西欧文化が入ってくる以前の社会に見出そうという試みで，オーストラリア，東南アジア，東アジア，北アメリカ，ヨーロッパの歴史研究者による国際共同研究である。

第1年度には共同研究者が会合をもち，問題についての共通の認識を明確にし，今後の研究計画の戦略が検討された。また，各国での文献収集も進められている。第2年度には各国の文献のカタログ化，保存，翻訳，出版を行う予定である。

11．日本の英領マラヤ・シンガポール占領期(1941−1945)に関する史料調査

(日本の英領マラヤ・シンガポール占領期フォーラム)

戦後45年以上もの歳月が経過しているにもかかわらず，近年アジア各地で日本の戦争責任を問う声が一段と高まっている。このことからも，当時の軍政期に関する史料をおさえた研究を行い，その時代に関して日本およびアジア諸国で共通の認識を得ることは不可欠であろう。

当フォーラムで，マレーシアとシンガポールの戦後独立史の解明において重要な時期である日本占領期に関する史料および口述記録を，両国の研究者と連絡をとりつつ収集し調査を行う。

12．日本民法典英訳事業

(民法英訳研究会)

既存の日本民法の英訳は，いずれも外国で十分に利用可能なものとはいえないという。今日のわが国と海外諸国との摩擦の多くが法制度をめぐる理解の違いに起因していることを考えると，民法の信頼できる定訳を確立することは重要かつ緊急の課題といえる。

当研究では，アメリカ人法律家による民法の英訳作業を基にイギリス・アメリカ・フランス・ドイツ法にも通じた共同者が検討と討議を重ね，徐々に成案に近づけていくというもので，比較法的かつ歴史的な研究を踏まえて民法の英訳を行うものである。

13. 雑誌「ボランタス」特集号発行及びシンポジウム開催援助　　(財団法人助成財団資料センター)

雑誌「ボランタス」は，民間非営利団体に関する国際学術雑誌で，1990年の秋に創刊され，きわめて水準が高く，関係者より高く評価されている。同誌は，助成財団の研究と政策に関する特集号の発行を企画し，これに関連して1993年10月に，フランスにおいて国際シンポジウムの開催を計画している。

この機会に日本の助成財団の実務家，研究者がシンポジウムに参加し，諸外国の研究者等と交流することが，日本の助成財団にとって有意義であると考え，他の有志財団とともに資料センターへ助成するものである。

VII-2. 成果発表助成

助成対象一覧

	母体となる助成の番号	助成題目 代表者	助成内容	助成金額(円)
1	89-III-035	朝鮮総督府調査資料に現われた文化政策の考察——文化人類学的観点から—— 崔 吉城	②	2,000,000
2	90-III-007	中国の乾燥地における砂漠化防止に関する実証的研究——毛烏素砂漠におけるモデル牧農場建設に向けて—— 姚 洪林	①	3,000,000
3	85-II-264 86-III-021	日米戦時交換船・戦後帰還船“帰国者”に関する基礎的研究 村川 庸子	①	2,040,000
4	88-I-143	ノルマン・シチリア王国の統治構造——ラテン，イスラム，ビザンツ文化の接触・相互影響下の行政制度—— 高山 博	②	2,000,000
5	90-II-212	インドネシア・タイにおける精神遅滞者への地域生活援助に関する実践的研究 岩崎 正子	①	1,200,000
6	88-KK-001 89-KK-001 90-K-006	ミニコミ紙・誌の実態調査及び収集とデータベースの作成「『ミニコミ総目録』刊行記念シンポジウム」の開催 丸山 尚	③	400,000
7	90-I-205	サンパウロのファベーラ（貧民街）におけるエイズの意識・行動・知識調査 小貫 大輔	④	500,000
8	90-III-001	ボゴール博物館と連携して，インドネシアの自然史研究を推進する計画 吉井 良三	②	1,000,000
9	85-III-019	職場集団における文化摩擦と葛藤——便宜置籍船乗組員に関する研究—— 大橋 信夫	②	3,000,000
10	89-II-220 90-III-018	中国における水棲哺乳類の棲息環境汚染に関する生態学的研究——ヨウスコウカワイルカの保護を目指して—— 周 開亜	③	3,000,000

母体となる助成の番号	助成題目 代表者	助成内容	助成金額 (円)
11 90-III-025	アジアに於ける近代建築に関する基礎研究 藤森 照信	①	3,500,000
12 88-F-003	第二次大戦中のインドネシア日本占領軍政に関する同時代史料及び口述記録の整理・収集・利用方法を検討する 中村 光男	①	1,000,000
13 89-Ⅰ-025	タイの社会変動と不平等の拡大——中間層の出現とその役割を中心に—— 鈴木 規之	②	1,500,000
	成果発表助成合計　13 件		**24,140,000**

(注)表中の助成内容欄のマル数字は下記の内訳を示す。
①成果報告書の印刷　②出版物の刊行　③シンポジウム等の集会開催
④国際的学術研究集会への出席　⑤補足調査等の仕上げ業務

Ⅷ. 会計報告・事業日誌

VIII－0。事業実績の概要

今年度の助成事業の内訳は，次ページの表に示すとおりである。研究助成はⅠ，Ⅱ，Ⅲ種計で 56 件 1 億 9,940 万円，市民活動助成は 19 件 3,500 万円，市民研究コンクール助成は 8 件 4,800 万円，国際助成は 82 件 1 億 1,364 万 5,643 円*，インドネシア若手研究助成は 61 件 1,528 万 8,891 円*，「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成は日本向けが 17 件 3,052 万円，アジア相互間が 16 件 2,200 万 9,527 円*，東南アジア諸語辞書編纂出版助成は 1 件 550 万円，計画助成は 13 件 3,255 万円，成果発表助成は 13 件 2,414 万円，以上合計すると助成件数は 286 件，助成金総額は 5 億 2,605 万 4,061 円である。

その結果これまで18年間の助成金累計は件数で3,210件，金額で83億1,075 万 3,479 円となった。なお，以上の金額は理事会決定段階のものであり，その後の変更（一部助成金の返納等）は含んでいない。

今年度の会計状況は，p.114 以降の 3 つの表に示すとおりである。

また今年度の当財団主催事業としては，第 32 回報告会 (p.20 参照)，インドネシア若手研究助成報告会（インドネシア，チパナス）(p.80 参照) を実施した。

＊金額が円単位まで細かくなっているのは，海外向け助成金については，為替相場による現地通貨額の変動を防止するために，決定額をドルにしたためである。

助成金支出累計表

助成種別		1975～1987年度	1988年度	1989年度	1990年度	1991年度	1992年度	累計
研究助成		943 3,214,740	59 200,700	62 201,000	56 200,700	59 201,200	**56** **199,400**	1,235 4,217,740
市民活動助成		54 88,600	16 25,000	18 27,300	19 32,400	23 35,400	**19** **35,000**	149 243,700
市民研究コンクール助成		145 238,600	10 28,000	1 20,000	— —	15 9,000	**8** **48,000**	179 343,600
国際助成		331 973,483	67 113,229.[411]	72 114,110.[950]	68 110,251.[232]	66 109,987.[324]	**82** **113,645.[643]**	686 1,534,707.[560]
インドネシア若手研究集会助成		17 5,030	18 5,116.[274]	24 6,490.[140]	31 9,754.[576]	35 9,998.[760]	**61** **15,288.[891]**	186 51,678.[641]
国際学術研究集会助成		30 60,263	［当プログラムは1980年度にて終了］					30 60,263
「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成	日本向け	117 237,110	4 10,200	6 11,250	11 17,600	13 27,410	**17** **30,520**	168 334,090
	アジア相互間	39 195,920	12 39,344	10 45,341.[110]	17 44,783.[510]	14 24,303.[664]	**16** **22,009.[527]**	108 371,701.[811]
東南アジア諸語辞書編纂出版助成		5 34,500	— —	— —	— —	— —	**1** **5,500**	6 40,000
東南アジア研究英訳刊行助成		1 14,530	1 14,549.[227]	1 13,963.[360]	［当プログラムは1989年度にて終了］			3 43,042.[587]
フェローシップ助成		10 235,000	［当プログラムは1984年度にて終了］					10 235,000
計画助成		42 142,100	9 35,650	11 32,800	12 30,700	16 34,620	**13** **32,550**	103 308,420
特別助成ほか		8 65,150	4 5,600	— —	— —	— —	— —	12 70,750
成果発表助成		246 313,229.[880]	22 29,650	17 30,270	18 29,580	19 29,190	**13** **24,140**	335 456,059.[880]
合計		1,988 5,818,255.[880]	222 507,038.[912]	222 502,525.[560]	232 475,769.[318]	260 481,109.[748]	**286** **526,054.[861]**	3,210 8,310,753.[479]

(注) 1．金額は各年度の理事会で決定されたものであり，その後の変更については含んでいない。
2．上段は件数を表す。
3．下段は金額（千円）を表す。
4．計画助成金はフォーラム助成，特別研究助成，民間助成活動促進助成のための助成，他のプログラムと関連する助成，他の財団との共同助成への参加，緊急な対応を要する助成を示す。
5．特別助成ほかは10周年記念特別助成金，日タイ修好100周年記念特別助成金，その他の助成金を示す。

Ⅷ－1．1992(平成4)年度 会計報告

1．収支計算書（自 1992年4月1日～至 1993年3月31日）

	項目	金額(円)
収入	財産運用収入	723,518,202
	雑収入	11,582,081
	当期収入合計（A）	735,100,283
	前期繰越収支差額	256,197,878
	収入合計　　(B)	991,298,161
支出	事業費	696,692,606
	管理費	138,086,579
	固定資産取得支出	6,335,575
	特定資産支出	10,469,315
	当期支出合計（C）	851,584,075
	当期収支差額（A）－（C）	▲ 116,483,792
次期繰越収支差額*	(B)－(C)	139,714,086

＊次期繰越収支差額は，次年度収入予算繰入

2．貸借対照表（1993年3月31日現在）

借方科目	金額（円）	貸方科目	金額（円）
(資産の部)		(負債の部)	
現金・預金	55,555,999	未払金	299,682,601
		預り金	3,457,262
有価証券	12,241,841,972	退職給与引当金	61,235,390
		助成金準備金	400,000,000
前払金	4,136,246	(正味財産の部)	
		正味財産	11,593,449,759
立替金	2,555,122	(うち基本金)	(7,000,000,000)
		(うち準基本金)	(4,400,000,000)
固定資産	53,735,673	(うち当期正味財産減少額)	(112,248,180)
合　計	**12,357,825,012**	合　計	**12,357,825,012**

3. 財産推移表

年度末	基本財産（円）	運用財産(円)*	正味財産計(円)
1974（昭和49）年度	3,000,000,000	133,057,559	3,133,057,559
1975（昭和50）年度	3,000,000,000	2,157,688,541	5,157,688,541
1976（昭和51）年度	3,000,000,000	3,186,517,747	6,186,517,747
1977（昭和52）年度	3,000,000,000	5,287,322,930	8,287,322,930
1978（昭和53）年度	3,000,000,000	7,399,047,725	10,399,047,725
1979（昭和54）年度	3,000,000,000	7,861,285,758	10,861,285,758
1980（昭和55）年度	7,000,000,000	4,003,621,400	11,003,621,400
1981（昭和56）年度	7,000,000,000	4,149,064,517	11,149,064,517
1982（昭和57）年度	7,000,000,000	4,287,154,437	11,287,154,437
1983（昭和58）年度	7,000,000,000	4,516,076,037	11,516,076,037
1984（昭和59）年度	7,000,000,000	4,657,945,551	11,657,945,551
1985（昭和60）年度	7,000,000,000	4,790,109,445	11,790,109,445
1986（昭和61）年度	7,000,000,000	4,895,989,935	11,895,989,935
1987（昭和62）年度	7,000,000,000	4,897,677,802	11,897,677,802
1988（昭和63）年度	7,000,000,000	4,638,898,571	11,638,898,571
1989（平成元）年度	7,000,000,000	4,675,999,340	11,675,999,340
1990（平成２）年度	7,000,000,000	4,707,768,117	11,707,768,117
1991（平成３）年度	7,000,000,000	4,705,697,939	11,705,697,939
1992（平成４）年度	**7,000,000,000**	**4,593,449,759**	**11,593,449,759**

＊運用財産のなかには，その他の固定資産および次期繰越収支差額を含む。

4. 助成金変更および返納一覧　　(自 1992年4月1日～至 1993年3月31日)

	助成番号	助成代表者・団体名 助成金種別 事由	助成決定日	上段：決定金額（円） 中段：変更および返納金（円） 下段：最終助成額（円）
1	83-B-014	井村文化事業社 「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成 助成辞退	1984.3.13	5,100,000 5,100,000 0
2	84-B-010	めこん 「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成 助成辞退	1985.3.7	1,220,000 1,220,000 0
3	84-B-013	南雲堂 「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成 翻訳枚数減	1985.3.7	1,700,000 280,000 1,420,000
4	85-B-006	新宿書房 「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成 助成辞退	1986.3.20	2,000,000 2,000,000 0
5	91-B-01	春秋社 「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成 翻訳枚数減	1991.10.3	1,960,000 60,000 1,900,000
6	91-B-06	段々社 「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成 翻訳枚数減	1991.10.3	1,960,000 1,030,000 930,000
7	91-B-11	平凡社 「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成 翻訳枚数減	1991.10.3	1,680,000 340,000 1,340,000
8	6C-008	漆原 ひろみ 第6回市民研究コンクール助成 助成金残	1992.3.17	600,000 1,292 598,708
9	6C-052	守　隆 第6回市民研究コンクール助成 助成金残	1992.3.17	600,000 789 599,211

(注) この表は，各年度の年次報告書記載の助成金額（理事会で決定した金額）を，後に助成対象者側において，計画変更，辞退等の理由で変更したものの一覧表である。

Ⅷ－2．1992(平成4)年度 事業日誌

1992年4月1日	研究助成・市民活動助成公募開始	
4月4日	「環」No.1 発行	
4月22日	トヨタ財団レポート No.60 発行	
5月1日	インドネシア若手研究助成報告会（インドネシア・チパナス）	
5月31日	*Occasional Report* No.15（英文）発行	
	研究助成公募の受付締切（681件）	
6月16日	第63回理事会	
	1991(平成3)年度事業報告，収支決算の承認	
	インドネシア若手研究助成，助成先決定	61件
	計画助成，助成先決定	4件
	評議員の選任	
	アドバイザー，選考委員・専門委員の選任	
	成果発表助成，助成先報告	6件
	第17回評議員会	
	1991(平成3)年度事業報告，収支決算の承認	
	理事・監事の選任	
	財団活動状況の報告	
6月20日	市民活動助成（第1期）公募の受付締切（125件）	
7月1日	第64回理事会	
	会長・理事長・常務理事の選任	
7月25日	トヨタ財団レポート No.61 発行	
	バイラーン No.12 発行	
8月10日	1991（平成3）年度年次報告（和文）発行	
8月31日	「環」No.2 発行	
9月28日	第65回理事会	
	研究助成，助成先決定	56件
	市民活動助成(第1期)，助成先決定	10件
	国際助成，助成先決定	82件
	翻訳出版促進助成(日本向け)，助成先決定	17件
	翻訳出版促進助成(アジア相互間)，助成先決定	16件
	東南アジア諸語辞書編纂出版助成，助成先決定	1件
	計画助成，助成先決定	5件
	成果発表助成，助成先報告	2件

10月15日	第18回助成金贈呈式
	市民活動助成公募開始
10月19日	トヨタ財団レポート No.62 発行
	バイラーン No.13 発行
11月30日	*Occasional Report* No.16（英文）発行
12月15日	市民活動助成（第2期）公募の受付締切（85件）
12月25日	1991（平成3）年度年次報告書（和文）発行
1993年1月20日	「環」No.3 発行
1月27日	トヨタ財団レポート No.63 発行
	バイラーン No.14 発行
3月13日	第32回研究報告会（東京）「"適地技術"と"開発協力"～多様なあり方を考える～」
3月16日	第66回理事会
	市民活動助成（第2期），助成先決定　9件
	第5回研究コンクールフォローアップ助成，助成先決定　1件
	第6回市民研究コンクール本研究助成，助成先決定　7件
	計画助成，助成先決定　4件
	1992年度収支決算見込みの説明・承認
	1993年度事業計画，収支予算の承認
	選考委員の選任
	成果発表助成，助成先報告　5件
3月26日	「環」No.4 発行

事務局員

1993年3月31日現在

常務理事	山口日出夫
常務理事付	黒川千万喜
事務局長	亀沢　直道
総務部	亀沢　直道（部長兼）
総務・財務部門	伊藤　勝義（課長）　川島　治彦
	成田　真澄（主任）　木村　清子
助成業務部門	渡辺　元（兼）　牧田　東一（兼）
	土方かほる　有泉　志乃
	村井　美奈
プログラム担当部	黒川千万喜（部長兼）
研究助成部門	久須美雅昭（プログラム・オフィサー）
	渡辺　元（プログラム・オフィサー）
	田中　恭一（プログラム・アシスタント）
国際助成部門	若山　佳子（チーフ・プログラム・オフィサー）
	牧田　東一（プログラム・オフィサー）
	姫本由美子（アシスタント・プログラム・オフィサー）
プログラム・コンサルタント	山岡　義典

1992（平成4）年度年次報告

発行者　財団法人　トヨタ財団
〒163-04 東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階・私書箱236
TEL.（03）3344-1701～3
発行日　1993年8月20日
制　作　童夢出版株式会社
印　刷　真友工芸株式会社